覚園寺旧境内遺跡（No.435）

二階堂字会下 351 番 1

例　　言

1．本報は「覚園寺旧境内遺跡」内、二階堂字会下351番1における埋蔵文化財発掘調査報告である。

2．調査期間　2005年6月21日～同年8月31日

　調査面積　30㎡

3．本調査地点の略称はKNE351とした。

4．調査体制

　担　当　者　馬淵和雄

　調　査　員　松原康子（資料整理）・鍛治屋勝二・松葉崇・根本志保（資料整理）・沖元道（資料整理）

　調査補助員　鈴木弘太・岩崎卓治（資料整理）

　作　業　員　河原龍雄・田口康雄・沼上三代治（社団法人鎌倉シルバー人材センター）

5．本報作成分担

　遺構図整理　沖元

　遺物実測　　松原・根本・岩崎

　同墨入れ　　松原・根本・岩崎

　同観察表　　松原

　原稿執筆　　馬淵

　編集・総括　馬淵

目　次

本　文　目　次

第一章　調査地点の概観 …… 165

1．位置と地勢 …… 165

2．歴史的環境 …… 168

第二章　調査の概略 …… 174

1．調査にいたる経緯 …… 174

2．調査方法 …… 174

3．調査経過 …… 175

第三章　調査結果 …… 176

第1節　概要 …… 176

1．層序 …… 176

第2節　各説 …… 178

1．Ⅰ面 …… 178

2．Ⅱ面 …… 178

3．Ⅲa面 …… 183

4．Ⅲb面 …… 187

5．Ⅲc面 …… 188

6．Ⅲd面 …… 189
7．Ⅳa面 …… 193
8．Ⅳb面 …… 193
9．Ⅴa面 …… 193
10．Ⅴb面 …… 195
11．Ⅵ面 …… 197

第四章　まとめと考察 …… 205

1．遺構の変遷と年代 …… 206
2．火災と泥岩地形層の年代的位置づけについて …… 209
3．まとめ …… 211

挿　図　目　次

図1　調査地点と周辺の遺跡・旧跡 …… 166
図2　明治15年頃の鎌倉中心部と調査地点 …… 167
図3　覚園寺境内絵図 …… 171
図4　調査区設定図 …… 174
図5　調査区南壁土層断面 …… 177
図6　Ⅰ面遺構全図・Ⅰ面出土遺物 …… 179
図7　Ⅱ面遺構全図・Ⅱ面出土遺物（1） …… 180
図8　Ⅱ面出土遺物（2），
　　囲炉裏・同出土遺物 …… 181
図9　Ⅱ面土坑２～４，同出土遺物 …… 182
図10 Ⅲa面遺構全図，礎板列１，
　　Ⅲa面出土遺物（1） …… 184
図11 Ⅲa面出土遺物（2），溝４，
　　同出土遺物 …… 185
図12 Ⅲb面遺構全図，竪穴建物1，
　　同出土遺物 …… 186
図13 溝２・土坑10・土坑5，同出土遺物 …… 187
図14 Ⅲc面遺構全図・溝５・
　　P.18出土遺物 …… 189
図15 Ⅲd面遺構全図・同出土遺物 …… 190
図16 建物１・柱穴列１・柱穴列２，
　　同出土遺物 …… 191
図17 Ⅳa面・Ⅳb面遺構全図，
　　同面出土遺物 …… 192
図18 Ⅴa面・Ⅴb面遺構全図，
　　同面出土遺物 …… 194
図19 Ⅴa面土坑６・９，段１，
　　同出土遺物 …… 195
図20 Ⅵ面遺構全図，Ⅵ面出土遺物 …… 196
図21 Ⅵ面建物２・３ …… 197
図22 遺構変遷図（1） …… 206
図23 遺構変遷図（2） …… 207
図24 近隣調査地点対応図 …… 208
図25 泥岩地形層・炭化物層対比図 …… 210

表　目　次

表1　出土遺物観察表（1） …… 198
表2　出土遺物観察表（2） …… 199
表3　出土遺物観察表（3） …… 200
表4　出土遺物観察表（4） …… 201
表5　出土遺物観察表（5） …… 202
表6　出土遺物観察表（6） …… 203
表7　出土遺物計量表 …… 204

図　版　目　次

図版１-1　薬師堂ケ谷入口から谷奥（北）を望む …… 212
1-2　調査地点付近の薬師堂ケ谷（北から）
1-3　調査地点近景（東から）
図版２-1　１区Ⅰ面全景（東から）…… 213
2-2　１区Ⅰ面全景（西から）
2-3　１区Ⅰ面土師器皿（図６-2）出土状況（東から）
図版３-1　１区Ⅱ面全景（東から）…… 214
3-2　１区Ⅱ面全景（西から）
3-3　２区Ⅱ面全景（東から）
3-3　２区Ⅱ面全景（西から）
図版４-1　Ⅱ面囲炉裏（東から）…… 215
4-2　Ⅱ面土坑２～４　遺物出土状況（南から）
4-3　Ⅱ面石組遺構（南から）
4-4　Ⅱ面漆器椀（図８-39）出土状況（南から）
4-5　Ⅱ面囲炉裏周辺遺物出土状況（東から）
図版５-1　１区Ⅲａ面全景（東から）…… 216
5-2　１区Ⅲａ面全景（西から）
5-3　２区Ⅲａ面全景（東から）
5-4　２区Ⅲａ面全景（西から）
図版６-1　Ⅲａ面１区南壁寄り遺物出土状況（南から，一部Ⅱ面遺物含む）…… 217
6-2　Ⅲａ面西端の石列（北から）
6-3　Ⅲａ面溝４と右岸（西岸）の石組（北から）
図版７-1　１区Ⅲｂ面全景（東から）…… 218
7-2　１区Ⅲｂ面全景（西から）
7-3　２区Ⅲｂ面全景（東から）
7-4　２区Ⅲｂ面全景（西から）
図版８-1　Ⅲｂ面土坑５（南から）…… 219
8-2　Ⅲｂ面竪穴建物１（東から）
8-3　Ⅲｂ面漆器皿（図 13-22）出土状況（西から）
8-4　Ⅲｃ面P.18合わせ口漆器皿（図14-5・7・8）出土状況
図版９-1　１区Ⅲｄ面全景（東から）…… 220
9-2　１区Ⅲｄ面全景（西から）
9-3　２区Ⅲｄ面全景（東から）
9-4　２区Ⅲｄ面全景（西から）
図版10-1　２区Ⅲｄ下部面全景（東から）… 221
10-2　２区Ⅲｄ下部面全景（西から）
10-3　１区Ⅳａ面全景（東から）
10-4　１区Ⅳａ面全景（西から）
図版11-1　１区Ⅳｂ面全景（東から）…… 222
11-2　１区Ⅳｂ面全景（西から）
11-3　Ⅳｂ面土師器皿（図17-15・同-16,奥から）出土状況（北から）
11-4　Ⅳｂ面土師器皿（図 17-10）出土状況（西から）
図版12-1　１区Ⅴａ面全景（東から）…… 223
12-2　２区Ⅴａ面全景（東から）
12-3　２区Ⅴａ面全景（西から）
図版13-1　Ⅴａ面段１下駄（図 19-1）出土状況（東から）…… 224
13-2　Ⅴａ面角柱出土状況（北から）
13-3　Ⅴａ面P.29・P.30・土坑６検出状況（南から）
図版14-1　１区Ⅴｂ面全景（東から）…… 225
14-2　１区Ⅴｂ面全景（西から）
14-3　Ⅴｂ面段２（南から）
図版15-1　１区Ⅵ面全景（東から）…… 226
15-2　１区Ⅵ面全景（西から）
15-3　２区南壁際深掘り（東から）
15－4　Ⅵ面青磁碗（図20-6）出土状況（南から）
図版16-1　１区南壁中央部土層断面 …… 227
16-2　２区南壁土層断面
図版17　出土遺物１ …… 228
図版18　出土遺物２ …… 229
図版19　出土遺物３ …… 230
図版20　出土遺物４ …… 231
図版21　出土遺物５ …… 232
図版22　出土遺物６ …… 233
図版23　出土遺物７ …… 234

第一章　調査地点の概観

１．位置と地勢

鎌倉市二階堂の谷奥にある覚園寺は、その前身を大倉薬師堂という。調査地点のある谷を「薬師堂ケ谷」というのはそのためである。薬師堂に冠される「大倉（蔵）」の地名が、正式の郷名だったかどうかはわからない。郷の厳密な範囲も不詳である。現在の十二所明王院の場所に所在した大慈寺の場所が建暦二年（1212）四月十八日の立柱・上棟の際に「大倉郷」となっていることからすれば（『吾妻鏡』同日条）、朝比奈峠近くまで「大倉」と呼ばれていたことがわかる。しかし、三浦大介義明長子義宗は平安時代末期に現在の杉本寺付近に住んで杉本義宗を名乗っており、その頃すでにあの一帯が「杉本」と呼ばれていたことは確実である。また、平安時代末期あるいは鎌倉時代のごく初期には、鶴岡八幡宮の辺りは「小林郷北山」と呼ばれている（『吾妻鏡』治承四年1180十月十二日条）。「大倉」は「大倉谷」とも呼ばれるので、地形からみると現在の二階堂一帯が相応しい。本来は杉本と小林郷両地域の間にあった地名だったのかもしれない。なお、ここで「大倉」といった場合は杉本と小林郷北山に挟まれた地域をさす。すなわち、現在の鎌倉市雪ノ下三～五丁目、および二階堂と呼ばれている地域が相当する。

その一方で、平安時代末期の創建と推測される杉本寺は、遅くとも鎌倉時代初期には「大倉観音堂」と呼ばれている。してみると「大倉」は、広範囲の総称と、限定的な地域名称との両様で使われていたのかもしれない。それとも「杉本」が郷の名ではなく、いわば郷内の小字のようなものだったのだろうか。広範囲の大倉郷は、あるいは律令時代に「荏草（えかや）郷」と呼ばれていた地域の、後世の名前である可能性もあろう。そうであれば、時期は不詳にせよ、平安時代のある時点で変わったことになる。あるいは寛徳二年（1045）の荘園整理令に伴う郡郷再編の結果だろうか。しかし1000年近い歴史を持つ「大倉」の地名は、近代の行政当局による地名改変によって、鎌倉から失われた。

大倉は地勢上大きく二つに分かれる。すなわち、南半の山麓平野部と、北半の山稜部である。平野部は北からの二階堂川と東御門川が、東から下ってきた滑川本流に合流して形成されたもので、東西600～700m、南北400～500ｍほどの広さがある。この平野部は西側で鎌倉市域中心部の低平な沖積平野に出る。鎌倉時代に源頼朝が最初の幕府を置いたのがこの地である。北半の山稜部は東西・南北とも１km前後に及び、北端は今泉と境を接する。『吾妻鏡』建久二年（1191）二月十五日条によると、源頼朝は永福寺の寺地を求めるにあたり、この日夕刻大倉山の辺を歴覧したとあるので、北東のかなり奥まで「大倉山」と呼ばれていたことがわかる。

大倉山の山中には二階堂川支流の小河川が何本か流れ、それぞれが枝谷を形成する。薬師堂ケ谷の中央を流れる平子川も支流の１本であり、急な斜面を山腹に形成しながら西北から東南に向かって直線的に流下する。流域距離はほぼ1km、谷を出たところで北東から来た二階堂川に合流する。この川に開析された薬師堂ケ谷もやはり直線的な谷で、幅が狭く、平坦部は最大でも100mほどしかない。平坦部の標高は谷口で13mほど、谷尻では45mほどで、比高30mを越える。近世に成立したと推定される「覚園寺境内絵図」では、薬師堂ケ谷全体が寺の境内として描かれている。

調査地点は谷の入口から約400m入ったところにあり、ほぼ中間地点に近い薬師堂川右岸に位置する。原本が永享十一年（1439）以後成立の「境内絵図」（写）には、谷の途中に「門」と書かれた建物があり、そのすぐ南西脇にあたる。また「絵図」には、それぞれ「大楽寺」と「二条殿跡」と註された谷の窪みが西岸に見え、調査地点はこの二地点間の狭い川岸にある。地番は鎌倉市二階堂字会下351番１。

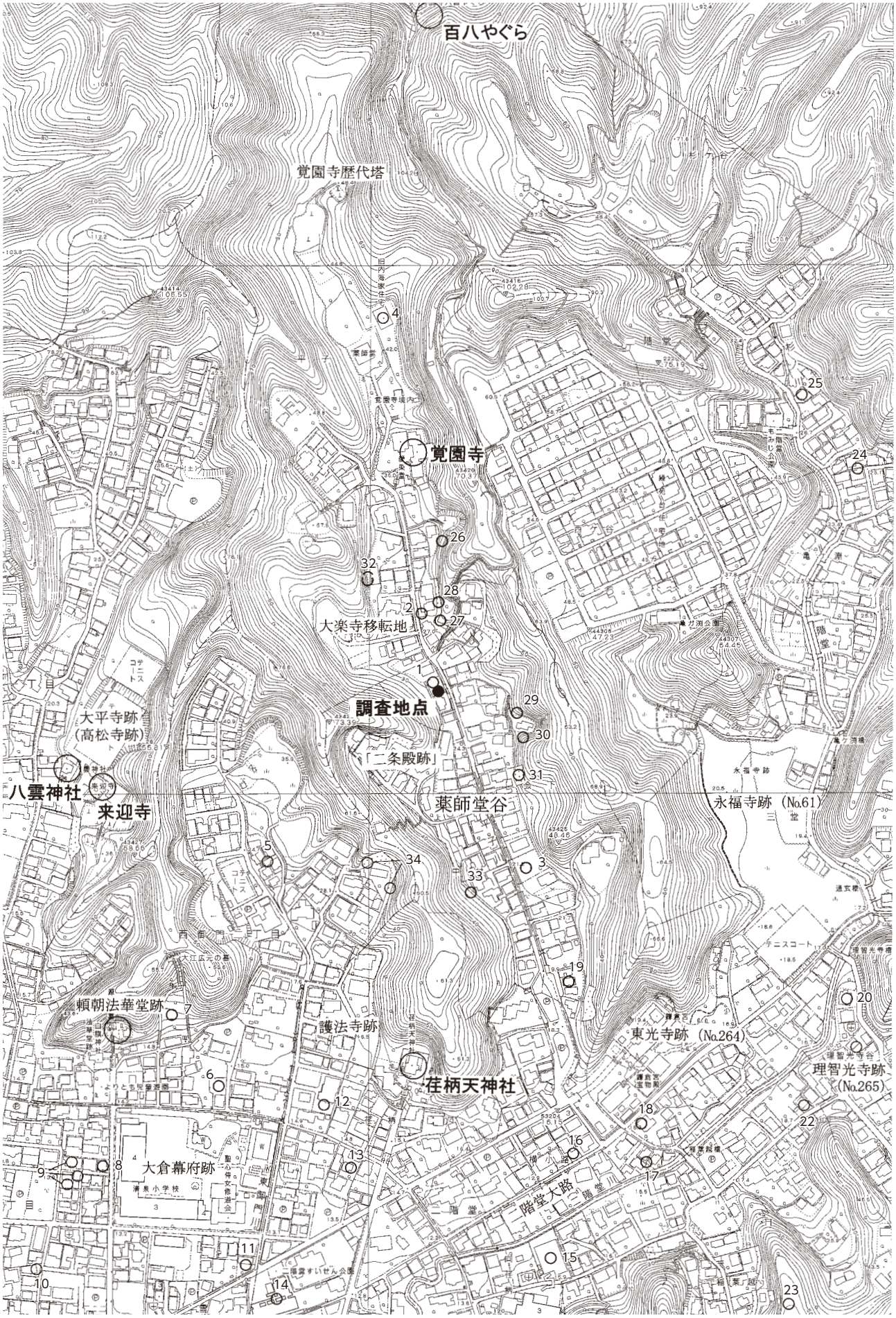


図１　調査地点と周辺の遺跡・旧跡

(№435覚園寺旧境内遺跡)

本調査地点　二階堂字会下351－1　1．二階堂字会下351－3外（伊丹2004)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26　第1分冊』(伊丹2010)　2．二階堂字平子412－1外（汐見1995)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12　第2分冊』(汐見1996）　3．二階堂字会下331－3外(降矢2004)『覚園寺旧境内発掘調査報告書』(2005齋木・降矢他)　4．二階堂字平子421(河野1979・1981)『覚園寺境内発掘調査報告書』(河野他1982）

(№193大倉幕府北遺跡)

5．西御門2－796－1外2筆(宮田2001)『大倉幕府北遺跡発掘調査報告書』(森・宮田2002）　6．西御門2－756-10・756－6(宮田・滝沢2004)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書25第1分冊』(宮田・滝沢2009)

(№461北条義時法華堂跡)

7．西御門2－686(福田2005)『北条義時法華堂跡確認調査報告書』(福田2005)

(№253大倉幕府跡)

8．雪の下3－704－3外(福田2005)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27　第2分冊』(福田2011)　9．雪の下3－701－1・3・14(馬淵・滝澤2002～2003)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21　第1分冊』(馬淵・滝澤他2005)　10．雪の下3－651－8(小林1997)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　第2分冊』(汐見1999)　11．雪の下3－637－4(熊谷2006～2007)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書27　第2分冊』(熊谷2011)

(№49大倉幕府周辺遺跡群)

12．二階堂荏柄58－4外（原2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18　第1分冊』(原2002)　13．二階堂字荏柄27－3（原2002)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22　第1分冊』(原2006)　14．二階堂字荏柄38－1（馬淵1991～1992)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書9　第2分冊』(馬淵1993)

(№259横小路周辺遺跡)

15．二階堂字向荏柄880・874（馬淵1982)『向荏柄遺跡発掘調査報告書』(馬淵他1985）　16．二階堂字横小路93－11（手塚1998)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書15　第2分冊』(野本1999）　17．二階堂字横小路110－3（宗台1994)『横小路周辺遺跡発掘調査報告書』(宗台他1996）　18．二階堂字四ツ石115－3（福田2002)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23　第2分冊』(福田2007）　19．二階堂字会下323外（原・福田2000)『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20　第2分冊』(福田2004）

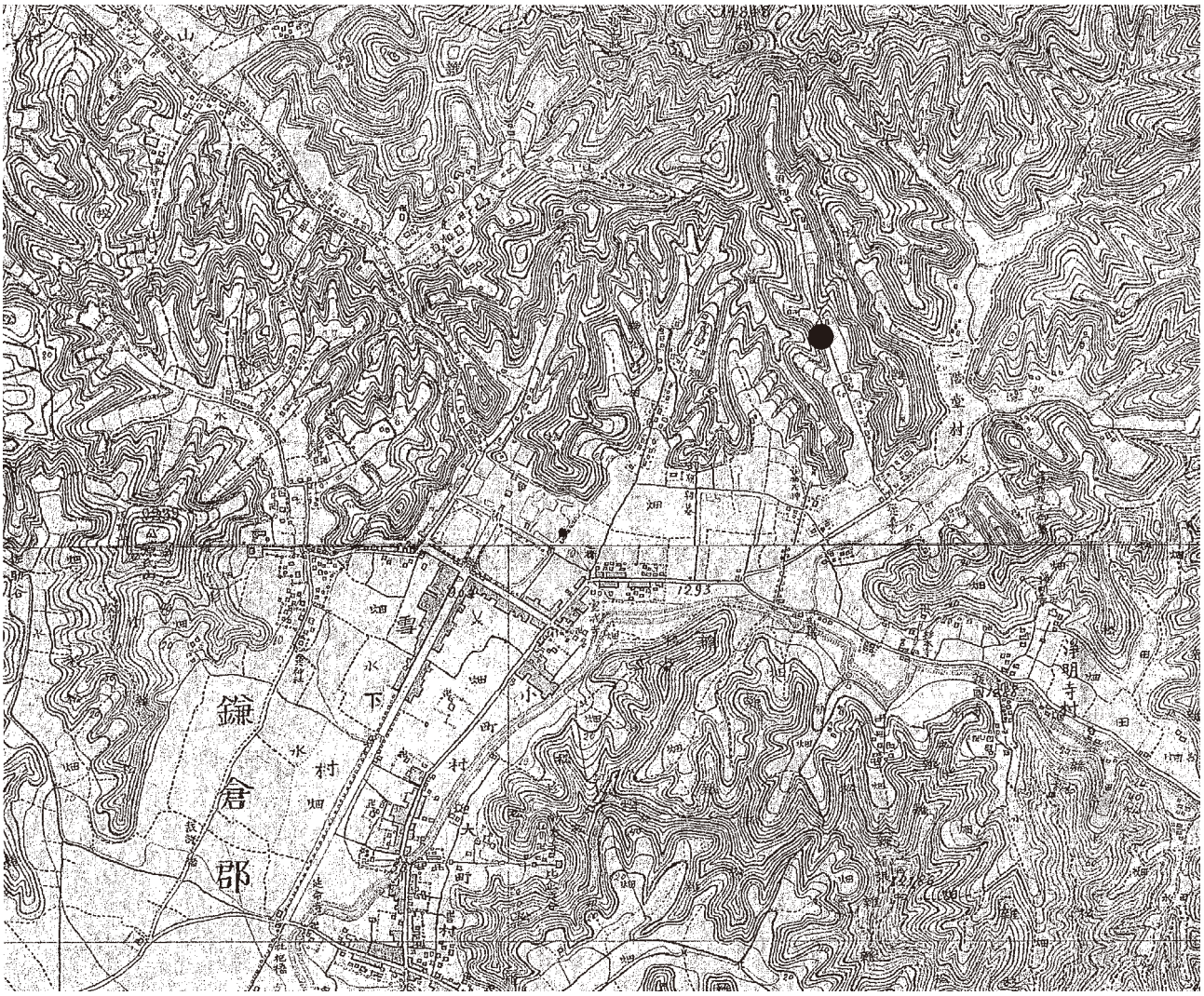


図2　明治15年頃の鎌倉中心部と調査地点（黒丸印，迅速測図第一測期第十測図）

２．歴史的環境

中世以前

薬師堂ケ谷内での発掘調査は、崖面のやぐら以外は多くない。したがって、この谷にいつごろから人が住み始めたかも明らかではないが、大倉郷の平野部域では早く縄文時代前期の土器が出土している（赤星1959）。荏柄天神社前で、地表下3mの砂層上から諸磯b式・阿玉台式の土器片や打製石斧、凹石、獣骨等が出土した。砂層面は標高9mなので、縄文前期～中期の古鎌倉湾の海岸線を推測させる資料となる。その後この平野部では、弥生時代中期以後歴史時代まで連続的に集落が営まれている。

弥生時代では、平野部の大倉幕府周辺遺跡群で中期後半～後期にかけての大規模な集落が確認されている（馬淵1998・同1999・斎木ほか2007）。また調査地点から指呼の距離にある薬師堂ケ谷入口の狭い平坦地で、西遠江伊場式の系譜をひく弥生時代後期後半の高坏が出土していることから（野本ほか1999）、調査地点付近にもこの時代から人の往来があった可能性は十分にある。

古墳時代には、大倉幕府東隣にある大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番1地点）で、前期の竪穴遺構数基が発見されている（馬淵1993）。同じ地点では、カマドを持つ古墳時代後期の住居址4軒が見つかっており、また調査区内で検出された東御門川旧流路中から大量の土師器や須恵器が出土した。大倉の周辺山麓には横穴墓も少なくない。大倉一帯に相当規模の集落が展開していたことは確実である。薬師堂ケ谷に人の営為がなかったとは考えにくい。

律令時代の鎌倉ではいたるところから住居址が発見されるようになる。調査地点近在では、向荏柄遺跡で8世紀後半から9世紀にかけての9軒の竪穴住居が検出された（馬淵ほか1985）。また今回の調査でも当該期の土器片が採集されているので、大倉郷の平地のみならず、薬師堂ケ谷の内にも人跡の及んでいたことは確かである。

中世

長元元年（1028）、房総の大乱「平忠常の乱」が始まる。源頼信・頼義父子は追討使平直方に代わって乱を鎮めるため河内国から関東に下り、長元四年（1031）これを収める。彼らは鎌倉を拠点に房総に渡った。「六浦道」はこの戦乱の際に開かれたとする見解が近年有力である。六浦道は大倉郷平野部を東西に通過する。荏柄天神社は、社伝によれば平安時代末期の長治元年（1104）、里民によって大倉郷の山裾に置かれたとされる。大倉一帯の平安時代後半の動向は、ほかに伝わらない。

鎌倉時代前期、大倉は鎌倉の中心であった。したがって史料中にその消息を伝える記事は多い。

治承四年（1180）、源頼朝は鎌倉入部直後、大倉の平野部に「新亭」を造営する。これがのちに「御所」あるいは「幕府」と呼ばれるようになる。以後嘉禄元年（1225）の幕府移転まで、大倉郷平野部の動静は頻繁に伝わる。

鎌倉時代前期の建保六年（1218）、北条義時が大倉の谷に堂を建立し、薬師如来を安置供養した。先述の通り、遺跡のある谷の名称はこの堂に由来する。堂は永仁四年（1296）、北条貞時により、京都泉涌寺流真言律宗の覚園寺と改められる。この寺の動静は鎌倉時代以降のこの谷に大きく影響したであろう。覚園寺については後述する。

このほか文献史料に現われる中世薬師堂ケ谷の消息を摘記しておく。

貞応二年（1223）7月9日　「薬師堂ケ谷辺」の浄密という僧の坊に優曇華が咲いたので、鎌倉中の人々が見物に出かけ、将軍実朝も家来に見にいかせたが、芭蕉の花であったという（『吾妻鏡』）。

延応元年（1239）11月20日　当谷の丹波良基宅に将軍頼経の二棟の御方（「大宮殿」）が、産気のため大倉から移った（『吾妻鏡』）。

建長三年（1251）10月７日　　薬師堂ケ谷焼亡、二階堂大路南辺まで延焼した（『吾妻鏡』）。

正嘉元年（1257）８月18日　　将軍・親王宗尊が大慈寺供養に出席するための方違の場所として、佐々木泰綱の薬師堂ケ谷の山荘が定められ、９月30日に山荘に移った（『吾妻鏡』）。

文永三年（1266）７月４日　　北条教時亭が薬師堂ケ谷にあった（『吾妻鏡』）。

元亨二年（1322）11月24日　　右筆仏子憲海が鎌倉薬師堂ケ谷勧学院において書写した（「三国仏法伝通縁起奥書」『東寺金剛蔵聖教目録』３　―『神奈川県史　資料編』２－2326）。

以下、中世起源の近在寺社・遺跡等をみてみたい。

【永福寺】　薬師堂ケ谷近在ではまず、頼朝による永福寺の建立がある。文治五年（1189）奥州平泉から帰った頼朝は、12月９日伽藍造営に着手、建久二年（1191）２月15日寺地をみずから決め、翌建久三年11月25日供養をおこなう。この寺院は以後15世紀まで存続した。薬師堂ケ谷の隣（北側）の谷あいにあり、谷口からは300～400ｍの距離にある。

【二階堂大路】　「二階堂」とは永福寺であり、六浦道の「関取場」遺称地から永福寺惣門に向かう道のこととみていいであろう（赤星1938、のち1982所収）。現在の「岐れ道」交差点から薬師堂ケ谷入口の「鎌倉宮」社頭に向かうバス通りの、東約60ｍを平行して通じる小道がそれである。薬師堂ケ谷中心軸を貫く道は、現在では明治時代に敷設された「鎌倉宮」参詣路に寸断されているが、本来二階堂大路までは続いていたはずである。宝治元年（1247）６月５日、三浦合戦の際、能登守三浦光村は永福寺惣（総）門内に80余騎をもって陣を張っている（『吾妻鏡』同日条）。鎌倉宮東脇を少し瑞泉寺方向（北）に進んだあたりの小字「四つ石」は、惣門の礎石に由来すると推定される（赤星1938、のち1982所収）。とすれば、薬師堂ケ谷出口からはほんの200ｍほどの位置になる。

近年の発掘調査で、この大路が幅20ｍ強の規模であったことが判明した。おそらく他の大路と同じく、若宮大路のそれの３分の２、すなわち22ｍとみていいのではないか（馬淵2008）。

【東光寺】　明治二年（1869）創建の鎌倉宮の場所には、かつて東光寺という臨済宗寺院があった。山号を医王山という。創建年、廃絶年ともに不詳だが、永享の乱以後は徐々に衰えていったらしい。調査地点からは400ｍほどの距離にある。『鎌倉攬勝考』は、民部太夫（二階堂）行光が永福寺傍らに一寺を創建し、承元三年（1209）明王院僧正公胤を導師に供養をおこなったのがこの寺であろう、という。『新編相模国風土記稿』は、東光寺の山号が「医王山」なので、『吾妻鏡』建久四年（1193）十一月八日条に源頼朝が永福寺傍らに梵宇を建て薬師如来像を安置した、とあるのが当寺の前身であろうとする。しかし、貫達人はこれを『風土記稿』の臆説として退けている（貫・川副1980）。『本朝高僧伝』によると、円覚寺九世無為昭元は病気のため同寺を退き、宝満寺という寺に寓して応長元年（1311）に没し、東光寺に塔した、という。南北朝時代の建武二年（1335）７月、北条時行らに攻められた足利直義は23日、当寺において天皇後醍醐の息、親王護良を生害し三河に敗走した（『鎌倉大日記』など）。貞和三年（1347）７月23日、住持月山友桂が当寺に利生塔を造立した際、直義は建長寺の渡来僧竺仙梵僊にこれを慶賀させ、護良の冥福を薦めている（『竺仙和尚語録』）。以後東光寺は護良の菩提寺となった。利生塔は、備後尾道の浄土寺の例からみても、五重塔であった可能性が高い（太田1957）。この寺には南北朝時代、西御門の報恩寺に住んでいた義堂周信もたびたび訪問し、詩を残している（『空華日用工夫略集』）。

【大楽寺】　薬師堂ケ谷を谷奥に向かって進むと、調査地点すぐ先の左手の枝谷に、現在覚園寺参詣者の駐車場となっている幅50ｍ前後、奥行き70～80ｍの平場がある。寺蔵の「境内絵図」（写）には、この場所に「大楽寺」と註された建物が描かれている。ちょうど調査地点前面付近にあたる「門」の位置からは、北西になる。大楽寺はもと浄妙寺東側の胡桃ケ谷にあった律院で、開山は願行房憲静、旧跡には今も大型のやぐら４基が開口している。永享元年（1429）２月11日に瑞泉寺門外の永安寺が焼けた際、山を越えて類焼し、伽藍を失った。このときまでは胡桃ケ谷にあったという（『新編鎌倉志』）。のち覚園寺に吸収

されて「覚園寺境内絵図」の場所に移った。天保十年（1839）の『五大堂事蹟備考』に、「今猶覚園寺域、不動・薬師・愛染・願行上人ノ肖像ヲ安スル堂を大楽寺と称ス」とあり、堂のみ残っていたことがわかる。明治四年（1872）兼宗廃止令が出たときに廃寺となった。

現在厚木市中依知の浅間神社に大楽寺の梵鐘がある。貞和六年（1350）鋳物師清原宗広によって作られた鐘で、銘文によれば、大楽寺は文保元年（1317）に伽藍を興隆した、という。『新編鎌倉志』によると、開山は公珍、本尊は鉄不動で、ほかに薬師如来・愛染明王がある。鉄不動は「試みの不動」といい、泉涌寺六世願行房憲静が大山寺（たいさんじ）（伊勢原市大山）の本尊不動を鋳造するに先立ち、試しに鋳たのでこの名があるという。薬師如来・愛染明王とともに、現在覚園寺愛染堂に祀られている。

近世

『相模国鎌倉郡村誌』（『皇国地誌』）によれば、江戸時代になり、小字の荏柄・杉本・紅葉ヶ谷・薬師堂ヶ谷・亀ヶ淵・獅子舞・稲葉越等を合わせて一村とし、二階堂を村名とした。村高のうち永別百十二貫三六〇文を東慶寺・円覚寺・杉本寺・荏柄天神社等の寺社領に寄付し、残高七貫三三九文余りを徳川氏の直轄として代官が管理した。嘉永五年（1852）井伊直弼の預所となってのち、山口松平大膳大夫、熊本細川越中守、佐倉堀田鴻之丞と変わり、慶応三年（1867）に代官の所管に戻った。

薬師堂ケ谷内の発掘調査

現在の覚園寺境内、同寺旧境内では平地部分４カ所と周辺の石窟遺構（「やぐら」）がある。

【地点１】 本地点の北側隣地に位置する。計７枚の遺構面が確認され、柱穴の並びらしきものもみえる。「境内絵図」の「門」の西脇に当たる位置であり、その性格には今後検討の要があろう（伊丹2010）。

【地点４】 覚園寺境内でおこなわれた調査である。旧内海家住宅移転予定地と薬師堂周囲を中心に、いくつかの調査区が設定されている。それぞれの範囲が狭いため面の連続性は明瞭でないが、岩盤削平面や礎石らしき切石、薬師堂の基壇縁辺とみられる石列が見つかっている。律院らしく茶臼が出土しているほか、三ツ鱗文平瓦の出土が北条氏とのつながりを示唆する。なお報告書の遺物年代観については、現在の研究水準に照らして、全体的に再考の必要がある（河野1982）。

【地点３】 谷口に近い平坦な場所で、他に比べると少ない３枚の遺構面が調査されている。上部の１面・２面（「１期」・「２期」）では版築面と礎石１個のほか、溝や浅い土坑等が検出され、３面（「３期」）から町屋建物の可能性ある杭列や板列が発見されている（この報告では上層から下層に向かうにつれ「期」の数字が加算されるという、当該調査組織独特のきわめて個性的な方式が採用されている）。報告者はこの変化について、

> 「短絡的に３期の板壁建物と掘立柱建物を一般の町屋建物、２期と１期の良好な土丹（破砕泥岩）版築と礎石建物を伴う空間を富裕層あるいは寺院の関わる整地地業とした場合、この変化を単純に町屋地域から覚園寺の寺域拡大に伴う谷内の開発と土地使用者の変化と捉える事も可能」

としつつ、

> 「しかし、覚園寺寺域内の様相変化の可能性も十分にあり、これはあくまで推測・空想の域を出ない短絡的な意見である」

という、読む者の判断を眩ませるに十分な、融通無碍の保留をつけている（降矢ほか2005）。

【やぐら】 最奥部にある「百八やぐら」群をはじめ、薬師堂ケ谷内部には「やぐら」は多い。「やぐら」が、南都・北京を問わず律院と不可分の存在であることは明らかだが、この谷の状況は、そのことをよく示していよう。現在までに７群が調査されている。他の谷と同じく、一つの枝谷ごとに数基が群集しているが、覚園寺歴代塔自体は同寺境内最奥部にあるので、塔所とするのは考慮を要しよう。

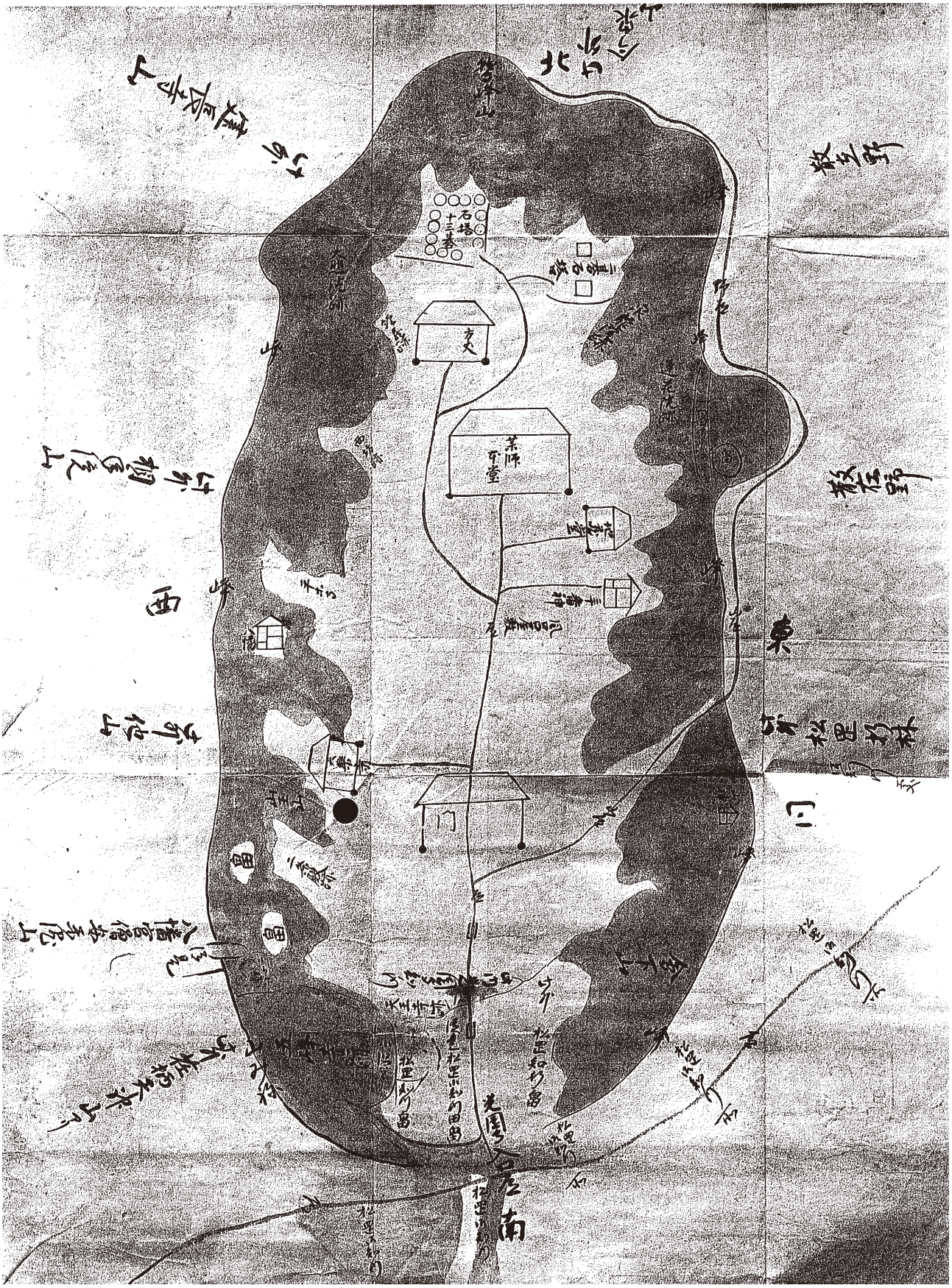


図３　覚園寺境内絵図（黒丸印付近が調査地点,『鎌倉国宝館図録　第15集』）

覚園寺について

薬師堂ケ谷の谷尻には真言宗覚園寺がある。鷲峯山（じゅうぶせん）真言院覚園寺と号する。鎌倉時代以来四宗兼学であったが、明治初年の兼学禁止と本山泉涌寺の古義真言宗標榜にともない、同宗となった。この寺の前身が、谷の名称の元となった大倉薬師堂である。覚園寺は関東における北京律の根本道場であり、その動静はこの谷に強い影響を及ぼさずにはおかなかったであろうから、簡単に沿革をみておきたい。

建保六年（1218）7月9日、北条義時が大倉郷におもむき、南山のあいだに便宜の地を卜して、一堂を建立し薬師像を安置する、といった。昨晩、薬師十二神将の戌神の夢告があったという。弟時房や息子泰時が反対したが押し切り、同年12月2日、大倉新御堂に雲慶作の薬師如来を安置し、供養した。導師は荘厳房律師（退耕）行勇。これより先建保四年（1216）正月17日、「京都仏師雲慶」が将軍家持仏堂の本尊釈迦如来を京都から運んで安置している（以上『吾妻鏡』）。このときの例から渋江二郎は、大倉新御堂の薬師像についても、京で制作したものを運んだ可能性を指摘する。また渋江は、「雲慶」が南都の「運慶」と同一人物と推定している（渋江1973）。

仁治四年（寛元元年1243）2月2日、失火により大倉薬師堂焼亡、本仏は取り出した。

建長二年（1250）2月8日、時頼が霊夢の告により信仰。

建長三年（1251）10月7日、薬師堂ケ谷焼亡、二階堂大路南辺まで延焼した。調査地点は確実に被災したとみられる。

弘長三年（1263）3月10日、執権北条時宗は当堂を修造し、遠江僧都公朝を導師として真言供養が行われた。

永仁四年（1296）、北条貞時が元寇の賊を討つためこれを寺に改め、覚園寺とした。開山は心慧（しんえ）智海（智海心慧とも）。垂木は彫刻され、柱は丹塗された「厳麗」な寺観であった。また元の薬師堂時代から北京泉涌寺律の法系の人々が入っていて、同寺開山の俊芿が関東に下向（貞応三年1224）したのちは、顕と密とを問わず僧が集まり、鎌倉時代後期には北京律関東弘通の拠点となった（至徳三年1386　6月15日付「官宣旨」『神奈川県史　資料編』3－5009）。寺領は伊予国新居西条庄内四ケ村にあった（「智海心慧書状案」『県史　資料編』2－1535）。建武四年（1337）の「覚園寺住僧申状案」によれば、当寺開創の目的は異国降伏と朝廷鎮護にある（『県史　資料編』3－3350）。

薬師堂および覚園寺は鎌倉時代を通じて北条氏の外護によって寺勢を維持したが、寺容は明らかでなく、変遷も未詳である。しかし、嘉元四年（1306）に没した心慧の同年4月21日付置文に、「宝篋印塔婆・潅頂堂・護摩堂・光明院」の造立が完了、仏殿・法堂・祖師堂・土地堂・僧堂・庫院・山門・両廊などを修理してほしいとあり、一端がうかがえる（「智海心慧置文」『県史　資料編』2－1534）。

建武中興後の元弘三年（1333）12月21日、天皇後醍醐から国家鎮護・玉体安穏を祈る勅願寺の綸旨が与えられ、翌建武元年（1334）8月5日、新居西条庄の寺領が安堵された（『神奈川県史　資料編』2－3135・3－3181）。続いて足利氏の祈願所となったが、建武四年（1337）2月10日の火事で諸堂を失ったらしい。復興は尊氏により進められ、文和三年（1354）12月、仏殿完成。尊氏は梁の牌銘に自署している（『県史　資料編』3－4282）。尊氏没後は歴代の関東公方が寺領の寄進や諸仏の修造をおこなってよく外護し、寺勢は維持された。室町初期、寺領は相模国毛利庄（もりのしょう）妻田・三田（さんだ）・荻野三郷（現厚木市）、上総国小蓋・八板（やいた）両村（千葉県長生郡長南町）、越後国埴生保（新潟県柏崎市宮川）にあった。

先述したように、胡桃ケ谷の大楽寺が永享元年（1429）に焼け、覚園寺の門の西側にある枝谷の中に移転した。原本が永享十一年（1439）以後に成立したと推測される「境内絵図」には、五峰寺跡・二条殿跡・大楽寺・平等寺・一心坊跡・経蔵跡・大悲院跡・泉竜院跡・薬師本堂・地蔵堂・三十番神・八幡・門・方丈・風呂屋敷・山王山・石塔十三基・二基石塔などの文字が見える。

小田原北条氏歴代も寺をよく保護した。古河公方足利義氏は、永禄七年（1564）11月15日、禁制を下し、同十年５月11日には寺領を寄進している。天正十八年（1590）４月には、豊臣秀吉が当寺および瑞泉寺・宝戒寺・浄光明寺など六ヶ所に禁制を下し、保護した。徳川家康は翌天正十九年11月に鎌倉の内において、七貫一〇〇文の地を寄進した。この高は江戸時代を通じて変わらなかったらしい。

元禄十六年（1703）の大地震、文政十三年（1830）の庫院焼失などにより寺運は徐々に衰え、幕末には無住の時期もあった（薬師三尊像胎内札銘）。明治四年の兼宗廃止令により、四宗兼学を改め、本寺の泉涌寺にならって真言宗となった。一時荒廃著しかったが、戦後長い年月をかけて復興し、現在の寺容となった。

境内最奥部には玉垣で囲まれた方形区画があり、歴代住持の墓塔が並ぶ。このうち開山心慧智海と二世大燈源智のそれはともに４ｍ前後の大宝篋印塔で、関東形式の代表的な作例として知られる。三世以後は無縫塔である。開山塔は高さ406㎝・総高427㎝、「正慶元年壬申」の「仲冬廿七日造立」とある。正慶元年仲冬は1332年11月であり、心慧は嘉元四年（1306）に示寂しているので、26年後の供養塔ということになる。大燈塔は高さ389.9㎝・総高411㎝、これも「正慶元年壬申」だが、「仲秋廿八日造立」とあり、開山塔より３ヶ月早い８月に造られている。ときの住持は三世鑒恵（かんえ）で、ともに大工光広の手になる。願主は異なるものの、「営事」（興行の統括者の意か）の恵秀も共通する。寺が開山と二世を同時期に供養したとみられる。「光広」は大蔵派石工であろう。

引用・参考文献

赤星直忠1938　「永福寺阯の研究」『神奈川県史蹟名勝天然記念物調査報告書』（のち1980『中世考古学の研究』所収）
赤星直忠1959　『鎌倉市史　考古編』吉川弘文館
伊丹まどか2010　「覚園寺旧境内遺跡（№435）　二階堂字会下351番３外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26
太田博太郎1957　「備後の利生塔」『中世の建築』彰国社
大森順雄1991　『覚園寺と鎌倉律宗の研究』有隣堂
河野真知郎1982　『鎌倉市二階堂　覚園寺境内発掘調査報告書』宗教法人覚園寺
小林康幸・野本賢二2000　「鎌倉における最近の弥生時代遺跡調査の動向」『考古学論究』第７号　立正大学考古学会
渋江二郎1973　『鎌倉地方仏像彫刻概説』鎌倉市教育委員会
貫達人・川副武胤1980　『鎌倉廃寺事典』有隣堂
野本賢二ほか1999　「横小路周辺遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』15
降矢順子ほか2005　『覚園寺旧境内遺跡発掘調査報告書　―二階堂字会下331番３外における埋蔵文化財調査―』有限会社鎌倉遺跡調査会
馬淵和雄1993　「大倉幕府周辺遺跡群（№49）二階堂字荏柄38番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』９
馬淵和雄1998　「大倉幕府周辺遺跡群（№49）雪ノ下四丁目620番５地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』14
馬淵和雄1999　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下四丁目620番５地点発掘調査報告』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄2008　「大倉幕府周辺遺跡群（№49）の発掘調査　―雪ノ下天神前562番30地点―」『第18回　鎌倉市教育委員会遺跡調査・研究発表会　発表要旨』鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄ほか1985　『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会

（馬淵）

第二章　調査の概略

１．調査にいたる経緯

覚園寺旧境内遺跡の範囲内にある二階堂字会下351番１において、個人住宅建設の照会があった。工法は耐震を考慮した鋼管杭の打設による基礎工事を含むものであり、設計変更は困難と判断された。前年におこなわれた北側隣地の調査結果からみて遺構の損傷は避けられないため、発掘調査を実施することになった。試掘調査については北側隣地の発掘調査をもって代えることとし、本地点ではおこなわれなかった。調査は2005年６月21日に開始された。面積は30㎡である。

２．調査方法

掘削方法

調査の際の便宜上の呼称として谷尻を「北」、谷口を「南」と称した。したがって東西方向では山側が「西」、川側が「東」となる。

掘削に当たっては、残土置場の確保のため発掘区を東西に二分割し、先に調査した山（西）側を「１区」、後半の谷（東）側を「2区」とした。両区とも地表下60～80㎝の表土部分を重機で掘削し、以下が人力による。

図４　調査区設定図

測量基準の設定

測量基準軸は調査区主軸方位に合わせて任意に設定し、のち座標成果を求めるという方法を取った。まず、調査区中心に東西軸線Ｂを想定、その最奥部に任意点（見返り）を置き、線上６ｍを折り返した点を南北軸２とした。軸線Ａは北の調査区外に、また南北軸１は西の調査区外にあるという設定とした。方眼は５ｍとして、南北軸２から東に向かって３が調査区内にある。

座標成果は以下の通り（世界測地系、エリア９）。

Ｂ軸最奥部　Ｘ－74.404.8803　　Ｙ－24.443.2233

交点２Ｂ　　Ｘ－74.402.7647　　Ｙ－24.437.6795

３．調査経過

以下におもな作業経過を記す。

６月21日　重機により、１区表土掘削。
６月23日　機材搬入
６月27日　１区Ⅰ面全景写真撮影と平面実測。
７月５日　１区Ⅱ面全景写真撮影と平面実測。
７月８日　１区Ⅲ面全景写真撮影と平面実測。
７月12日　１区Ⅲb面全景写真撮影と平面実測。
７月14日　１区Ⅲc面全景写真撮影と平面実測。
７月20日　１区Ⅳ面全景写真撮影と平面実測。
７月22日　１区Ⅴ面全景写真撮影と平面実測。
７月25日　１区Ⅵ面全景写真撮影と平面実測。
７月26日　重機により、１区埋め戻しと２区表土掘削。
８月２日　２区Ⅱ面全景写真撮影と平面実測。
８月４日　２区Ⅲ面全景写真撮影と平面実測。
８月８日　２区Ⅲb面全景写真撮影と平面実測。
８月10日　２区Ⅲｃ部分写真撮影と平面実測。
８月12日　２区Ⅲe面全景写真撮影と平面実測。
８月16日　２区Ⅲf面全景写真撮影と平面実測。
８月18日　２区西辺に深掘り区設定
８月19日　２区Ⅳb面全景写真撮影と平面実測。
８月23日　２区Ⅴ面全景写真撮影と平面実測
８月24日　２区Ⅴb面全景写真撮影と平面実測。
８月26日　２区Ⅵ面全景写真撮影と平面実測。
８月29日　前日の雨のため水没、排水後南壁の土層断面写真撮影と実測。
８月31日　機材撤収

（馬淵）

第三章　調査結果

第１節　概要

１．層序

地表面

地表面の標高は24m前後で、山側より谷側の方が10㎝ほど低くなっている。以下地中のどの面も全体に谷側に向かって傾斜している。

Ⅰ面

表土下の近現代層は50㎝から１ｍの厚みがあり、これを除去すると人頭大破砕泥岩の層が現れ（図５土層番号1，以下「図５」略す）、上面に柱穴らしい小穴も認められたので、これを最初の遺構面「Ⅰ面」とた。ただし、表面に人の踏みしめた形跡などはみられず、面自体は本来もっと高いところに存在していたのが、近代に削り取られたものと考えたい。13世紀から近代におよぶ出土遺物のあり方も、そのことを裏付けていよう。面の標高は25.2 ～ 25.4ｍである。

Ⅱ面

Ⅰ面を構成する大型破砕泥岩層は平均して50㎝前後もの厚みがあり、その下に破砕泥岩層、および暗青灰色の粘質土層が現れる（土層番号２・7）。この表面には部分的に炭化物の層が見られ、囲炉裏や石組み、いくつかの小穴などの遺構も検出できるなど人的営為の痕跡がきわめて濃かったので、これを「Ⅱ面」と認定した。面の標高は24.8 ～ 25.05ｍにある。

Ⅲ面群

Ⅲ面はⅡ面の下15㎝から20㎝前後で検出された。この面の下には、厚さ約30㎝の間に５～ 7㎝おきに数枚の遺構面が重なるように存在する。これらはいずれも細かな破砕泥岩で構築されており、表面にしばしば炭化物層や木器層が加圧された状態で認められる。すなわち明瞭に生活痕をとどめている。これらを抜けると厚い大型破砕泥岩層となり、前代との断絶は顕著となる。そこでこれら接近した層の重なりを全体としてⅢ面群とし、上からそれぞれ「Ⅲａ面」・「Ⅲｂ面」・「Ⅲｃ面」・「Ⅲｄ面」の名称を与えた（土層番号10 ～ 14・18）。２区Ⅲｄ面東半部にはさらに数cm下に下部面があり、これを「Ⅲｄ下部面」と呼ぶこととした（図版10-1・10-2、図はⅢｄ面で一括呈示）。Ⅲａ面の標高は24.70 ～ 24.85ｍ、最下層Ⅲｄ面は24.40 ～ 24.70ｍである。

Ⅳａ・Ⅳｂ面

Ⅲ面群の最下層であるⅢｄ面は、青灰色粘質土を含む大型泥岩地形（じぎょう）層、および明灰褐色粘質土の上面にある（土層番号17・19・20・21）。この層の厚さは30 ～ 40㎝ほどもあり、これを除くと全体に青灰色粘質土となる（土層番号22・25）。１区においてはその上面には生活痕跡が乏しく、遺構面として認定することはためらわれたので、さらに15㎝ほど掘り下げた。すると同じく青灰色粘質土ながら破砕泥岩の多い新たな層が現れ、いくつか小穴も検出されたので、これを当初「Ⅳ面」とした。

ところが一方、２区においては土層番号22・25上面に炭化物が広がり、遺構こそ多くはないが、礎板が散見されるなど生活痕跡は明瞭であった。そこで新たにこれを「Ⅳａ面」と名付け、先の１区で「Ⅳ面」とした面を「Ⅳｂ面」と改めた。Ⅳｂ面は２区においても明瞭である（土層番号23・34）。面の標高は、Ⅳａ面が23.95 ～ 24.40ｍ、Ⅳｂ面が24.00 ～ 24.60ｍにある。

なお調査の経緯・手順の都合で「Ⅳａ」・「Ⅳｂ」とはしたものの、両者はその性格を大きく異とし、実質的な観点からは別番号とすべきだが、以上のような進行事情から枝番となったことを理解されたい。

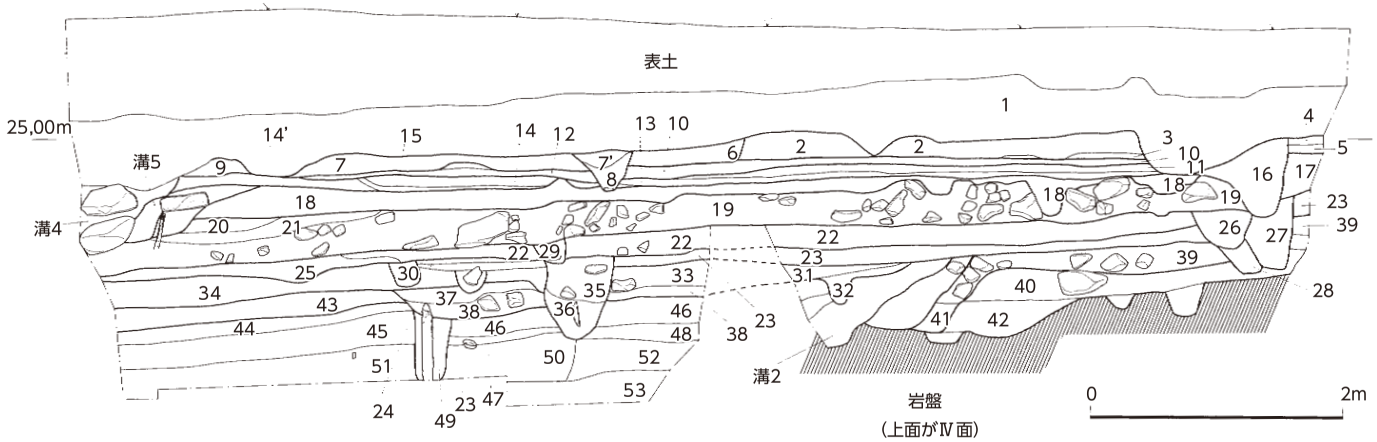


図5　調査区南壁土層断面

1. 大型泥岩地行
2. 暗青灰色粘質土　炭化物多く含む、小石大泥岩・木片・土師器片含む　上面Ⅱ面
3. 暗灰色粘質土　多量の炭化物、泥岩粒・微量の貝片・木片含む
4. 炭化物層　上面Ⅱ面
5. 破砕泥岩地行
6. 黒褐色粘質土　多量の炭化物・破砕泥岩・木片含む　土坑3・4覆土
7. 破砕泥岩地行　上面Ⅱ面
8. 黒褐色粘質土　多量の炭化物・破砕泥岩・木片含む　小穴覆土
9. 灰褐色粘質土を含む破砕泥岩地行　Ⅰ区側は非常に多量の炭化物含む　上面Ⅱ面
10. 明灰褐色泥岩層　上面Ⅲa面
11. 破砕泥岩地行　Ⅱ区側は木片・炭化物を多量に含む灰茶褐色粘質土の割合が多い　上面Ⅲb面
12. 明灰褐色粘質土　多量の炭化物、破砕泥岩・木片・遺物・鉄分含む　上面Ⅲa面
13. 暗茶灰色粘質土を含む破砕泥岩地行　多量の炭化物・腐食木片含む
14. 黄灰色破砕泥岩地行　上面Ⅲb面
15. 破砕泥岩地行　多量の炭化物・腐食木片含む
16. 青灰色粘質土　炭化物・小塊～大型泥岩多く含む　土坑　覆土
17. 青灰色粘質土を含む泥岩層　炭化物、小塊～大型泥岩・木片含む　上面Ⅲd面
18. 破砕泥岩地行　炭化物・木片・鉄分含む　上面Ⅲc面
19. 大型泥岩層　暗灰色粘土混入　炭化物含む　上面Ⅲd面　21との間にⅢd下部面
20. 明灰褐色粘質土　小石大泥岩粒・炭化物・木片含む　上面Ⅲd面
21. 黄灰色破砕泥岩地行　炭化物・木片含む　上面Ⅲd面
22. 青灰色粘質土　炭化物・小塊～拳大泥岩・木片・遺物片含む　上面Ⅳa
23. 青灰色粘質土　破砕泥岩22.より多く含む　上面Ⅳb面
24. 黄灰色泥岩層　拳大泥岩多量に含む　上面Ⅳb面
25. 黄灰褐色粘質土　小石大泥岩・木片・遺物片を含む　上面Ⅳa面
26. 暗青灰色粘質土　小石～半人頭大泥岩雑につまり、間は炭化物多く締まり弱い　小穴覆土
27. 暗青灰色粘質土　小石～半人頭大泥岩雑につまり、間は炭化物多く締まり弱い　小穴覆土
28. 黒青灰色粘質土　小石～半人頭大泥岩雑につまり、間は炭化物多く締まり弱い　小穴覆土
29. 青灰褐色粘質土　泥岩粒・炭化物・貝砂・木片・遺物片含む　小穴覆土
30. 暗青灰色粘質土　泥岩粒・多量の炭化物・木片・貝片含む　小穴覆土
31. 黒褐色粘質土　多量の炭化物・小石大泥岩・木片含む　上面Ⅴa面
32. 暗青灰色粘質土　石大泥岩含む
33. 青灰色粘質土　多量の炭化物・泥岩粒・木片・貝片・遺物片含む
34. 青灰色粘質土　小石大泥岩多量に含む　上面Ⅳb面
35. 灰褐色粘質土　泥岩粒～半人頭大泥岩・炭化物多く含む、遺物片含む　小穴覆土
36. 青灰色粘質土　泥岩粒～拳大泥岩・炭化物・遺物片含む　杭柱の残る小穴覆土
37. 青灰色弱砂質土　小石大泥岩・炭化物多く含む　土坑7・8覆土
38. 黒青灰色粘質土　炭化物非常に多い　小石大～半人頭大泥岩・遺物片・木片含む　土坑7・8覆土
39. 黒灰色粘質土　小石大～大型泥岩詰まる　炭化物・木片・微量の貝片含む　上面Ⅴa面
40. 黒灰色粘質土　39.と同質
41. 黒灰色粘質土　39.と同質
42. 黒青灰色粘質土　小石大泥岩粒・多量の炭化物含む
43. 暗青灰色粘質土　多量の粒～小石大泥岩・炭化物、貝片・木片含む　上面Ⅴa面
44. 黒灰褐色粘質土（炭化物層）　上面Ⅴb面
45. 暗青灰色粘質土　炭化物・少量の泥岩粒・遺物片・木片含む
46. 暗青灰色粘質土　多量の炭化物・泥岩粒～拳大泥岩・木片含む　上面Ⅴb面
47. 暗青灰色粘質土　拳大泥岩多量に含み、炭化物・木片・遺物片・貝片含む
48. 暗青灰色粘質土　46.に比べ泥岩の量が少ない
49. 暗青灰色粘質土　炭化物・貝片・微量の泥岩粒含む　柱含む小穴覆土
50. 暗青灰色粘質土　少量の破砕泥岩・炭化物・遺物片含む
51. 暗青灰色粘質土　50に同じ
52. 明青灰色粘質土　破砕泥岩非常に多量に含む　炭化物多く含む　上面Ⅵ面
53. 暗青灰色粘質土　小石大泥岩・多量の炭化物含む　上面Ⅵ面

Ⅴa・Ⅴb面

Ⅳb面を構成する破砕泥岩の多い青灰色粘質土は、山側（１区）で５～13㎝（土層番号23）、谷側（２区東域）では最大25㎝の層厚がある（土層番号34）。これを除くと山側で大小の泥岩を多く含む黒灰色の層が現れる（土層番号39）。この層は西壁から2.5ｍほどで下に落ちていくが、その落ちを埋めて形成された平面が東側に続く（土層番号43）。面上には土坑・小穴などがいくつか検出され、これを「Ⅴ面」とした。さらに落ちの充填土を除くと緩傾斜面となり、遺構が検出された（土層番号44・46）。この面の西側高位部平坦面はⅤ面と共有されているので、これを「Ⅴb面」と名付けた。そしてこれにともない、先の「Ⅴ面」を「Ⅴa面」と改めた。なお、土層番号44は炭化物の層であり、何らかの火災痕跡である可能性が高い。

面の標高は、Ⅴa面が23.95～24.40ｍ、Ⅴb面が23.50～24.00ｍである。

Ⅵ面

Ⅴb面は拳大～人頭大の破砕泥岩で構築されており、層厚は12～22㎝程度ある（土層番号39）。１区においては、これを下げるとほぼ同質のやはり大小の泥岩を大量に含む黒灰色粘質土となる。これは厚さ12～25㎝ほどで、上面には人的営為が見られない。そこでこれも除くと岩盤が現れる（池子層）。岩盤上面には柱穴らしい小穴が10数穴確認され、生活面として使われていたことは明らかであったので、「Ⅵ面」とした。岩盤は西側の１区でしか検出されず、２区にはなかった。したがって１・２区境界の未掘部分で地中深く落ちていくことがわかる。しかし、２区は上層Ⅴb面段階ですでに掘削深度が2.5ｍに達していたため、安全性を考慮して全面掘削を断念し、幅40～50㎝の溝状確認坑を入れるにとどめた。ここでは岩盤の落ち込みを埋めて平坦部の確保を図った面が見られ、１区Ⅵ面の続きであることを確認した。確認坑の下位層中には炭化物が含まれているが、上述の理由で基盤層には到達していない。

面の標高は23.15～23.90ｍである。

第２節　各説

１．Ⅰ面

面の概要（図６）

検出高：25.2～25.4ｍ　**面構成土**：大型破砕泥岩　**検出遺構**：小穴２口　**面出土遺物（図６）**：土師器皿Ｒ種大型（１・２）・瀬戸美濃擂鉢（３）・白磁口はげ皿（４）・平瓦（５）　**特記事項**：提示した出土遺物は13世紀後半（１・２・４）から16世紀（３）におよぶが、近代のものも採集されており、面自体は明治以降にここまで削り取られたと考えるのが妥当である。面上で検出された２個の穴は深さ23㎝（P.1）と16㎝（P.2）で、似た形状をしているが関連性を見出せず、連繋するような小穴も調査区内にない。また面上には土師器等の散布がみられる。

２．Ⅱ面

面の概要（図７・８）

検出高：24.8～25.05ｍ　**面構成土**：暗青灰色粘質土・破砕泥岩・炭化物　**検出遺構**：土坑３基・石組み遺構１基・囲炉裏１基・小穴５口　**面出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（１～９）・土師器皿Ｒ種中型（10～13）・土師器皿Ｒ種大型（14～24）・瓦器火鉢（25）・常滑片口鉢Ⅱ類（26）・瀬戸入子（27）・瀬戸卸し皿（28・29）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（30）・白磁口はげ皿（31）・開元通宝（32）・熙寧元宝（33）・石製硯（34）・擦り石（35）・凹石（36）・箸状木製品（37・38）・漆器椀（39）・笄（40）　**特記事項**：出土遺物は全体に13世紀後半～14世紀第１四半期を示す。

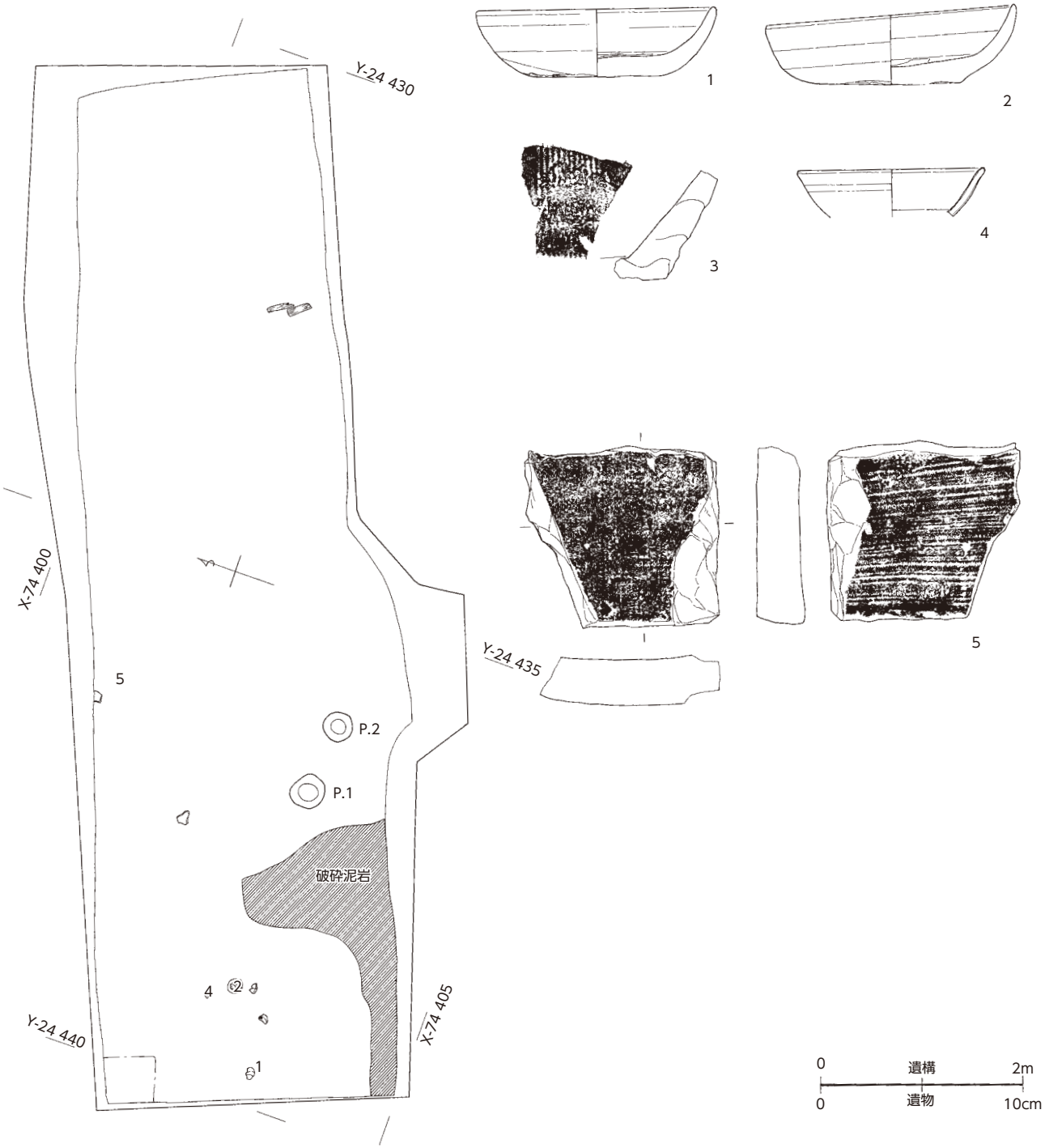


図6　Ⅰ面遺構全図・Ⅰ面出土遺物

P. 8（図8）

出土遺物：箸状木製品（41）

囲炉裏（図8）

位置：X－74 402.38～－74 404.07　Y－24 434.51～－24 434.62　**形状**：長方形　**規模**：長辺154㎝×短辺121㎝×深さ28㎝　**主軸方位**：N－62.5°－E　**重複関係**：土坑3・4を切る　**出土遺物**：土師器皿R種小型（42～44）・土師器皿R種大型（45～48）・常滑片口鉢Ⅱ類（49）・砥石仕上砥（50）**特記事項**：大型の囲炉裏。幅7～8㎝から30㎝を超える板を縦位置で横に並べ、囲いとする。内部に数点

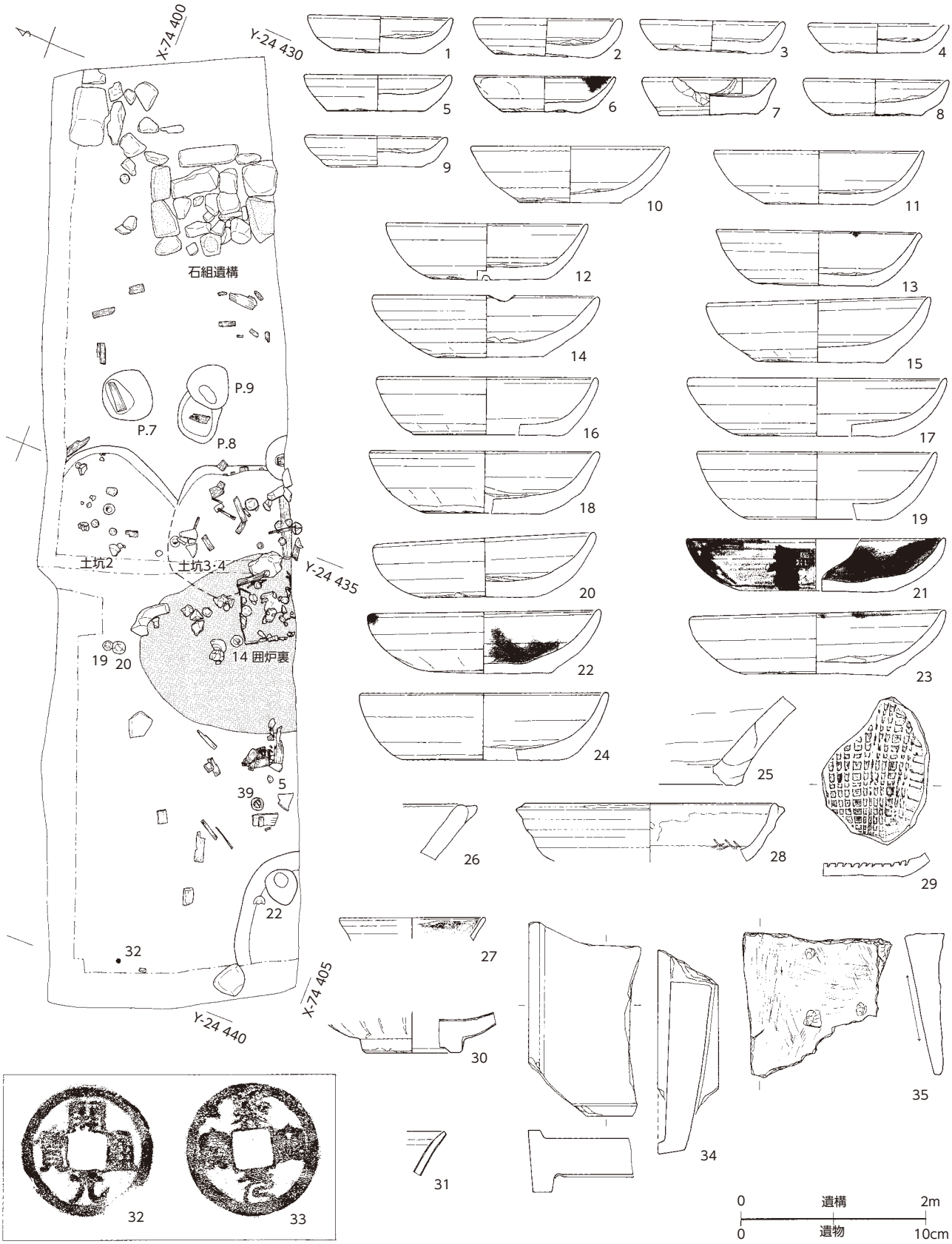


図7　Ⅱ面遺構全図・Ⅱ面出土遺物（1）

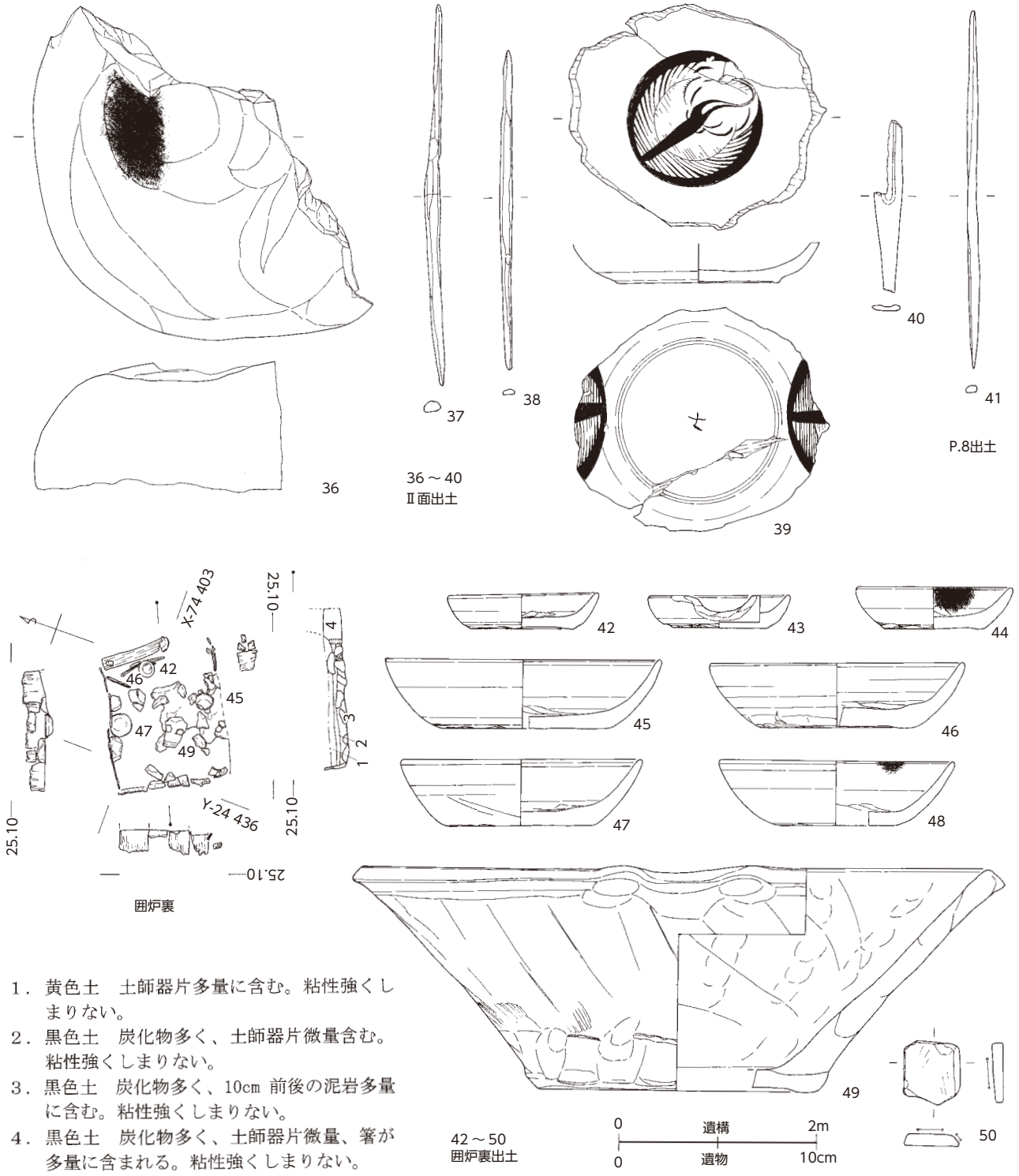
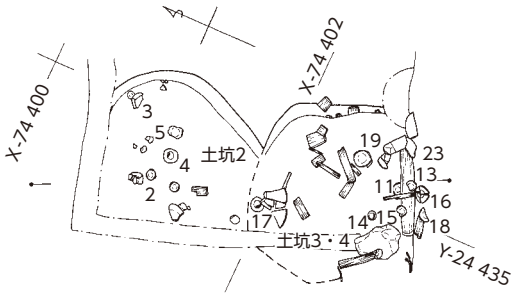


図８　Ⅱ面出土遺物（2），囲炉裏・同出土遺物

の土師器と常滑片口鉢Ⅱ類の大ぶりの破片（49）があった。49の外面には煤と灰が付着しており、すり鉢を煮炊具に転用した可能性がある（「すり鉢鍋」）。年代は前後の相対的関係から13世紀後半～末か。

土坑２（図９）

位置：X－(74 400.52)～－(74 401.95) Y－24 434.64～－(24 435.68) **形状**：不整円形　**規模**：南北（127㎝）×東西（140㎝）×深さ14㎝　**主軸方位**：不明　**重複関係**：土坑３・４に切られる　**出土遺物**：



1．暗灰黒色粘質土　小石大の泥岩少量、箸を多量、貝、炭化物を含む。粘性強くしまり弱い。
2．炭化層　小石大の泥岩少量、炭化物非常に多く、木片（箸）を多量に、遺物片を多く、貝を含む。粘性強くしまり弱い。
3．暗茶灰色粘質土　拳大までの泥岩やや多く、炭化物やや多く、木片、遺物片多く含む。粘性強くしまり弱い。

1～10　土坑2出土
11～28　土坑3・4出土

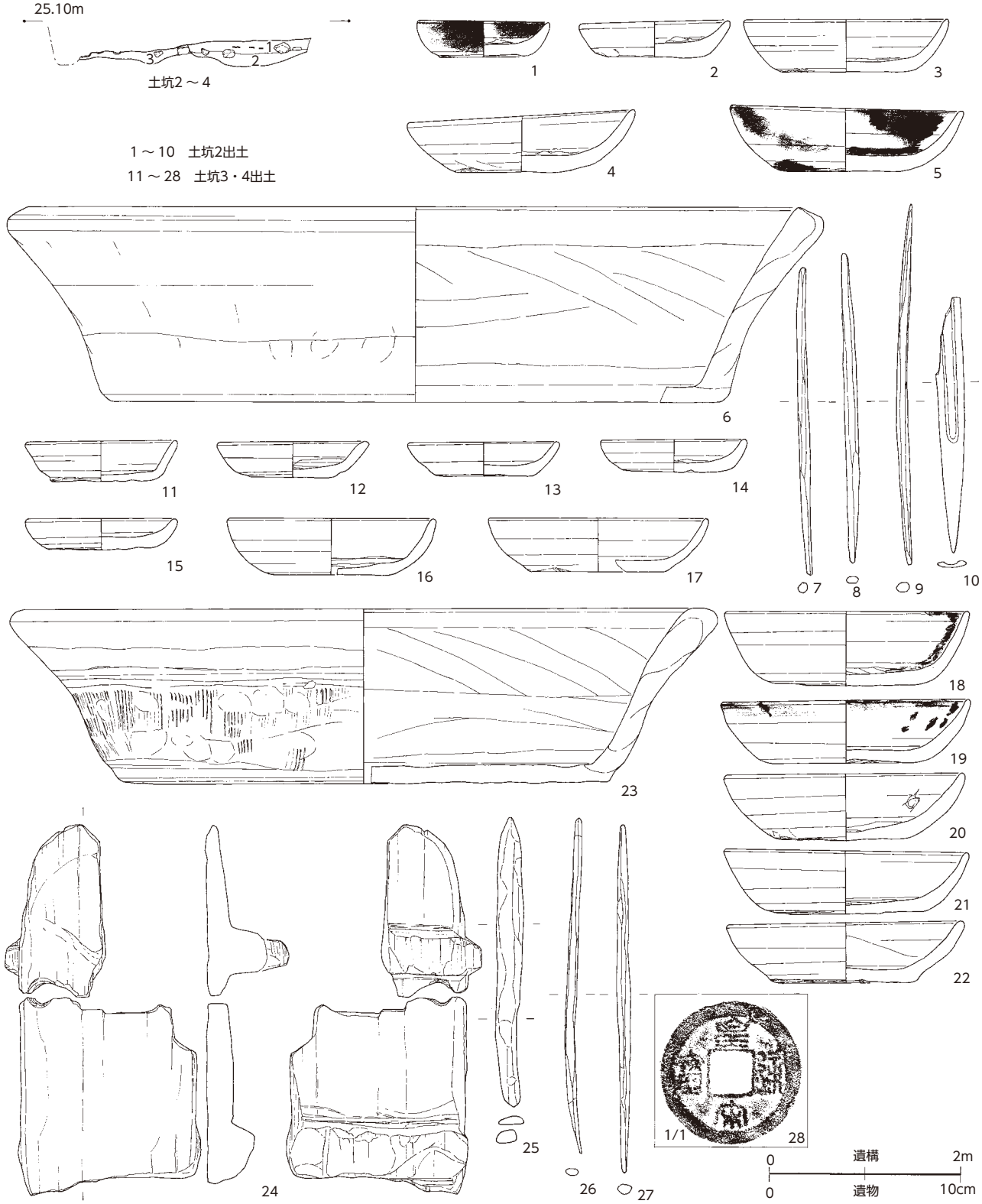


図9　Ⅱ面土坑2～4，同出土遺物

土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種中型（3・4）・土師器皿R種大型（5）・瓦器火鉢（6）・箸状木製品（7～9）・骨製笄（10）　**特記事項**：浅い皿状の落ち込み。次述土坑３・４が囲炉裏の痕跡だとすると、これもそうである可能性がある。年代は13世紀後半～14世紀初頭。

土坑３・４（図9）

位置：X－74 401.80～－(74 403.25)　Y－(24 434.27)～－(24 435.80)　**形状**：不整円形または不整隅丸方形　**規模**：（153㎝）×（143㎝）×深さ28㎝　**主軸方位**：N-67°-E　**重複関係**：土坑２を切る　**出土遺物**：土師器皿R種小型（11～15）・土師器皿R種中型（16・17）・土師器皿R種大型（18～22）・瓦器火鉢（23）・連歯下駄（24）・棒状木製品（25）・箸状木製品（26・27）・皇宋通宝（28）　**特記事項**：当初は２基の土坑と認識していたが、完掘時に１基と判断した。土坑のへりに縦板が何枚か遺存しており、囲炉裏の痕跡である可能性が高い。年代は13世紀後半～14世紀初頭。

３．Ⅲａ面

面の概要（図10・11）

検出高：24.70～24.85ｍ　**面構成土**：明灰褐色粘質土　**検出遺構**：溝１条・礎板列１列・土坑２基・小穴１口・遺物集中出土１群　**面出土遺物**：土師器皿R種小型（図10－１～16）・土師器皿R種大型（17～23）・常滑片口鉢Ⅱ類（24～26）・常滑甕（27）・丸瓦（28）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文折縁鉢（29）・金銅製品（図11－30）・紹聖元宝（31）・鉄釘（32・33）・砥石中砥（34）・骨製笄（35）・糸枠（36）・連歯下駄（37）・雲形肘木（38）・箸状木製品（39～42）・串状木製品（43）・用途不明木製品（44～49）　**特記事項**：遺物年代は全体に13世紀後半～同末の様相を呈している。

溝４（図11）

位置：X－(74 399.32)～－(74 401.25)　Y－(24 430.35)～－(24 431.98)　**規模**：幅（86）㎝×長さ（210）㎝×深さ（64）㎝　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－23°－W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：土師器皿R種小型（50）・常滑甕（51）・備前すり鉢（52）・箸状木製品（53）　**付帯施設**：右岸（西岸）に凝灰岩切石を方形に並べた石組み　**特記事項**：溝左岸（東岸）は調査区外にあり、全体の幅は不明。中位に段があり、土層堆積からみて谷側（東）が溝の通水部で、山側の浅い部分が裏込めの可能性がある。掘り直しについては観察できなかった。東側には薬師堂ケ谷中央を流下する川（平子川）があり、位置からいって本址はその中世期の右岸（西岸）であろう。付帯施設とみられる石組みについては詳細不明だが、これが突き出しているところは溝幅が20㎝ほど狭くなっており、例えば橋のような、溝を渡る何らかの施設と考えたい。石組みの北側に礎板を重ねて敷いた大ぶりの柱穴があり、橋脚の可能性も視野に入れておきたい。溝の年代は、52の備前すり鉢の存在から13世紀第４四半期頃であろう。

P.10出土遺物（図11）

土師器皿R種小型（54）　**特記事項**：13世紀後半だろう。

礎板列１（図10・11）

位置：X（－74 399.82～－74 401.92）　Y（－24 433.28～－24 434.86）　**礎板間隔**：芯々200㎝（±15㎝）　**主軸方位**：N－32°－W　**重複関係**：P.10に乗る　**出土遺物**：[P.10]土師器皿R種小型（図11－54）　**特記事項**：調査区北壁面に立った木材が見えたのでその部分を拡張すると、１辺9㎝の柱となった。位置的には調査区内のP.10にある礎板とほぼ２ｍの距離にあり、鎌倉時代後期に一般的な柱間に相当したので、１間のみの並びではあるがここに呈示しておく。南側の礎板はP.10の埋土中にあるが、それがこの礎板にともなう柱穴かどうかはわからない。年代は54とこの面の他の傾向に従えば、13世紀後半であ

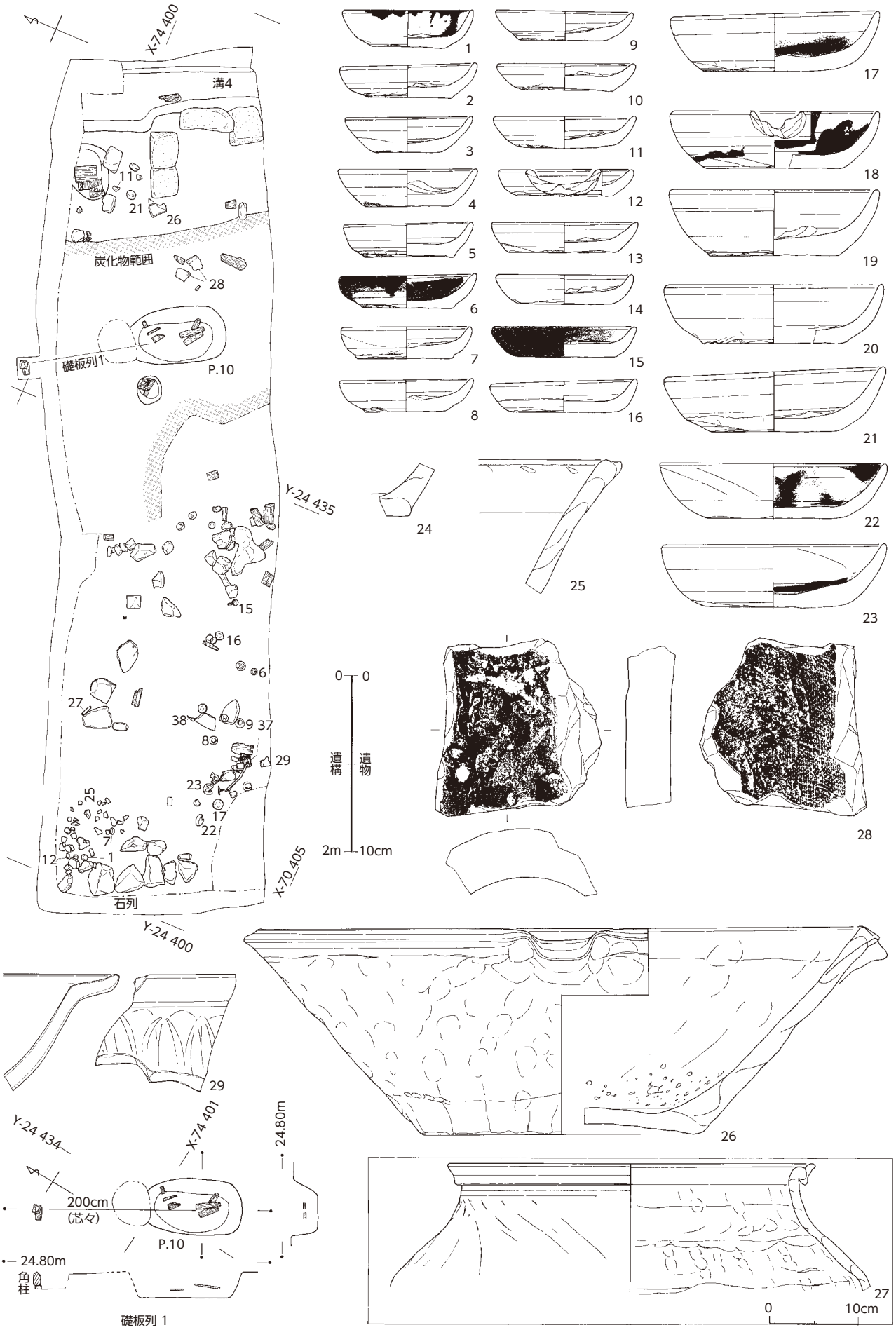


図10　Ⅲａ面遺構全図，礎板列１，Ⅲａ面出土遺物（1）

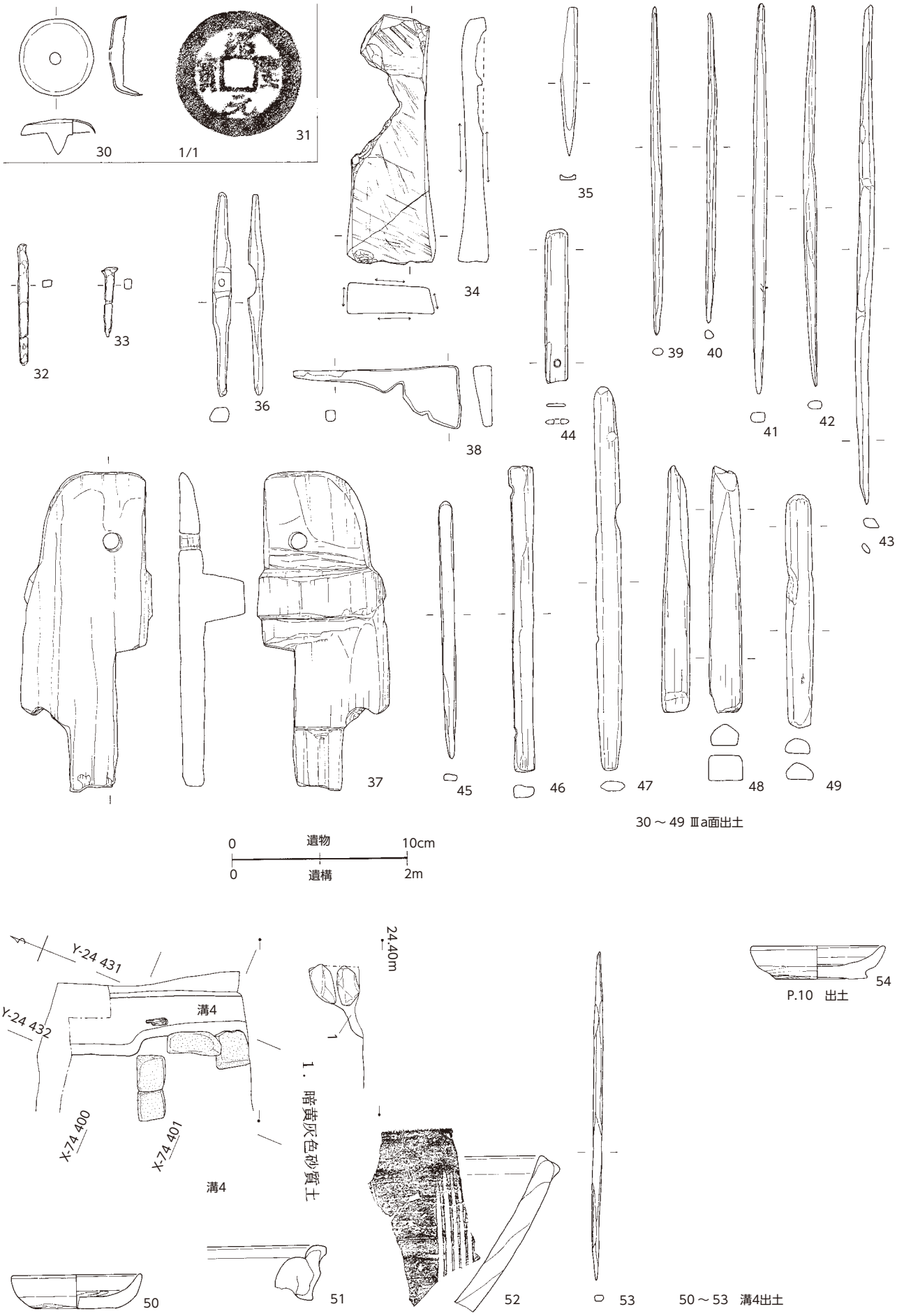
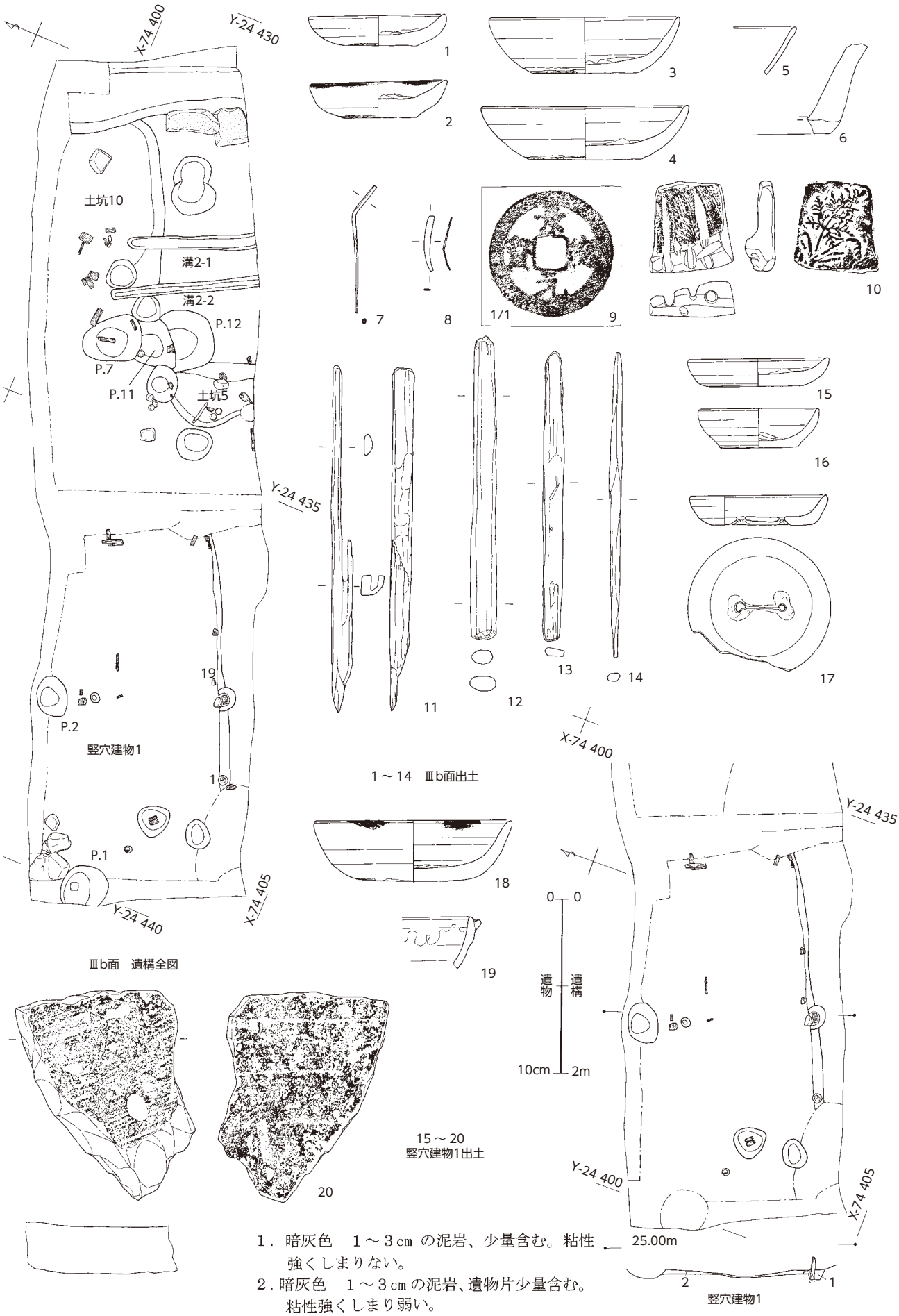


図11　Ⅲａ面出土遺物（2），溝４，同出土遺物



1．暗灰色　1～3㎝ の泥岩、少量含む。粘性強くしまりない。
2．暗灰色　1～3㎝の泥岩、遺物片少量含む。粘性強くしまり弱い。

図12　Ⅲb面遺構全図，竪穴建物1，同出土遺物

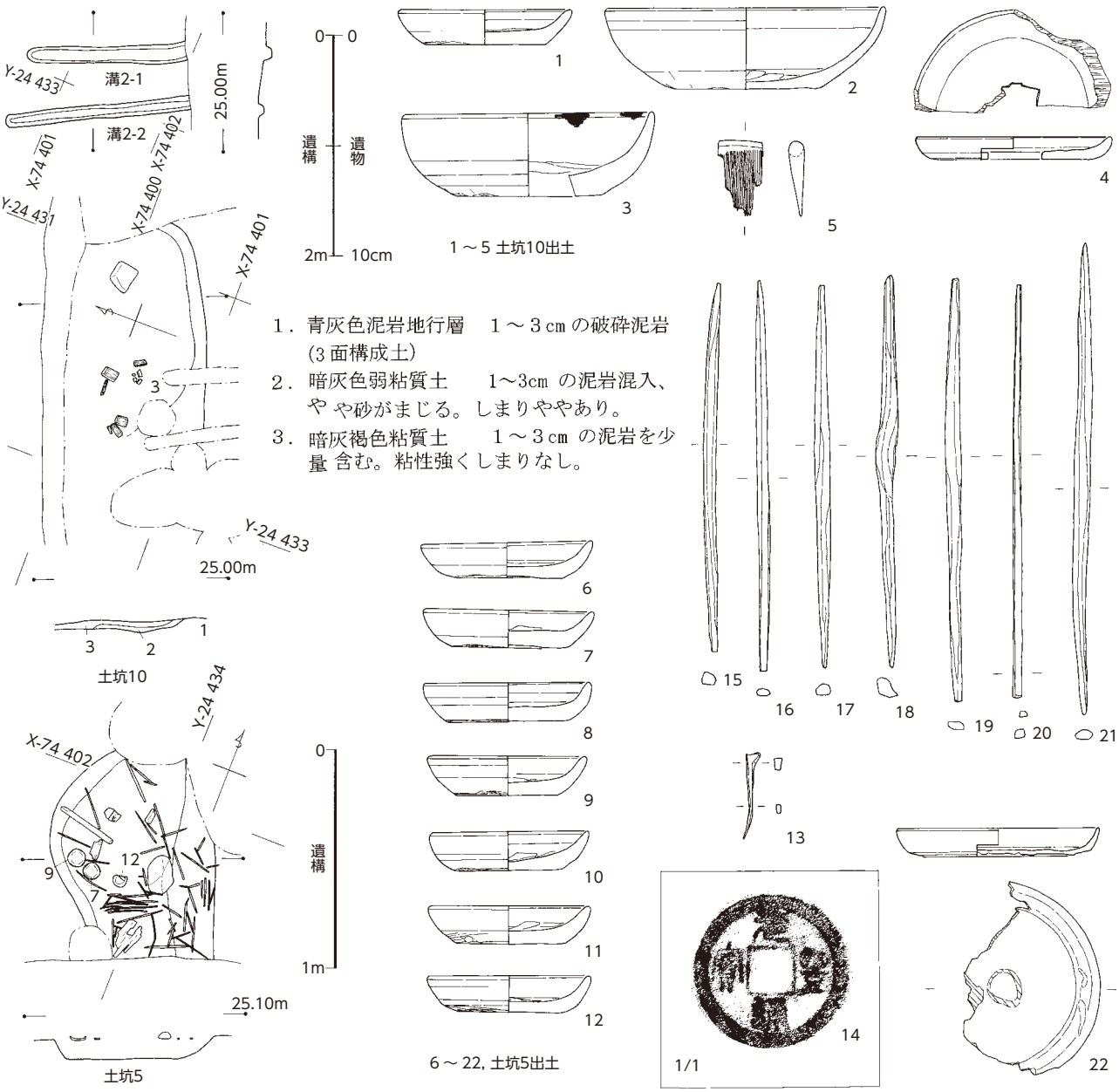


図13　溝2・土坑10・土坑5，同出土遺物

ろう。

4．Ⅲb面

面の概要（図12）

検出高：24.70～24.80ｍ　**面構成土**：破砕泥岩　**検出遺構**：溝3条（うち2条は組みとなる）・板壁竪穴建物2棟・小穴15口　**出土遺物**：土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種中型（3）・土師器皿R種大型（4）・瀬戸入子（5）・土師質火鉢（6）・銅製品（7・8）・景徳元宝（9）・滑石印判（10）・格子部材（11）・串状木製品（12・13）・箸状木製品（14）　**特記事項**：浅い竪穴建物とそれに連続した浅い落ち込みが東西に並ぶ。出土遺物の年代は、全体に13世紀後半を示す。

竪穴建物1（図12）

位置：X－(74 401.50)～－74 404.25　Y－(24 435.58)～－(24 440.30)　**形状**：方形ないし長方形　**規模**：東西（406）㎝×南北（212）㎝×深さ16㎝　**主軸方位**：N－64°－E　**重複関係**：P.1に切られ

る　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（15 ～ 17）・土師器皿Ｒ種大型（18）・瀬戸卸し皿（19）・平瓦（20）　**特記事項**：町屋風の浅い竪穴建物。壁際に細い杭が80㎝～１ｍおきに遺存、柱か。年代は13世紀後半～末だろう。

土坑10（図13）

位置：X－(74 400.10) ～－74 401.14　Y－(24 430.61) ～－(24 432.23)　**形状**：隅丸方形か　**規模**：東西(190)㎝×南北(120)㎝×深さ７～ 10㎝　**主軸方位**：N－67°－E　**重複関係**：P.7・11・12に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1）・土師器皿Ｒ種大型（2・3）・漆器皿（4）・木製櫛（5）　**特記事項**：竪穴建物１東側のほぼ横並びにあり、底面も平らで礎板が散見されるので、当初一連の遺構とした。しかし境界部分の関係性が不明なため、整理時に「土坑」として扱うことにした（したがって土坑番号は下層で検出されたものよりも降る）。年代はやはり13世紀後半～末であろう。南北に走行する平行した２本の細い溝（溝２-1・溝２-2）が本址で断ち切られているが、性格は不明。

土坑５（図13）

位置：X－(74 401.77) ～－(74 403.78)　Y－(24 433.59) ～－24 434.52　**形状**：円形？　**規模**：（105）㎝×（94）㎝×深さ11㎝　**主軸方位**：N－50°－W前後　**重複関係**：P.12に切られる　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（6 ～ 12）・鉄釘（13）・元豊通宝（14）・箸状木製品（15 ～ 21）・漆器椀（22）　**特記事項**：大量の箸状木製品が土坑内に散乱しており、土師器皿も数点みられる。共食儀礼後の一括廃棄か。年代は13世紀後半であろう。

溝2-1・2-2（図13）

位 置：[２-1]X － 74 400.60 ～ － (74 402.03)　Y － (24 432.23) ～ － 24 432.92　[２-2]X － 74 400.65 ～－ (74 402.23)　Y－ (24 43.269) ～－ 24 43.356　**断面形**：1・2とも箱形またはU字形　**規模**：[２-1] 長さ150㎝×幅19㎝×深さ10㎝　[２-2] 長さ172㎝×幅14㎝×深さ8㎝　**流下方向**：[２-1] 確認できず　[２-2] 南→北　**主軸方位**：[２-1]N－22°－W　[２-2]N－28°－W　**重複関係**：ともに土坑10と重なるが、切合い関係は不明　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：２本の細い溝が平行する。ともに土坑10の中で消滅し、切合い関係も観察できないことに加え、流下方向が２-1はほぼ水平、２-2は谷の傾斜とは逆に土坑10に向かっていることから、土坑10に付帯する排水施設のようなものである可能性があろう。

５．Ⅲｃ面

面の概要（図14）

検出高：24.60 ～ 24.70ｍ　**面構成土**：破砕泥岩　**検出遺構**：溝１条・小穴４口　**面出土遺物**：図化しうるものなし　**特記事項**：谷側の２区では、Ⅲｂ面の下にさらにもう一枚の生活面が検出された。上層溝４にあったと同じような、溝付帯施設とみられる石組みがここでも検出されている。この面で検出されたP.18から出土した土師器の年代は13世紀後半。

溝５（図14）

位置：X－(74 399.33) ～－(74 401.16)　Y－(24 430.63) ～－(24 432.22)　**規模**：南北(218)㎝×東西(84)㎝×深さ44㎝　**流下方向**：北→南　**主軸方位**：N－31°－W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**付帯施設**：西岸に上層の溝４と同じく、平たい泥岩を粗く敷いたものがある。やはり橋に関連する可能性があろう。　**特記事項**：これも谷中央部を縦に流れる川の右岸、または道路の西側側溝。溝枠の束柱らしい杭がある。年代は、出土遺物を欠くが、面全体のそれを適用すれば13世紀後半であろう。

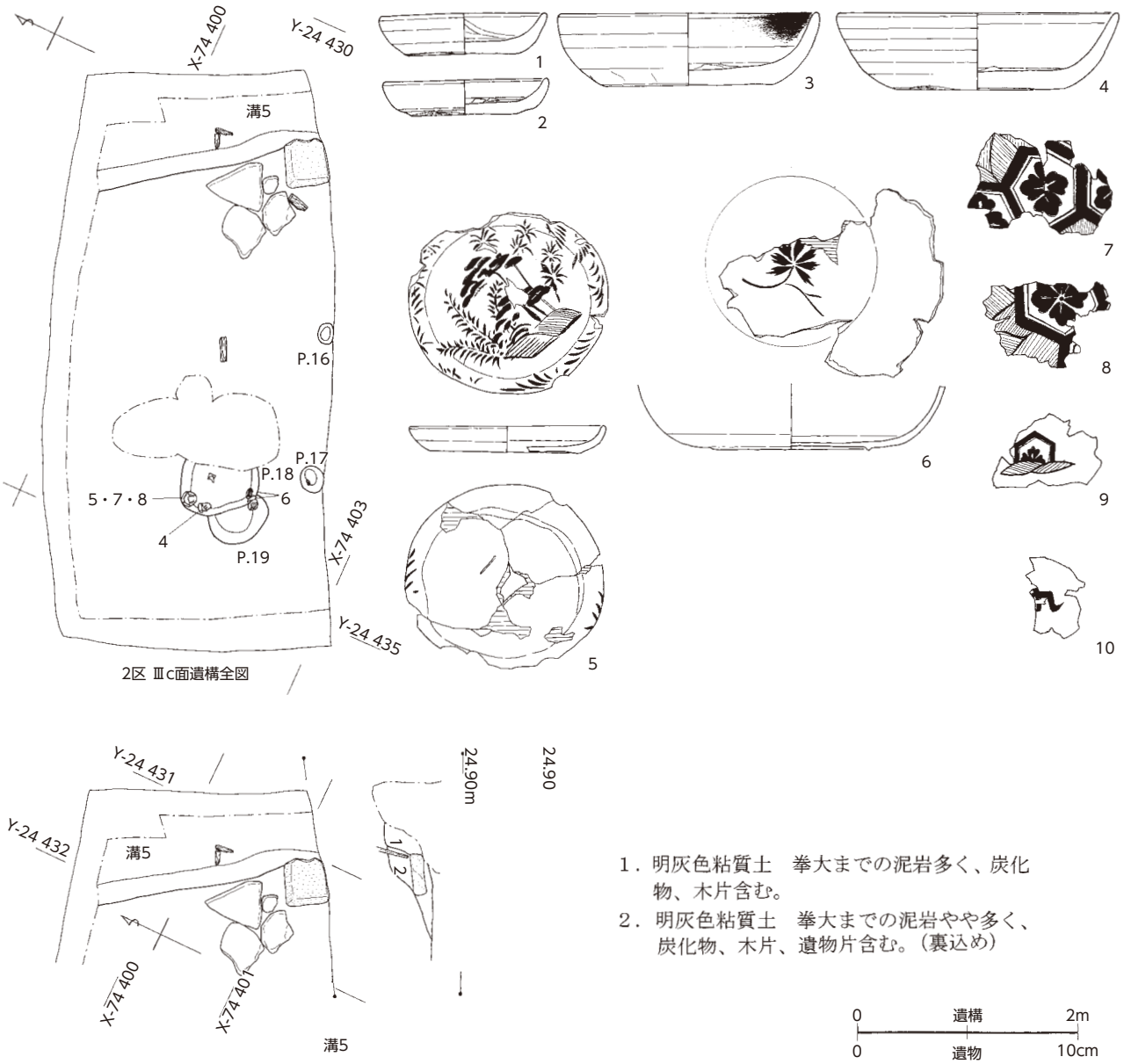


図14　Ⅲc面遺構全図・溝5・P.18出土遺物

P.18出土遺物（図14）

土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種大型（3・4）・漆器皿（5）・漆器椀（6）・漆皮膜（7～10）　**特記事項**：浅い穴の中に比較的多くの遺物が含まれている。7・8は同一個体、5と合わせ口で出土。年代は13世紀後半。

6．Ⅲd面

面の概要（図15）

検出高：24.40～24.70m　**面構成土**：大型破砕泥岩・青灰色粘質土　**検出遺構**：掘立柱建物1棟・柱穴列2列　**特記事項**：面は全体に西の山側に向かって高くなる。上層にはなかった掘立柱建物がここで現れる。**出土遺物**：土師器皿R種小型（1・2）・土師器皿R種大型（3・4）・土錘（5）・常滑片口鉢Ⅱ類（6・7）・常滑甕（8）・鉄釘（9）・漆器皿（10・11）　**特記事項**：2区東半部にはさらに数cm下に面があるが（Ⅲd下部面）、1区Ⅲd面の柱穴列と結びついたため、Ⅲd面として図15上では一括した。面の年代は遺物からみて13世紀中葉～後半としてよかろう。

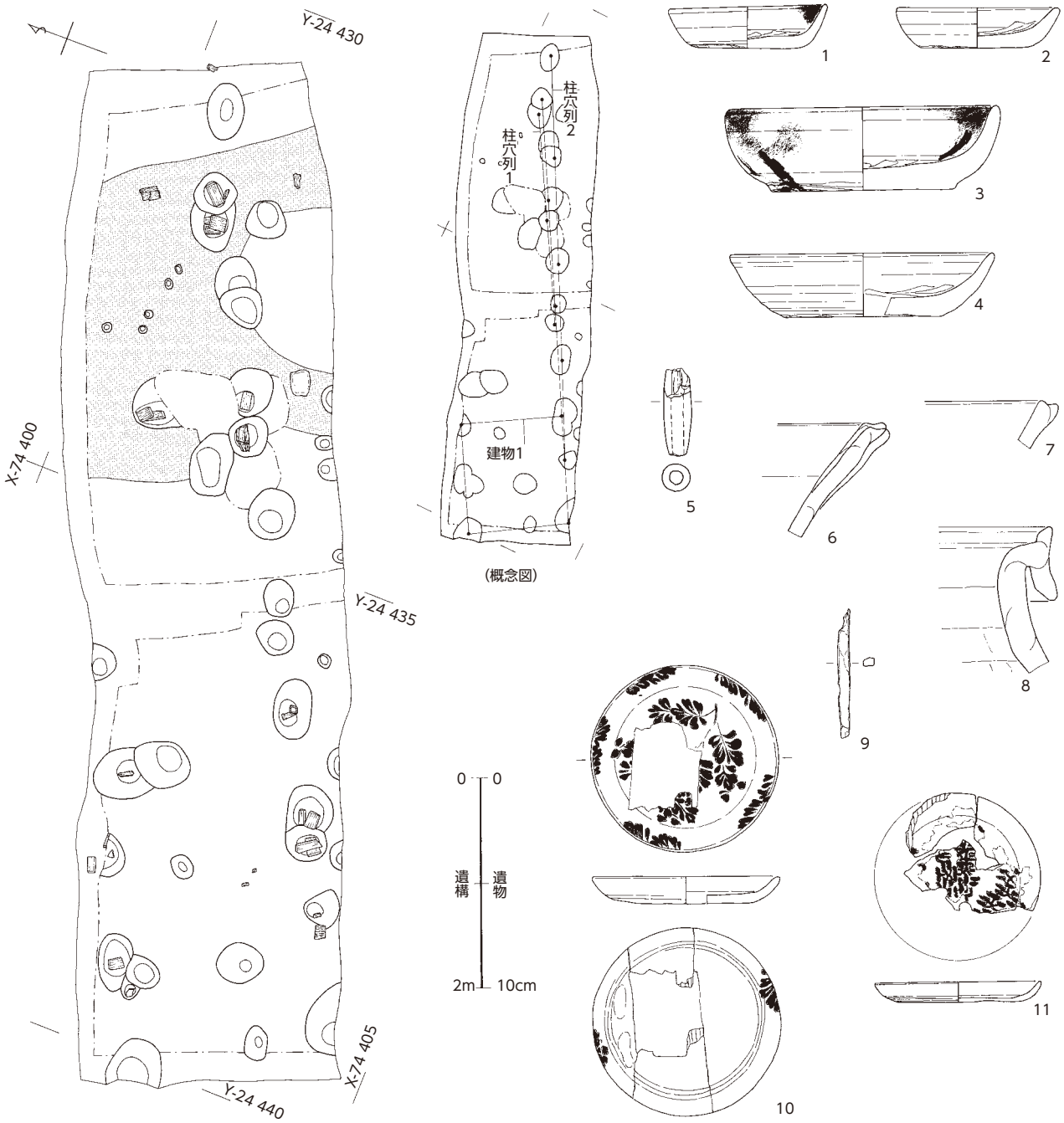


図15　Ⅲｄ面遺構全図・同出土遺物

建物１（図16）

位置：X－74 400.37 ～－74 404.67　Y－24 430.76 ～－(24 440.34)　**規模**：東西４間，8.55ｍ×南北１間，（2.50ｍ）　**主軸方位**：N－60°－E　**重複関係**：柱穴列１を切る　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：次章で述べるように、本址を北に延長すると隣地の二階堂字会下351－３ほか地点（伊丹2004）当該面検出の柱穴列に軸線が一致する。もし同一の建物だとすると、少なくとも南北４間の規模を有することになる。東西は地形的な制約からこれ以上は拡がらない可能性が高い。

柱穴列１（図16）

位置：X－74 400.38 ～－74 403.87　Y－24 431.93 ～－(24 437.75)　**規模**：東西３間，6.74ｍ　**主軸方位**：N－59°－E　**重複関係**：建物１に切られる　**出土遺物**：[P.2] 土師器皿R種小型（1）　**特記事項**：

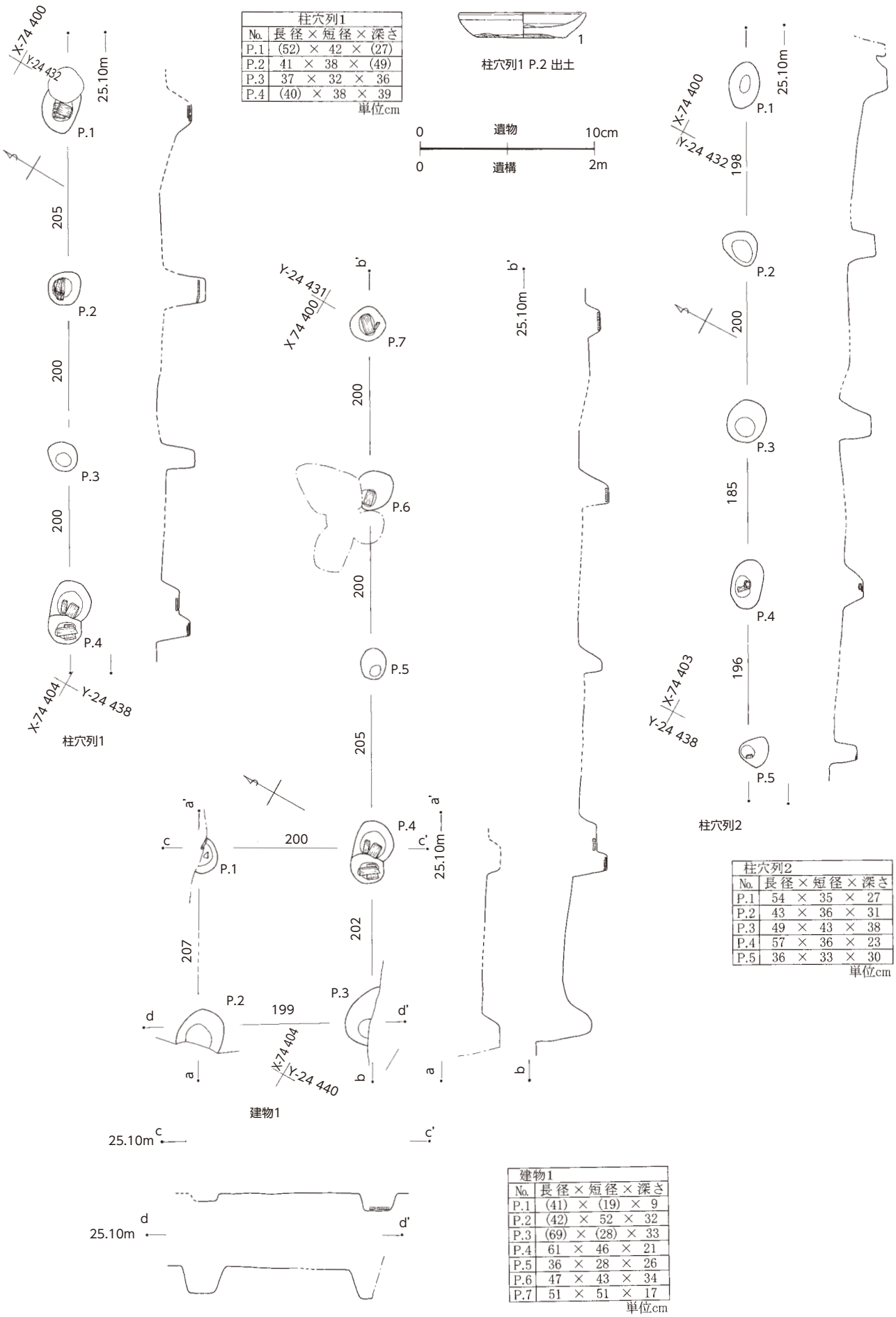


図16　建物１・柱穴列１・柱穴列２，同出土遺物

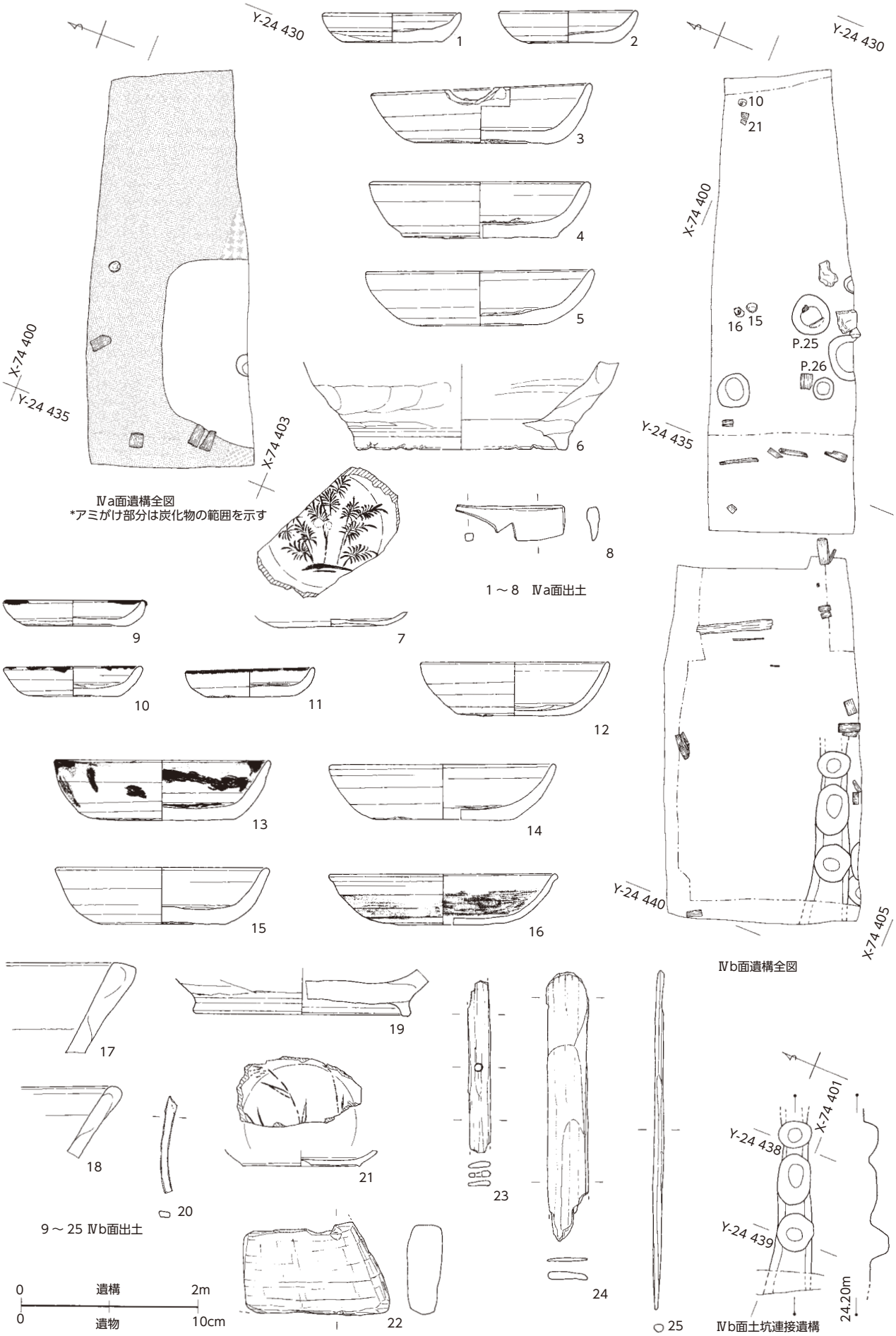


図17　Ⅳa面・Ⅳb面遺構全図，同面出土遺物

柱穴列とはしたが、建物１同様調査区南北の外に拡がり、掘立柱建物となる可能性がある。P.2出土の１は13世紀第３四半期頃であろう。２区検出のP.1・P.2はⅢｄ下部面検出で当該面でも古い。

柱穴列２（図16）

位置：Ｘ－74 400.20 ～－74 404.21　Ｙ－24 430.92 ～－24 438.14　**規模**：東西４間，8.17ｍ　**主軸方位**：Ｎ－60.5°－Ｅ　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：これも南北の調査区外に延びて建物となる可能性がある。

７．Ⅳａ面

面の概要（図17）

検出高：23.95 ～ 24.40ｍ　**面構成土**：拳大破砕泥岩を含む青灰色粘質土・炭化物　**検出遺構**：小穴１口　**面出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1・2）・土師器皿Ｒ種大型（3 ～ 5）・常滑片口鉢Ｉ類（6）・漆器皿（7）・雲形肘木（8）　**特記事項**：調査区は谷側に向かい徐々に低くなっていき、Ⅳ面はほぼ１・２区の境界付近から上下２枚に分かれる。ほぼ２区全体にわたって広く炭の層で覆われた面があり、これをⅣａ面とした。激しい火事に見舞われたことは明らか。炭化物層上面に礎板が三ヶ所点在する。年代は13世紀中葉～同第３四半期頃か。

８．Ⅳｂ面

面の概要（図17）

検出高：24.00 ～ 24.60ｍ　**面構成土**：青灰色粘質土・黄灰色破砕泥岩　**検出遺構**：小穴９口（３口の連接遺構含む）　**面出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（9 ～ 11）・土師器皿Ｒ種中型（12）・土師器皿Ｒ種大型（13 ～ 15）・瀬戸内東部型瓦器（16）・土師質火鉢（17）・常滑片口鉢Ｉ類（18・19）・鉄釘（20）・漆器皿（21）・連歯下駄（22）・用途不明木製品（23）・へら状木製品（24）・箸状木製品（25）　**特記事項**：山際と谷寄りにいくつか穴がある。調査区中央部には礎板様の板が散見され、何らかの小規模建物の存在を示唆するが、落ち込み等はなく詳細は不明。土師器からみた面の年代は13世紀中葉～同第３四半期とすべきだろう。

土坑連接遺構（図17）

位置：Ｘ－74 400.47 ～－(74 401.50)　Ｙ－24 437.60 ～－(24 439.44)　**形状**：溝中に土坑３基が並ぶ　**規模**：長さ197㎝×幅50㎝×深さ24㎝　**主軸方位**：Ｎ－69°－Ｅ　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：東西溝の中に円または楕円形の小穴３口が、10㎝ほど間隔をあけて並ぶ。甕を据えたにしては穴の間隔が狭く、性格は不明。

９．Ｖａ面

面の概要（図18）

検出高：23.60 ～ 24.40ｍ　**面構成土**：小石大～大型泥岩の詰まった黒褐色粘質土　**検出遺構**：小穴７口・土坑３基・段部１ヶ所・泥岩切石敷１箇所　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1・2）・土師器皿Ｒ種大型（3）・南部系卸目入り山茶碗（4）・常滑甕（5）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（6）　**特記事項**：この面も２区で上下に分かれる。１区山際には泥岩が乱雑に敷かれ、その部分の東端で段が形成される。調査区東端に溝は検出されず、もっと谷中央部寄りにあった可能性がある。出土遺物の年代は13世紀中葉～第３四半期。

土坑６（図19）

位置：Ｘ－74 401.23 ～－(74 402.18)　Ｙ－24 433.26 ～－(24 434.55)　**平面形**：不整円形　**断面形**：浅い逆台形　**規模**：東西（122）㎝×南北（102）㎝×深さ14㎝　**主軸方位**：Ｎ－62°－Ｗ　**重複関係**：

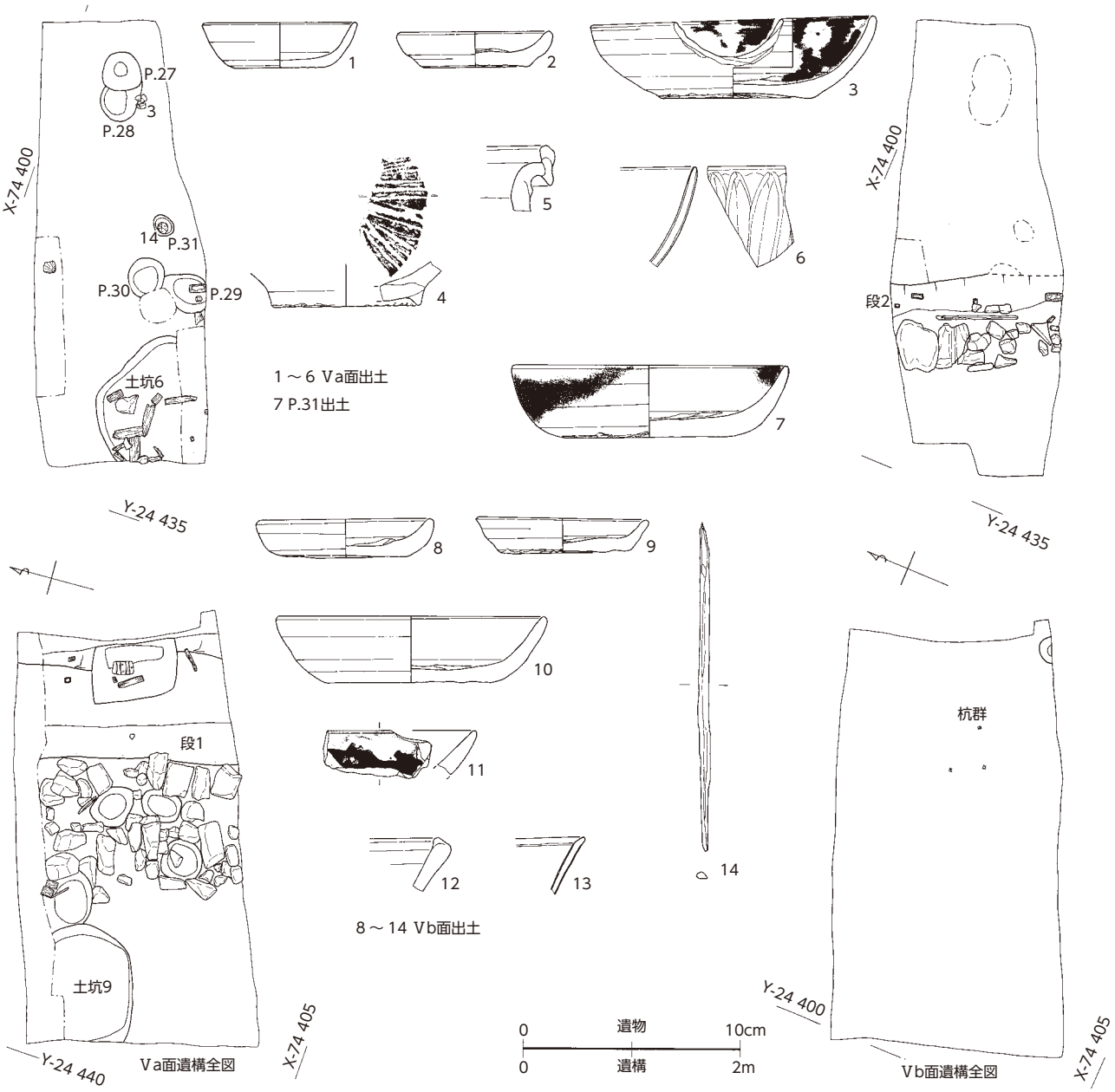


図18　Ｖａ面・Ｖｂ面遺構全図，同面出土遺物

なし　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（2）・土師器皿Ｒ種大型（3）・渥美壺（4）・竜泉窯青磁鉢（5）・筒形木製品（6）・部材（7）・用途不明木製品（8）　**特記事項**：遺物年代は、鎌倉前期の４もあるが、全体に13世紀中葉～第３四半期を示している。

土坑９（図19）

位置：Ｘ－(74 402.38)～－74 403.36　Ｙ－24 438.70～－(24 439.75)　**平面形**：楕円　**断面形**：浅い逆台形　**規模**：東西（108）㎝×南北（77）㎝×深さ18㎝　**主軸方位**：Ｎ－21°－Ｅ　**重複関係**：なし

出土遺物：図化可能遺物なし　**特記事項**：遺物に乏しくこれのみでの年代比定は困難だが、層位的には前後の関係から13世紀中葉～同第３四半期に属する。

P.31出土遺物（図18）

土師器皿Ｒ種大型（7）　**特記事項**：器壁がかなり厚く、13世紀中葉の年代を示している。

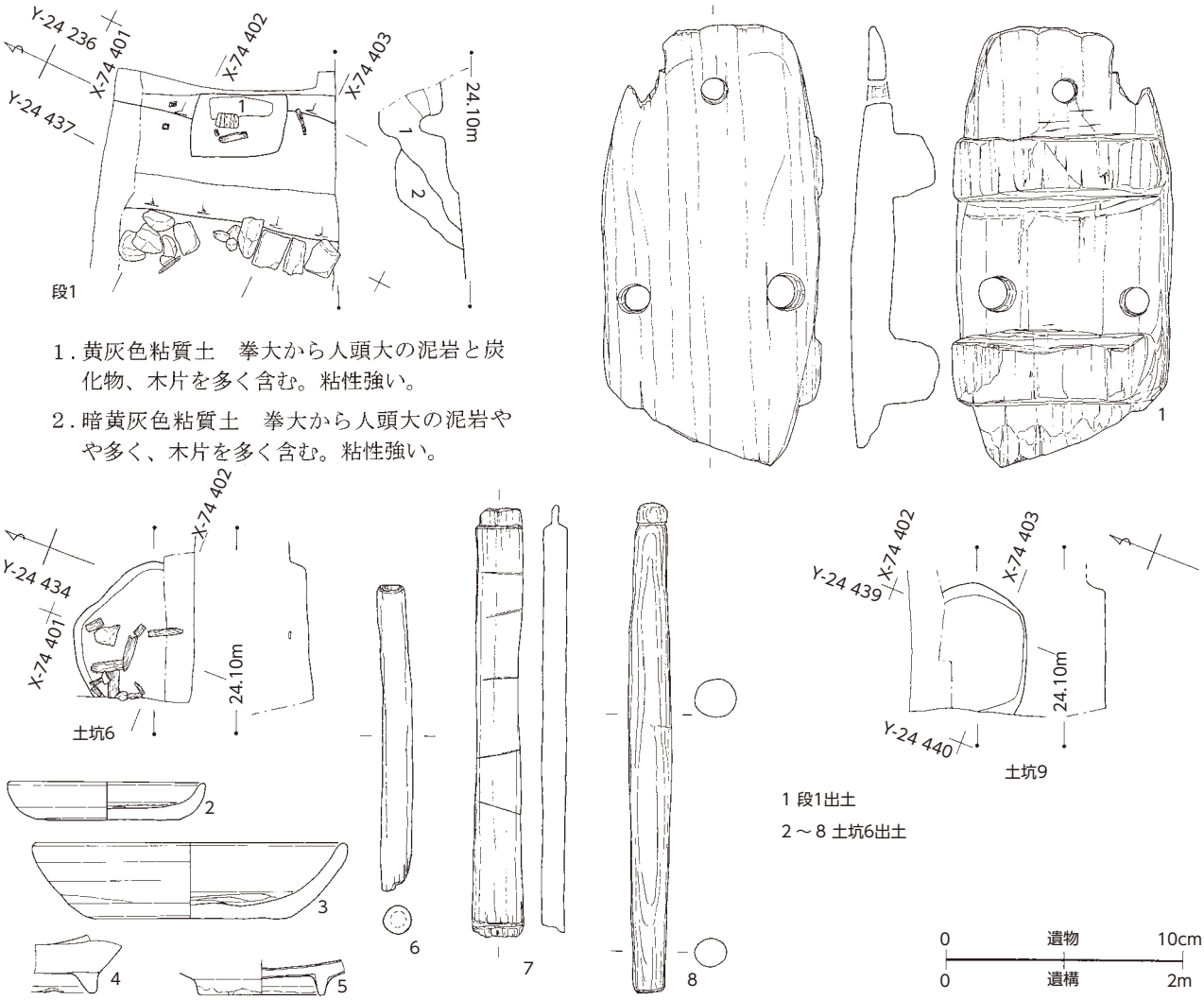


図19　Ｖa面土坑６・９，段，同出土遺物

段１（図19）

位置：X－(74 401.30)～－(74 403.58)　Y－(24 435.56)～－(24 437.90)　**段差**：70㎝　**主軸方位**：N－18°－W　**出土遺物**：連歯下駄（1）　**付帯施設**：段下に南北81㎝×東西53㎝×深さ31㎝、長方形の土坑がある。切合いが観察できないので同時存在の施設と判断　**特記事項**：溝のようにも見えるが土層断面の観察では対岸がなく、段状の落ちと判断した。４～５回の掘り直しがあり、それぞれの底面の深度差によって中位にさらに段が生じている。切り込み肩の面上には凝灰岩や泥岩が乱雑に置かれており、山際に通路状の施設が存在していた可能性がある。

10．Ｖｂ面

面の概要（図18）

検出高：23.50～24.00ｍ　**面構成土**：暗青灰色粘質土　**検出遺構**：段部１ヶ所・小穴１口・杭群１ヶ所　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（8・9）・土師器皿Ｒ種大型（10）・土師器皿Ｔ種大型（11）・常滑片口鉢Ⅱ類（12）・白磁口はげ皿（13）・箸状木製品（14）　**特記事項**：この面にも東側に溝はない。11は本地点唯一の手づくね成形の土師器である。面全体の年代は13世紀中葉～第３四半期であろうが、11の存在を考えると13世紀第２四半期も視野に入れてよいであろう。

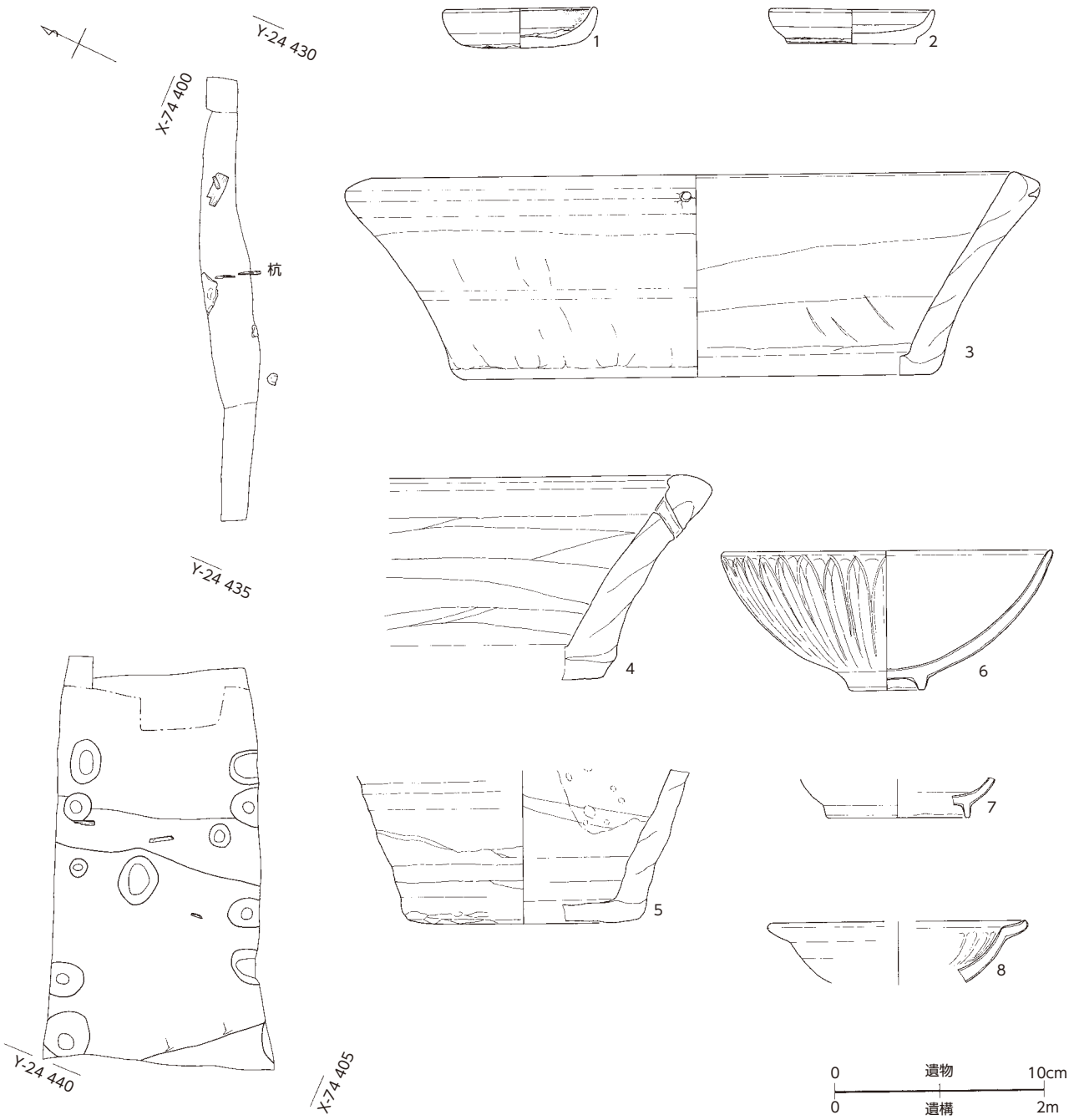


図20　Ⅵ面遺構全図，Ⅵ面出土遺物

段２（個別図略，断面は図５参照）

位置：X－(74 400.40) ～－(74 402.42)　Y－(24 432.75) ～－(24 434.75)　**段差**：28㎝　**主軸方位**：N－23°－W　**重複関係**：なし　**出土遺物**：段下に図化可能遺物なし　**特記事項**：これのみでは年代はわからないが、面全体では13世紀中葉～第３四半期頃であろう。

杭群（個別図略）

位置:X－74 402.63 ～－74 402.95　Y－24 436.93 ～－24 437.41　**平面形**:３本の杭が立つ　**規模**:東西40㎝×35㎝　**主軸方位**：N－63°－W(東西を主軸とみた場合)　**特記事項**：３本の杭がカギの手に配されている。囲炉裏の隅の束柱の可能性がある。上部はＶａ面の切石群により壊されたとみたい。年代は面のそれに準じ、13世紀中葉～第３四半期であろう。

11．Ⅵ面

面の概要（図20）

検出高：23.15 ～ 23.90ｍ　**面構成土**：岩盤・暗青灰色粘質土　**検出遺構**：掘立柱建物２棟・杭列・礎板　**出土遺物**：土師器皿Ｒ種小型（1・2）・土師質火鉢（3）・瓦器火鉢（4）・褐釉壺（5）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文碗（6）・竜泉窯青磁無文鉢（7）・竜泉窯青磁鎬蓮弁文折縁鉢(8)　**特記事項**：西の山側では岩盤面を、東の谷側では岩盤の落ちを埋めた暗青灰色粘質土上面を生活面として使っている。２区はＶｂ面検出時点ですでに地表面からの掘削深度が2.5ｍを超えており、安全面への配慮から全面掘削はおこなわず、幅50㎝ほどの確認坑を入れるだけにとどめた。岩盤面はいくらか傾斜を持つが、本来の谷の傾斜からみて不自然に平坦で、削平により形成されたと考えるべきであろう。２区の低位面の土層には多量の破砕泥岩とともに炭化物も多くみられるが（図5）、それには以上のような背景も想定される。１区中央部には谷に向かって落ちる段がある。段の斜面は谷形成時の岩盤自然傾斜面とみられるが、段下もまた生活面とされ、柱穴様の小穴が検出された。柱穴は段の上下にあり、一連の建物かどうかは疑問なしとしないが、ここでは連携を想定して線で結んでおく。出土遺物には13世紀前半とみられる中国産の褐釉壺（5）が含まれているが、全体的には13世紀中葉～後半であろう。

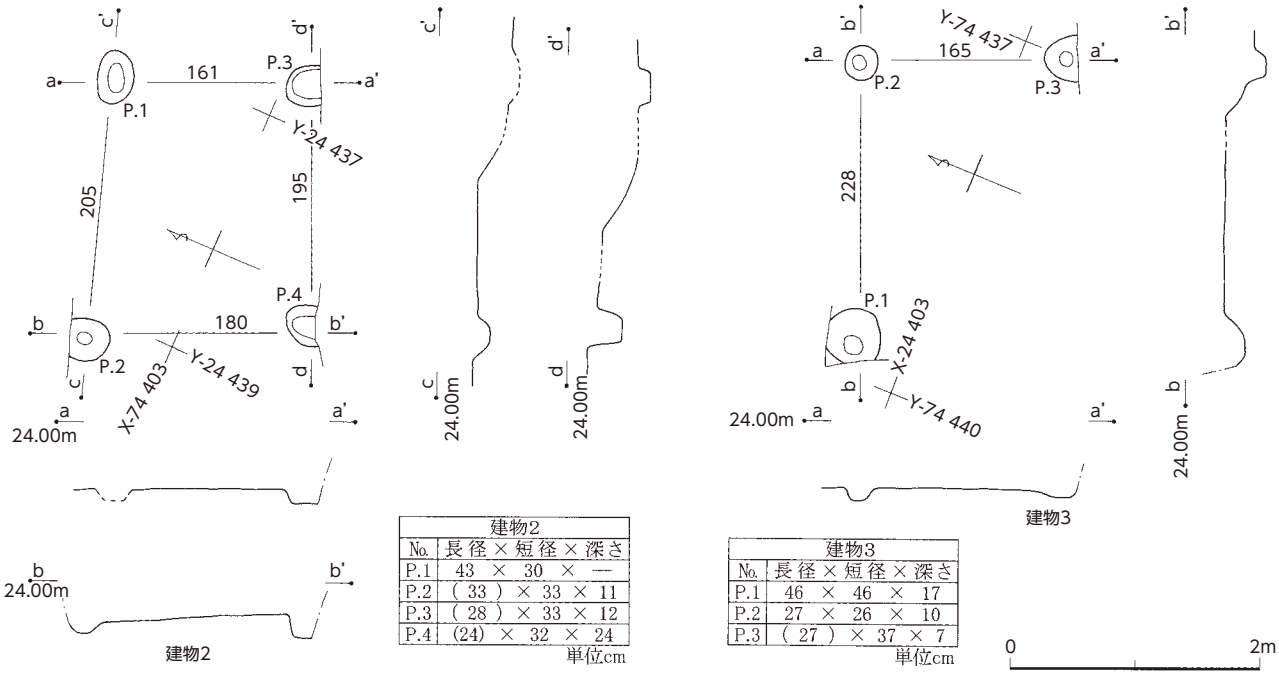
建物２

位置：X－74 401.68 ～－(74 402.17)　Y－24 436.47 ～－24 439.40　**平面形**：調査区内で方形　**規模**：東西１間（250㎝）×南北１間（200㎝）　**主軸方位**：Ｎ－67°－Ｅ　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：上述のように段の上下にまたがっており、建物としてのつながりには検討の余地があるが、柱穴同士に共通要素もあるのでここに呈示しておく。

建物３

位置：X－24 401.70 ～－(24 403.53)　Y－74 436.82 ～－(74 439.92)　**平面形**：カギ形　**規模**：東西１間（256㎝）×南北１間（200㎝）　**主軸方位**：Ｎ－69°－Ｅ　**重複関係**：なし　**出土遺物**：図化可能遺物なし　**特記事項**：これも上記建物２同様建物としてのつながりは確実ではないが、穴の大きさなど共通する点もあるので、建物の可能性を指摘しておく。

（馬淵）



建物2				
No.	長径	×	短径	× 深さ
P.1	43	×	30	× —
P.2	(33)	×	33	× 11
P.3	(28)	×	33	× 12
P.4	(24)	×	32	× 24

単位cm

建物3				
No.	長径	×	短径	× 深さ
P.1	46	×	46	× 17
P.2	27	×	26	× 10
P.3	(27)	×	37	× 7

単位cm

図21　Ⅵ面建物２・３

表１　出土遺物観察表（１）

挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
図6-1	Ⅰ面	Ⅰ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.7）cm　底径（6.7）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・砂粒・雲母片・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
2	Ⅰ面	Ⅰ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.3cm　底径7.4cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒を含む淡黄橙色弱粉質土
3	Ⅰ面	Ⅰ面包含層	瀬戸美濃 すり鉢	底部片　輪積み成形　胎土は淡灰橙色　砂粒・赤色粒・岐路色石英・長石の微粒～微石を含む 褐釉　条線は13本 内面下位は使用のため磨耗
4	Ⅰ面	Ⅰ面包含層	白磁 口はげ皿	口径（9.2）cm　ロクロ成型　口縁部面取り、釉ぬぐう　素地は砂粒子を含む灰白色　釉は不透明な青灰白色で貫入あり
5	Ⅰ面	Ⅰ面包含層	平瓦	厚(2.3)cm　胎土は砂粒・長石粒・雲母を含む堅致な灰褐色土　凸面は糸切り痕、凹面は布目痕が残る
図7-1	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.75）cm　底径4.8cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
2	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.7cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱粉質土
3	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.7cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱粉質土
4	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径(7.4)cm　底径5.3.cm　器高1.55cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・少量の雲母片を含む黄灰色弱粉質土
5	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径(7.8)cm　底径5.4.cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の雲母片を含む黄灰色弱砂質土
6	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.3.cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の雲母片を含む淡灰橙色砂質土　器表は被熱により剥落、口縁部に油煤付着
7	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.4.cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　口縁部を故意に打ち欠く　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡黄橙色砂質土
8	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.0.cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・少量の雲母片を含む淡灰橙色弱砂質土　口縁部に油煤少量付着
9	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径5.3.cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片を含む黄灰色弱砂質土
10	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径（10.77）cm　底径（5.6）cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・海綿骨針・微量の雲母片を含む淡橙色粉質土
11	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径11.3cm　底径6.0cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕あり　胎土は多量の砂粒・赤色粒子・雲母片を含む肌色を呈す堅緻な砂質土
12	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径6.2cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕・不貫通の穿孔あり　胎土は・赤色粒子・雲母片・海綿骨芯を含む橙色粉質精良土
13	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径10.8cm　底径7.2.cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　口縁部に油煤付着　胎土は赤色粒子・砂粒・雲母片を含む黄灰色弱砂質土で堅緻
14	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径5.9.cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・泥岩粒含む橙色弱粉質土　口縁部に故意に撃ち欠いた部分あり
15	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径6.9.cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・気孔含む橙色弱粉質土
16	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.7）cm　底径（8.3）cm　器高3.Ⅰcm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微量の雲母片を含む橙色粉質土
17	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（13.8）cm　底径（8.4）cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・微砂粒・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
18	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.2）cm　底径（6.5）cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微砂粒・海綿骨芯・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
19	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（8.0）cm　底径（7.8）cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・微量の雲母片・海綿骨芯を含む橙色精良粉質土
20	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.0cm　底径6.7cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨針・泥岩粒・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
21	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（13.8）cm　底径（8.5）cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕あり 胎土は赤色粒子・微砂粒・微量の雲母片を含む淡橙色粉質土　内面・外面とも広い範囲に煤状の黒色物質が付着する
22	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.3cm　底径7.5.cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に強く板状圧痕　内底部ナデ　口縁部と内底部に油煤付着　胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む淡橙色弱砂質土
23	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径13.8cm　底径8.2.cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に板状圧痕　内底部ナデ　口縁部に少量の油煤付着　胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片それぞれ少量を含む淡橙色弱粉質精良土
24	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径13.3cm　底径8.8.cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片を含む橙色弱粉質土
25	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	瓦器火鉢	底部片　胎土は白色粒・赤色粒・砂粒・礫を含む灰色瓦質土、器表は灰橙色　内面下位に斜めに平行した引っかき傷
26	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石・石英微粒を含む暗灰色緻密土　器表は黒褐色　小片のため使用痕は不明
27	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	瀬戸 入子	口縁部片　口径（７．７）㎝　ロクロ成形 胎土は黄灰色　器表は灰色　内面降灰による自然釉
28	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	瀬戸 卸し皿	口縁部～体部片　口径（13.45）cm　ロクロ成型　胎土は明黄灰色　灰釉、二次焼成を受け口縁部～外側にかけて剥離
29	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	瀬戸 卸し皿	底部片　ロクロ成型 胎土は明灰褐色　灰釉、外底部は露胎
30	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	底部片　底径（5.1）cm　ロクロ成形　素地は明灰色、黒色微粒子含み緻密　釉は青緑色半透明　削りだし高台、畳み付きより内側は露胎　複弁　貫入あり
31	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	白磁 口はげ皿	口縁部片　ロクロ成型　口縁部面取り、釉ぬぐう　素地は微砂粒を含む灰白色　釉は不透明な灰緑色
32	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	開元通寶	初鋳唐621年　唐　楷書
33	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	熙寧元寶	初鋳1068年　北宋　篆書
34	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	石製　硯	残存長（10.5）cm　残存幅（6.1）cm　最大厚3.4cm　頁岩製太子硯　両面から脚を削りだし、表面は非常に滑らかで端正な仕上がり　色調は明灰色　国産ではない

表２　出土遺物観察表（2）

挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
35	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	擦り石	残存長（7.7）cm　残存幅（8.0）cm　残存厚（2.1）cm　表面は非常に滑らかに平らに研磨されている　色調は灰色　全体像は不明
図8-36	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	凹石	残存長（16.8）cm　残存幅（17.2）cm　残存厚（6.5）cm　表面の曲面は滑らかに研磨　色調は灰色　上面の窪みは火を受けて赤褐色化、煤付着
37	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	箸状木製品	全長19.1㎝　幅0.85㎝　厚0.6㎝　両口
38	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	箸状木製品	全長16.1㎝　幅0.6㎝　厚0.3㎝　両口
39	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	漆器　椀	高台径8.2cm　輪高台　内側・外側とも黒漆塗り、見込みおよび体部外側に朱漆の手描き鶴丸文　外底面中央に朱漆で「七」の文字
40	Ⅱ面	Ⅱ面包含層	骨製品　笄	残存長（8.7）㎝　残存幅（1.4）㎝　厚0.3㎝
41	Ⅱ面	Ｐ．８	箸状木製品	全長18.0㎝　幅0.5㎝　厚0.3㎝　両口
42	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.45cm　底径5.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・少量の雲母片を含む淡橙色弱粉質土
43	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.0cm　底径4.9cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕不明瞭　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・少量の泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
44	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　小型	口径（7.8）cm　底径（5.1）cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部かすかな板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・少量の雲母片と泥岩粒を含む淡橙色弱粉質土　油煤付着
45	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（13.8）cm　底径（8.3）cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・雲母片を含む橙色粉質土
46	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（12.8）cm　底径（8.0）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は砂粒・多量の泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
47	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.0cm　底径7.8cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
48	Ⅱ面	囲炉裏	土師器皿 Ｒ種　大型	口径（11.8）cm　底径（6.3）cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片を含む淡橙色弱砂質土
49	Ⅱ面	囲炉裏	常滑 片口鉢Ⅱ類	口径31.6cm　底径14.2cm　器高11.4cm　輪積み成形　胎土は長石・石英粒を多く含む粗い橙褐色土　内底面は使用により磨耗　外面指頭痕、下位削り、煤と灰付着
50	Ⅱ面	囲炉裏	砥石 仕上砥	残存長（3.3）cm　幅2.9cm　最大厚0.6cm　灰色頁岩　砥面２面　鳴滝産
図9-1	Ⅱ面	土坑２	土師器皿 Ｒ種　小型	口径6.8cm　底径4.7cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片を含む淡橙色弱砂質土　口縁から体部にかけて油煤付着
2	Ⅱ面	土坑２	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.8cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片を含む灰黄色砂質土
3	Ⅱ面	土坑２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径（10.6）cm　底径（7.4）cm　器高2.7cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は赤色粒子・微砂・雲母片を含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅱ面	土坑２	土師器皿 Ｒ種　中型	口径11.8cm　底径7.4cm　器高2.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
5	Ⅱ面	土坑２	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.0cm　底径7.2cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・雲母片・気孔を含む淡褐色弱砂質土　内底面に多量の、外底面に少量の油煤付着
6	Ⅱ面	土坑２	瓦器火鉢	口径(40.2）cm　底径（31.7）cm　器高10.2cm　輪積み成型　胎土は赤色粒子・白色粒子・砂粒・雲母片を含む橙色砂質土　器表は黒灰色
7	Ⅱ面	土坑２	箸状木製品	全長16.1㎝　幅0.55㎝　厚0.55㎝　両口
8	Ⅱ面	土坑２	箸状木製品	全長18.8㎝　幅0.6㎝　厚0.5㎝　両口
9	Ⅱ面	土坑２	箸状木製品	全長16.2㎝　幅0.7㎝　厚0.35㎝　両口
10	Ⅱ面	土坑２	骨製品　笄	残存長（13.4）㎝　幅1.4㎝　厚0.3㎝
11	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.75cm　底径5.25cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は少量の赤色粒子・微砂粒を含む淡褐色橙色弱粉質土
12	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.6cm　底径4.4cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡褐色弱砂質土
13	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.7cm　底径5.1cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡褐色弱砂質土
14	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.4cm　底径5.4cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・少量の雲母片・泥岩粒・砂粒を含む淡灰褐色弱砂質土
15	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　小型	口径7.5cm　底径5.5cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・泥岩粒・砂粒を含む淡灰褐色砂質土
16	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　中型	口径（10.7）cm　底径（6.9）cm　器高2.95cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部かすかな板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤色粒子・微砂を含む橙色弱粉質土
17	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　中型	口径（11.8）cm　底径（7.0）cm　器高2.8cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は赤砂粒・砂粒を含む淡橙色弱粉質土
18	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.55cm　底径8.3cm　器高3.9cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部かすかな板状圧痕　内底部ナデ　胎土は赤色粒子・雲母片・砂粒を含む橙色弱砂質土　内面・外面とも少量の煤付着
19	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.95cm　底径7.8cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・少量の雲母片・砂粒を含む淡橙色砂質土　口縁部全体に油煤付着
20	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.35cm　底径7.1cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部に強い板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・大粒の泥岩粒・砂粒を含む橙色弱砂質粗土
21	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.55cm　底径8.3cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部強い板状圧痕　内底部ナデ胎土は赤色粒子・雲母片・微砂を含む淡橙色弱砂質土
22	Ⅱ面	土坑３・４	土師器皿 Ｒ種　大型	口径12.2cm　底径7.4cm　器高23.15cm　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部かすかな板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・大粒の泥岩粒を含む淡褐色弱砂質粗土
23	Ⅱ面	土坑３・４	瓦器火鉢	口径(35.5）cm　底径（25.5）cm　器高9.22cm　輪積み成型　胎土は白色粒子・砂粒・礫を含む灰色砂質土　器表は灰色　外側中位は木口工具または篦による縦位の掻きナデと指頭痕、下位は削り　外底面に板状圧痕あり
24	Ⅱ面	土坑３・４	連歯下駄	残存長（19.3）㎝　残存幅（9.6）㎝　残存高（4.3）㎝
25	Ⅱ面	土坑３・４	棒状木製品	全長15.1㎝　幅1.5㎝　厚0.7㎝
26	Ⅱ面	土坑３・４	箸状木製品	全長17.6㎝　幅0.6㎝　厚0.35㎝　両口
27	Ⅱ面	土坑３・４	箸状木製品	全長18.15㎝　幅0.75㎝　厚0.5㎝　両口
28	Ⅱ面	土坑３・４	皇宋通寶	初鋳1038年　北宋　篆書

表3　出土遺物観察表（3）

挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
図10-1	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径4.2cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子を含む橙色弱粉質土　口縁から内底部の一部に油煤付着
2	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径4.9cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・微砂を含む黄灰色弱砂質土
3	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.0cm　器高2.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は雲母片・赤色粒子・微砂を含む淡橙色弱砂質土
4	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.8）cm　底径（5.0）cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・泥岩粒・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
5	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.2cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色砂質土
6	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.1cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土　内面全体が黒灰色に焼けている
7	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.6cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
8	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.7cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部に薄く板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
9	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
10	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.5cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質粗土
11	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径（5.6）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙色弱砂質土
12	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径5.5cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色砂質粗土
13	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径8.2cm　底径6.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
14	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.6cm　底径5.5cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
15	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径8.0cm　底径5.8cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕　胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土　二次焼成を受けて器表は全体に灰色を帯びる
16	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径8.4cm　底径6.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は雲母片・赤色粒子・砂粒を含む淡橙砂質土
17	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径11.8cm　底径7.8cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質粗土　内面と外底面は暗灰色に焼けている
18	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.8）cm　底径（8.2）cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質粗土　内底面に油煤付着
19	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.8）cm　底径7.5cm　器高3.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む黄灰色弱砂質土
20	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（8.2）cm　底径12.3cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む橙色弱砂質土
21	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.4cm　底径7.7cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質土
22	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.9）cm　底径（7.5）cm　器高2.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子を含む橙色弱粉質土　内面に油煤付
23	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.7cm　底径8.5cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・雲母片・赤色粒子・泥岩粒・微砂を含む橙色弱砂質土　内面に油煤付着
24	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	底部片　輪積み成形　胎土は白色粒・砂粒を含む粗い灰色土　内面は使用により磨耗、黒灰色に焼けている
25	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	底縁部片　輪積み成形　胎土は長石・石英粒を多く含む暗灰色土　器表は赤褐色～灰色
26	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口径（34.6）cm　底径16.0cm　器高11.8cm　輪積み成形　胎土は長石・石英粒を多く含む粗い暗灰色土　器表は茶褐色　内底面は使用により磨耗　外面指頭痕、下位削り　竪穴１・土坑３・４から同一固体と思われる破片が出土している
27	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	常滑　甕	口縁部片　口径（41.4）cm　輪積み成形　胎土は白色粒・気孔を少し含む粘性の強い灰色土　器表は灰色　頸部から肩部に多量の降灰　Ⅵ面包含層出土の破片と接合
28	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	丸瓦	胎土は雲母片・微石を含む灰褐色緻密土　凸面は火を受けて爆ぜており、凹面は布目痕が残る　全体に破片になった後黒く焼けている
29	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	竜泉窯　青磁 鎬蓮弁文折縁鉢	口縁～体部片　ロクロ成形　素地は黒いろ微粒子を含む灰白色　釉は青緑色不透明　貫入あり　二次焼成を受け釉表は荒れる　外面は鎬蓮弁文
図11-30	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	金銅製品	厚さ0.03cm　直径1.4cm　丸みを帯びて0.25㎝の縁が折れ曲がり、ほぼ中央部に0.19cmの小孔　縁に三角形に尖った爪が一箇所あり
31	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	紹聖元寶	初鋳1094年　北宋　行書
32	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	鉄釘	残存長（7.1）cm　幅0.6cm　厚0.4㎝　残存重量2.9ｇ
33	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	鉄釘	残存長（3.9）cm　幅0.55cm　厚0.4㎝　残存重量2.2ｇ
34	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	砥石　中砥	残存長（14.1）cm　最大幅5.0cm　最大厚1.8cm　桃灰色凝灰岩　砥面４面　天草産
35	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	骨製品　笄	長8.5㎝　幅0.9㎝　厚0.3㎝
36	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	木製品 糸枠　横木	長11.6㎝　幅1.1㎝　厚0.9㎝
37	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	連歯下駄	残存長（18.3）㎝　残存幅（7.6）㎝　残存厚（3.6）㎝　柾目材
38	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	木製品 雲形　肘木	全長9.5㎝　幅3.6㎝　厚1.0㎝　上面・側面の取り付け部分以外は黒漆塗り
39	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	箸状木製品	長18.7㎝　幅0.6㎝　厚0.45㎝　両口
40	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	箸状木製品	長18.6㎝　幅0.5㎝　厚0.5㎝　両口
41	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	箸状木製品	長22.3㎝　幅0.75㎝　厚0.6㎝　両口

表４　出土遺物観察表（4）

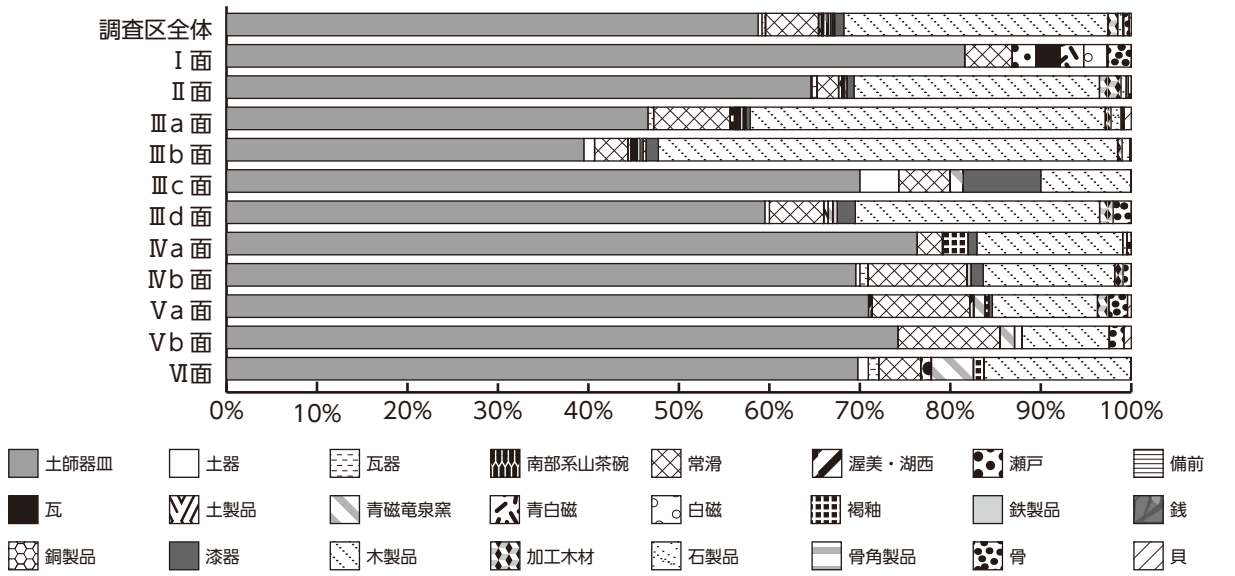
挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
42	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	箸状木製品	長21.7㎝　幅0.8㎝　厚0.5㎝　両口
43	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	串状木製品	長28.7㎝　幅0.9㎝　厚0.5㎝　両口
44	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	残存長（8.9）㎝　幅1.4㎝　厚0.3㎝　小孔貫通　扇骨の一部か
45	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	長14.7㎝　幅0.75㎝　厚0.4㎝　一端は尖り、他端は丸みを帯びる　串状
46	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	長17.5㎝　幅1.3㎝　厚0.7㎝　角棒状、切れ込み二箇所あり
47	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	長21.9㎝　幅1.4㎝　厚0.6㎝　断面レンズ型の箆状、両端は丸みを帯びた整形
48	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	長14.1㎝　幅1.9㎝　厚1.4㎝　棒状
49	Ⅲａ面	Ⅲａ面包含層	用途不明木製品	長13.3㎝　幅1.6㎝　厚1.0㎝　断面蒲鉾型の棒状、両端は丸い
50	Ⅲａ面	溝４	土師器皿 R種　小型	口径（7.4）cm　底径（5.0）cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部強い板状圧痕　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・礫含む橙色砂質土
51	Ⅲａ面	溝４	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は白色粒を少量含む粘性の強い明灰色土　器表は明茶色
52	Ⅲａ面	溝４	備前 すり鉢	口縁部片　輪積み成形　胎土は灰色　砂粒・石英・長石粒・礫・黒色粒を含む 器表は灰褐釉で内外面とも煤付着　条線は５本　内面下位は使用のため磨耗
53	Ⅲａ面	溝４	箸状木製品	長18.8㎝　幅0.6㎝　厚0.3㎝　両口
54	Ⅲａ面	Ｐ.10	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.3cm　器高18cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・白色粒・雲母片・砂粒・大きい泥岩粒含む淡橙色砂質粗土
図12-1	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.5cm　器高18cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒・礫含む黄灰色砂質土
2	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径4.3cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒・大きい泥岩粒含む黄灰色砂質　口縁部に帯状に油煤付着
3	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	土師器皿 R種　中型	口径（10.8）cm　底径（5.2）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・微砂粒含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.8）cm　底径6.6cm　器高3.1m　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒・泥岩粒を含む淡橙色弱砂質粗土　内底部・外底部に煤付
5	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	瀬戸　入子	口縁部片　　ロクロ成形　胎土は灰色　器表は灰色　内面降灰による自然釉
6	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	土師質火鉢	底部片　胎土は白色粒・多量の砂粒・礫を含む赤橙色瓦質土、器表は灰橙色
7	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	銅製品	長7.5cm　径0.2 ～ 0.15cm　薄い銅板を丸めて筒状に整形
8	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	銅製品	残存長（3.2）cm　幅0.4cm　厚0.03cm
9	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	景徳元寶	初鋳1004年　北宋　楷書
10	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	滑石　印判	長5.2cm　幅4.8cm　厚1.8cm　滑石鍋転用品　側面に同方向の４箇所の孔貫通　表面に植物文の浮き彫り、裏面に稚拙な線刻あり
11	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	格子部材	残存長（20.1）㎝　幅1.2㎝　厚1.1㎝　棒状　途中から厚さ0.3 ～ 0.5cmの二枚の板に別れその先端は円く整えられる
12	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	串状木製品	長17.4㎝　幅1.5㎝　厚0.85㎝　棒状　全体に丸みを帯びる
13	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	串状木製品	長16.6㎝　幅1.15㎝　厚0.55㎝　箆状
14	Ⅲｂ面	Ⅲｂ面包含層	箸状木製品	長17.6㎝　幅0.75㎝　厚0.45㎝　両口
15	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	土師器皿 R種　小型	口径7.9cm　底径5.9cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱砂質土
16	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	土師器皿 R種　小型	口径（6.8）cm　底径4.45cm　器高2.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は赤色粒子・雲母片・微砂粒含む淡橙色弱粉質土
17	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径5.7cm　器高1.75cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・雲母片・砂粒含む淡橙色弱砂質土　外底面から２孔貫通、それを結ぶ幅0.2 ～ 0.3cm、深さ0.2cmの溝を刻む　全体に薄く煤付着
18	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	土師器皿 R種　大型	口径（11,2）cm　底径（7.2）cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に強い板状圧痕　胎土は赤色粒子・雲母片・砂粒・泥岩粒含む淡橙色弱砂質土　口縁部に油煤付着
19	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	瀬戸　卸し皿	口縁部～体部片　ロクロ成型　胎土は黄灰色　灰釉、二次焼成を受け口縁部の内側が剥離
20	Ⅲｂ面	Ⅰ区竪穴１	平瓦	厚さ（2.7）cm　胎土は長石粒・石英粒・多量の砂を含む灰色土　凹面は糸きり痕、凸面は不明　八事裏山窯　永福寺女瓦F類と同類
図13-1	Ⅲｂ面	土坑１０	土師器皿 R種　小型	口径（7.8）cm　底径（5.5）cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底面糸切り　内底部ナデ 胎土は淡褐色赤色粒子・海綿骨芯・雲母片・泥岩粒を含む弱砂質土
2	Ⅲｂ面	土坑１０	土師器皿 R種　大型	口径12.7cm　底径6.8cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
3	Ⅲｂ面	土坑１０	土師器皿 R種　大型	口径（11.3）cm　底径（7.0）cm　器高3.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む淡橙色弱砂質土　口縁部と内底面に油煤少量付着
4	Ⅲｂ面	土坑１０	漆器皿	口径（8.8）cm　高台径（7.7）cm　器高1.05cm　無高台　外底面を除き黒色漆が塗られる　　施文無し
5	Ⅲｂ面	土坑１０	木製　櫛	残存長（3.4）cm　残存幅（8.2）cm　最大厚0.7㎝　施漆なし
6	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む灰黄色弱砂質土
7	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.4cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・礫・雲母片含む灰黄色弱砂質土
8	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径5.5cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・礫含む淡橙色弱砂質粗土
9	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.5cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色弱砂質粗土
10	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径4.8cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は白色粒子・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む灰黄色砂質土
11	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.1cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む灰黄色砂質土
12	Ⅲｂ面	土坑５	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.0cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む橙色弱砂質土
13	Ⅲｂ面	土坑５	鉄釘	長4.0cm　幅0.3cm　厚0.5cm　重量1.8ｇ
14	Ⅲｂ面	土坑５	元豊通寶	初鋳1078年　北宋　篆書
15	Ⅲｂ面	土坑５	箸状木製品	長16.8㎝　幅0.6㎝　厚0.55㎝　両口
16	Ⅲｂ面	土坑５	箸状木製品	長17.8㎝　幅0．55㎝　厚0.3㎝　両口
17	Ⅲｂ面	土坑５	箸状木製品	長17.5㎝　幅0.7㎝　厚0.55㎝　両口

表5　出土遺物観察表（5）

挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
18	Ⅲb面	土坑5	箸状木製品	長18.0㎝　幅0.9㎝　厚0.85㎝　両口
19	Ⅲb面	土坑5	箸状木製品	長19.2㎝　幅0.7㎝　厚0.35㎝　両口
20	Ⅲb面	土坑5	箸状木製品	長18.8㎝　幅0.4㎝　厚0.4㎝　両口
21	Ⅲb面	土坑5	箸状木製品	長21.5㎝　幅0.75㎝　厚0.45㎝　両口
22	Ⅲb面	土坑5	漆器椀	口径（9.2）cm　高台径（7.0）cm　器高1.3cm　平高台　外側は外底面も含め黒色漆塗、中央付近に歪な輪型の線刻あり　内面は鈍い朱色の漆を粗く塗ってある　施文無し
図14-1	Ⅲc面	P.18	土師器皿 R種　小型	口径7.4cm　底径5.2cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む淡橙色砂質土
2	Ⅲc面	P.18	土師器皿 R種　小型	口径7.3cm　底径5.0cm　器高1.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む灰黄色弱粉質土
3	Ⅲc面	P.18	土師器皿 R種　大型	口径（11.8）cm　底径8.2cm　器高3.3cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒含む淡橙色弱粉質土
4	Ⅲc面	P.18	土師器皿 R種　大型	口径（12.6）cm　底径8.0cm　器高3.5cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・微砂粒・泥岩粒含む橙色弱粉質土
5	Ⅲc面	P.18	漆器皿	口径8.8cm　底径6.8cm　器高1.2cm　無高台　内・外面とも黒色漆塗、内側に朱漆の手描き文で波・松・笹・草を組み合わせた情景文　外側は縁付近二箇所草上状の文様
6	Ⅲc面	P.18	漆器椀	高台径（7.1）cm　輪高台　全体に黒色漆塗、内底面に朱漆の手描きで楓文
7	Ⅲc面	P.18	漆皮膜	腐食が激しく皮膜部が残る　椀の外側部分と思われる　黒漆に朱漆の手描きで、亀甲の中に花菱文と波文を配す
8	Ⅲc面	P.18	漆皮膜	腐食が激しく皮膜部が残る　椀の外側部分と思われる　黒漆に朱漆の手描きで、亀甲の中に花菱文と波文を配す
9	Ⅲc面	P.18	漆皮膜	椀か皿の内側、見込みの中央部分と思われる　朱漆塗りに黒漆の手描きで亀甲の中に花菱文と波文を配す　図14－7・.8と配色が逆の同タイプの意匠
10	Ⅲc面	P.18	漆皮膜	椀か皿の外底部と思われる　黒漆に朱漆の手描きで「九」の文字
図15-1	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.5cm　底径4.8cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む淡橙色弱砂質土　薄く煤付着
2	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.7cm　底径5.2cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色弱砂質土
3	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.8）cm　底径（8.8）cm　器高4.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は赤色粒子・海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片含む橙色弱砂質土　内・外側とも少し煤付着
4	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.5）cm　底径（7.6）cm　器高3.0cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色弱砂質土
5	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	土錘	残存長（4.1）cm　最大幅1.4cm　孔径0.6cm　胎土は灰橙色　表面は磨耗
6	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石の微～小石を多く含む粗い暗灰～暗橙色土　器表は暗茶色 小片のため使用痕は不明
7	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石粒・黒色粒子を含む灰色土　器表は茶色 小片のため使用痕は不明
8	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は長石・石英粒・気孔・砂粒を含む粘性の強い灰色土　器表は暗灰褐色　縁帯～頸部にかけて多量の降灰
9	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	釘	残存長（7.1）cm　幅0.6cm　厚0.4㎝　重量2.8 g
10	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	漆器皿	口径8.8cm　底径7.0cm　器高1.3cm　無高台　内・外面とも黒色漆塗、朱漆の手描き文で草文（菊葉か）
11	Ⅲd面	Ⅲd面包含層	漆器皿	口径（7.9）cm　底径（5.3）cm　器高0.95cm　無高台　内・外面とも黒色漆塗、内底面に朱漆で植物文（松）らしき押印
図16-1	Ⅲd面	柱穴列1 P，2	土師器皿 R種　小型	口径7.2cm　底径5.2cm　器高1.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む黄色灰色砂質土
図17-1	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.7）cm　底径（5.4）cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子む橙色弱粉質土
2	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.75）cm　底径（5.45）cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・礫含む淡橙色弱砂質土
3	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.2cm　底径7.65cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む橙色弱粉質土
4	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.15）cm　底径（8.7）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む淡橙色弱粉質土　内底部に油煤少し付着
5	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.7）cm　底径（7.5）cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は砂粒・赤色粒子・雲母片・白色粒子含む淡橙色弱砂質土
6	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片　高台径（12．0）cm　輪積み成形　胎土は長石・石英粒・黒色粒・砂粒を含む灰色土　体部下位は使用により磨耗、煤付着　高台の畳み付き部分に切れ込みが入る
7	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	漆器皿	底径6.2cm　輪高台　内・外面とも黒色漆塗、内側に朱漆の手描き文で笹を組み合わせた情景文
8	Ⅳa面	Ⅳa面包含層	木製品 雲形　肘木	残存長（6.2）㎝　残存幅（1.9）㎝　厚0.8㎝　上面・側面の取り付け部分以外は黒漆塗り
9	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.75cm　底径5.85cm　器高1.45cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む淡褐色弱砂質土　口縁部に油煤少量付着
10	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.55cm　底径5.35cm　器高1.7cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・大きめの礫粒・雲母片含む黄灰色弱砂質土　口縁部に油煤付着
11	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.15cm　底径5.1cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は微砂粒・雲母片含む淡黄褐色弱砂質土　口縁部に油煤付着
12	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　中型	口径0.55cm　底径6.45cm　器高3.05cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・赤色粒子少量含む橙色粉質土
13	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.1cm　底径7.8cm　器高3.45cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む淡茶褐色弱砂質土　内・外側に煤付着
14	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　大型	口径(12.7)cm　底径（8.2）cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む橙色弱粉質土
15	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（11.8）cm　底径（7.45）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・大きめの礫含む淡橙色弱砂質土　内底部に煤付着
16	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	瀬戸内型 瓦器	口径（12.8）cm　底径（6.8）cm　器高2.85cm　右回転ナデ成形　底部回転ヘラ削り　内底部ナデ　胎土は微砂粒・白色粒子・雲母片含む灰黒色、硬く焼きしまる　口縁部付近は炭素吸着がされておらず灰白色を呈す
17	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	土師質 火鉢	口縁部片　輪積み成形　胎土は白色粒・砂粒・気孔・礫を含む暗灰色土　器表は橙色

表6　出土遺物観察表（6）

挿図番号	層位	出土遺構	種　別	観　察
18	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は石英粒・黒色粒を含む灰色土
19	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	常滑 片口鉢Ⅰ類	底部片　高台径（12.1）cm　輪積み成形　胎土は石英粒・砂粒・黒色粒・気孔を含む灰色土　内底面は使用により磨耗
20	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	鉄釘	残存長（5.5）cm　幅0.6cm　厚0.3㎝　重量3.4ｇ
21	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	漆器皿	底径（6.6）cm　輪高台　内・外面とも黒色漆塗、内底面に朱漆の手描き文で草（葦か？）
22	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	連歯下駄	歯部分　残存高（5.2）cm　残存幅（8.2）cm　最大厚1.9㎝
23	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	用途不明木製品	残存長（9.7）cm　幅1.2cm　厚0.4㎝　形は竹とんぼに似る
24	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	ヘラ状木製品	残存長（15.2）cm　幅2.3cm　厚0.45㎝　先端は円く薄く削る
25	Ⅳb面	Ⅳb面包含層	箸状木製品	長19.2㎝　幅0.5㎝　厚0.45㎝　両口
図18-1	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（6.95）cm　底径4.8cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・泥岩粒含む黄灰色砂質土
2	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	土師器皿 R種　小型	口径6.8cm　底径5.1cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・赤色粒子・砂粒・泥岩粒含む黄灰色弱砂質土
3	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	土師器皿 R種　大型	口径12.9cm　底径7.3cm　器高3.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は微砂粒含む橙色粉質精良土　内側の半分に厚く煤付着
4	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	南部系 卸し目入り山茶碗	底部片　高台径（6.6）cm　胎土は海綿骨芯・砂粒を含む灰色土で硬く焼き締まる　外底面糸きり、貼り付け高台で籾殻痕あり　内底面は篦で一本ずつつけた不規則な卸し目があり、磨耗はしていない
5	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	常滑　甕	口縁部片　輪積み成形　胎土は白色微粒子を含む堅緻な暗灰色土　器表は暗灰色　6a型式
6	Ⅴa面	Ⅴa面包含層	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口縁部片　ロクロ成形　素地は明灰色、黒色微粒子含む　釉は水色半透明で気泡含む　貫入あり　体部内面に擦過傷がわずかに残る
7	Ⅴa面	P.31	土師器皿 R種　大型	口径12.6cm　底径9.0cm　器高3.4cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・微砂粒・赤色粒子・泥岩粒・雲母片含む灰黄色弱粉質土　内・外面とも少量煤付着
8	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.8cm　底径6.0cm　器高1.8cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は海綿骨芯・砂粒・雲母片含む黄灰色弱砂質土
9	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	土師器皿 R種　小型	口径7.7㎝　底径5.85㎝　器高1.6㎝　右回転ロクロ　底面糸切り　外底部板状圧痕　内底部ナデ 胎土は砂粒・海綿骨芯・赤色粒子・雲母片を含む赤橙色弱砂質粗土
10	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	土師器皿 R種　大型	口径（12.25）cm　底径8.0cm　器高3.1cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　胎土は海綿骨芯・砂粒・泥岩粒・雲母片・泥岩粒含む灰黄色弱砂質土
11	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	土師器皿 T種　大型	口縁部片　胎土は白色粒子・微砂含む淡橙色弱粉質土　内側に漆状の黒色物質付着
12	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片　輪積み成形　胎土は石英粒、砂粒を含む粗い橙褐色土　器表は茶褐色　口唇部と内側に降灰　小片のため使用痕は不明
13	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	白磁 口はげ皿	口縁部片　ロクロ成型　口縁部面取り、釉ぬぐう　素地は微砂粒を含む灰白色　釉は不透明な灰緑色　貫入あり
14	Ⅴb面	Ⅴb面包含層	箸状木製品	長15.2㎝　幅0.5㎝　厚0.55㎝　両口
図19-1	Ⅴa面	段1	連歯下駄	残存長（18.6）㎝　幅9.6㎝　残存厚（3.8）㎝　前の歯の一部が炭化
2	Ⅴa面	土坑6	土師器皿 R種　小型	口径（8.2）cm　底径（6.2）cm　器高1.65cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む橙色砂質土
3	Ⅴa面	土坑6	土師器皿 R種　大型	口径（13.0）cm　底径（8.6）cm　器高3.2cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕　胎土は微砂粒・赤色粒子含む橙色弱粉質土　内面に少量煤付着
4	Ⅴa面	土坑6	渥美　壺	底部片　輪積み成形　胎土は長石微粒をわずかに含む灰色緻密土　内底面と外側下位に降灰による自然釉
5	Ⅴa面	土坑6	竜泉窯 青磁鉢	高台径（5.3）㎝　ロクロ成形　素地は黒色微粒子含む灰白色　釉は青緑色半透明　畳付きのみ露胎　内底面は使用による擦過傷残る
6	Ⅴa面	土坑6	筒形木製品	残存長（12.9）cm　外径幅1.2～1.3cm　内径1.6cm　上端から中位にかけて径0.3cmほどの差込み孔あり
7	Ⅴa面	土坑6	部材	残存長（18.1）cm　幅2.2cm　厚1.0cm　不規則な横位の傷あり
8	Ⅴa面	土坑6	用途不明木製品	全長20.8cm　最大径1.8cm　断面円形の棒状で中央がやや太い　両端は丸味を帯び、一端の端から0.8cmのt部分にくびれありり
図20-1	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.1）cm　底径（5.4）cm　器高1.9cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に板状圧痕 胎土は白色粒子・砂粒・赤色粒子・雲母片含む黄灰色弱砂質土　内側に薄く煤付着
2	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	土師器皿 R種　小型	口径（7.8）cm　底径（6.2）cm　器高1.6cm　右回転ロクロ　底部糸切り　内底部ナデ　外底部に薄く板状圧痕　胎土は海綿骨芯・砂粒・赤色粒子・雲母片含む黄灰色砂質土
3	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	土師質　火鉢	口径(31.0）cm　底径（22.5）cm　器高9.7cm　輪積み成型　胎土は白色粒子・海綿骨芯・砂粒・礫・気孔を含む灰色砂質土　器表は灰色～灰桃色　外側口縁直下に不貫通の小孔
4	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	瓦器　火鉢	口縁から底部片　輪積み成型　胎土は砂粒・礫・雲母片を含む灰色瓦質土　器表は暗灰色　内側横位ナデ　外側指頭痕　口縁部下に孔貫通
5	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	褐釉　壺	底径(11.0)cm　輪積み成形　胎土は黒色粒子・白色粒子・茶色粒子含む灰色緻密土　明茶褐色の褐釉薬が内・外側とも薄くかかる　舶載品
6	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	竜泉窯青磁 鎬蓮弁文碗	口径(15.8)cm　高台径3.6cm　器高6.7ｃｍ　ロクロ成形　素地は堅緻な灰色土　釉は灰緑色半透明、気泡含む　貫入あり　畳み付きのみ露胎　内底面は擦過傷が残る
7	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	竜泉窯青磁 無文鉢	高台径(7.0)cm　ロクロ成形　素地は堅緻な淡灰色土　釉は灰緑色半透明　畳み付きのみ露胎　内底面は擦過傷が残る
8	Ⅵ面	Ⅵ面包含層	竜泉窯青磁 蓮弁折縁鉢	口径(12.3)cm　ロクロ成形　素地は明灰色粘質で緻密　釉は青緑色半透明　貫乳あり　体部内側に蓮弁文陰刻



	Ⅰ面		Ⅱ面		Ⅲa面		Ⅲb面		Ⅲc面		Ⅲd面	
土師器皿	31	81.58%	569	64.59%	292	46.57%	235	39.50%	49	70.00%	119	59.50%
土器	0	0.00%	1	0.11%	0	0.00%	7	1.18%	3	4.29%	1	0.50%
瓦器	0	0.00%	5	0.57%	4	0.64%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
南部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
常滑	2	5.26%	21	2.38%	53	8.45%	22	3.70%	4	5.71%	12	6.00%
渥美・湖西	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
瀬戸	1	2.63%	3	0.34%	3	0.48%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
備前	0	0.00%	0	0.00%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
瓦	1	2.63%	0	0.00%	1	0.16%	4	0.67%	0	0.00%	0	0.00%
土製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.50%
青磁竜泉窯	0	0.00%	1	0.11%	1	0.16%	0	0.00%	1	1.43%	1	0.50%
青白磁	1	2.63%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
白磁	1	2.63%	1	0.11%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
褐釉	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
鉄製品	0	0.00%	0	0.00%	2	0.32%	2	0.34%	0	0.00%	1	0.50%
銭	0	0.00%	3	0.34%	1	0.16%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	1	0.16%	2	0.34%	0	0.00%	0	0.00%
漆器	0	0.00%	7	0.79%	3	0.48%	8	1.34%	6	8.57%	4	2.00%
木製品	0	0.00%	239	27.13%	246	39.23%	302	50.76%	7	10.00%	54	27.00%
加工木材	0	0.00%	21	2.38%	4	0.64%	3	0.50%	0	0.00%	3	1.50%
石製品	0	0.00%	5	0.57%	7	1.12%	5	0.84%	0	0.00%	0	0.00%
骨角製品	0	0.00%	2	0.23%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%
骨	1	2.63%	3	0.34%	1	0.16%	0	0.00%	0	0.00%	4	2.00%
貝	0	0.00%	0	0.00%	5	0.80%	1	0.17%	0	0.00%	0	0.00%
総計	38	100%	881	100%	627	100%	595	100%	70	100%	200	100%

	Ⅳa面		Ⅳb面		Ⅴa面		Ⅴb面		Ⅵ面		調査区全体	
土師器皿	161	76.30%	153	69.55%	171	70.95%	92	74.19%	60	69.77%	1964	58.75%
土器	0	0.00%	1	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	14	0.42%
瓦器	0	0.00%	2	0.91%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	13	0.39%
南部系山茶碗	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
常滑	6	2.84%	24	10.91%	26	10.79%	14	11.29%	4	4.65%	195	5.83%
渥美・湖西	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
瀬戸	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	1.16%	10	0.30%
備前	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
瓦	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
土製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
青磁竜泉窯	0	0.00%	0	0.00%	3	1.24%	2	1.61%	4	4.65%	13	0.39%
青白磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.03%
白磁	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	1	0.81%	0	0.00%	4	0.12%
褐釉	6	2.84%	0	0.00%	1	0.41%	0	0.00%	1	1.16%	8	0.24%
鉄製品	0	0.00%	1	0.45%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
銭	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	6	0.18%
銅製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.09%
漆器	2	0.95%	3	1.36%	1	0.41%	0	0.00%	0	0.00%	34	1.02%
木製品	34	16.11%	32	14.55%	28	11.62%	12	9.68%	14	16.28%	976	29.20%
加工木材	0	0.00%	2	0.91%	3	1.24%	0	0.00%	0	0.00%	36	1.08%
石製品	1	0.47%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	19	0.57%
骨角製品	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	0	0.00%	3	0.09%
骨	1	0.47%	2	0.91%	5	2.07%	2	1.61%	0	0.00%	20	0.60%
貝	0	0.00%	0	0.00%	1	0.41%	1	0.81%	0	0.00%	8	0.24%
総計	211	100%	220	100%	241	100%	124	100%	86	100%	3343	100%

第四章　まとめと考察

１．遺構の変遷と年代

本調査の遺構群は、Ⅰ面からⅥ面まで大きく６期に区分される。しかし、これらのうちいくつかにおいてはさらに細分することが可能で、総面数は11枚におよぶ。これは整理段階で切合い関係等によって新旧を区分した結果ではなく、実際に現地で調査した面の数である。ここではそのすべてをそれぞれに独立した時期として提示し、変化を追う（図22・23）。また、北側隣地の二階堂字会下351番３で近年行われた発掘調査の成果も併せて位置を突き合わせ（伊丹まどか2010　「覚園寺旧境内遺跡（№435）二階堂字会下351番３外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』26）、考察材料に供したい（図24）。

第１期―Ⅵ面

西側１区の山裾近くの岩盤上に、やや不安定な並びながら、掘立柱建物とおぼしい柱穴がある（建物２・３）。東側は調査範囲が限られているせいもあり、建物は検出されなかった。西側の岩盤面は削平により形成され、東側低位部分を削平した土砂で埋めた可能性がある。面の年代は13世紀中葉～第３四半期で、それ以前の遺物は含まれていない。この谷の開発は、鎌倉時代前期の建保六年（1218）、北条義時が堂（大倉薬師堂）を営んだことに始まると考えてよいとすれば、あるいは安全性への配慮から掘削の及ばなかった東側の深いところに、開発当初の面が埋もれている可能性もある。

すなわち、当初の生活面はより谷中央部の川に近い低位面にあったのが、鎌倉時代中期の13世紀中葉頃山裾を削って平場を拡張しⅥ面を作り出した、という可能性を視野に入れておきたい。

第２期―Ⅴｂ面

この段階では東側に段が形成され（「段２」）、西の若干の高位面には囲炉裏の痕跡とも見える杭群が現れる。町人（まちびと）の住居の可能性があろう。面の年代は、13世紀半ば以前に属する手づくね成形の土師器を含むものの、前代Ⅵ期との相対的な関係から、この面の年代も同じく13世紀中葉～後半とみて大過あるまい。このころから薬師堂ケ谷の中に町場的な状況が形成され始めたというべきだろう。

第３期―Ⅴａ面

西側には山裾からいくらか谷中央部に寄ったところに段が現れる（「段１」）。段の高位面には泥岩が敷かれて平坦に整地され、前代に西向きの段のあった東側には柱穴様の円形小穴（P.27 ～ 31）や木製品を多く含む穴（「土坑6」）が出現し、段の高位面にも大きめの穴（「土坑9」）が掘られる。土師器皿や中国産食器などの生活遺物も増加し、この頃から谷内部の人的営為は一層活発になったと想像できる。

年代はこれも13世紀中葉～第３四半期頃とみる。

第４期―Ⅳｂ面

東側の低位域が埋められて全体に平坦な面となる。このとき、おそらく谷の中心を流れる川まで平坦部が確保されたと推測できる。この面は層位や海抜などから北側隣地の調査成果（伊丹2010－図１地点1）と連結することが可能で、それを図24に示した。地点１側では北から南に流れる浅い溝が検出されているが、本地点には続かず、延長線上にはそれに代わり板や角材などがほぼ並行して残っている。これが溝の痕跡である可能性もあるが、断面からは観察できなかった。したがって両調査地点間の未掘部分中で消滅した可能性もある。

地点１では西側に多数の小孔、東側に土坑等が見られ、人の営為が濃厚に観察される。本地点でも３基

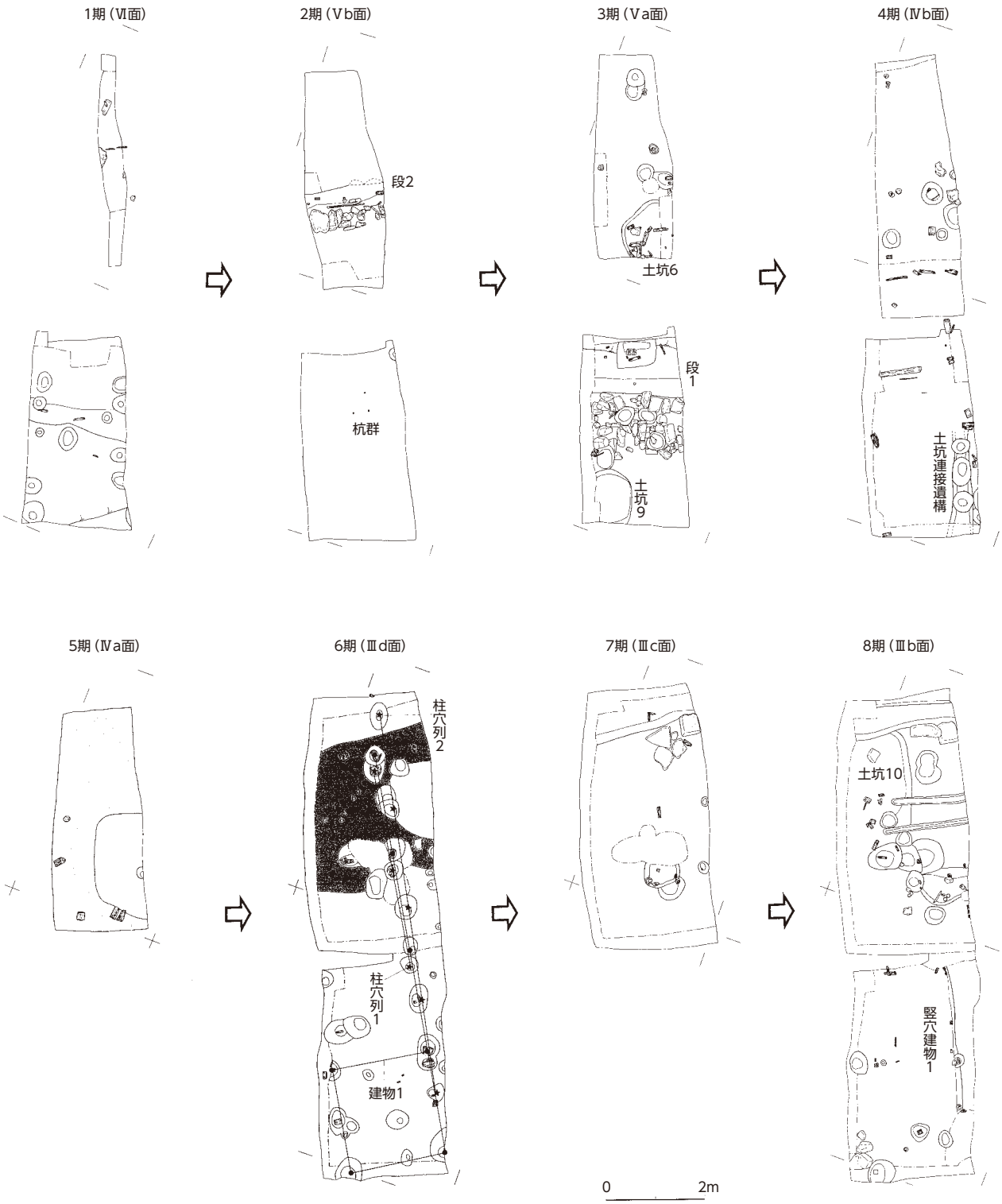


図22　遺構変遷図（1）

の土坑を１本の溝中に短い間隔で配置した遺構（「土坑連接遺構」）があるが、これはやはり陶器甕等の大型貯蔵容器を安定的に据えるためのものと考えるのが妥当であろう。現在までこの種の遺構は、寺院址や町屋など場の種類を問わず発見されている。どこで多く発見されるか、といえば、統計資料がなく不明といわねばならない。

年代は依然として13世紀中葉から、同後半をも含む。この時期、人の活動はきわめて活発だったといってよい。

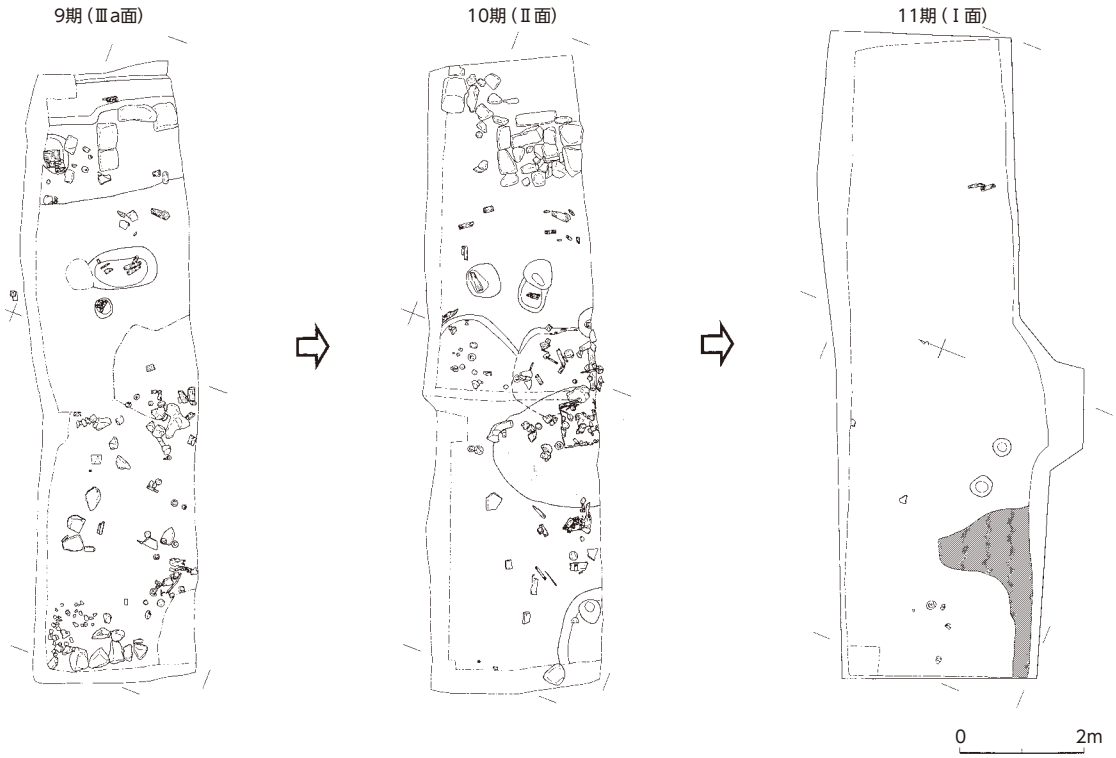


図23　遺構変遷図（2）

第５期―Ⅳａ面

東半部だけで検出された面で、表面を炭化物の層が覆う。Ⅳｂ面と同じとみていいが、上面に遺物の出土が認められるので、いちおう一時期の生活面として提示した。年代は13世紀中葉～同第３四半期。炭化層が火災の痕跡であるのは明らかだが、これが『吾妻鏡』にみえる13世紀中葉の二つの火事、すなわち寛元元年（1243）２月２日の薬師堂火災、あるいは建長三年（1251）10月７日の薬師堂ケ谷焼亡に相当するのかどうか。とくに後者は二階堂大路南辺まで延焼したとあるので、調査地点が罹災したのは間違いない。第６期のⅢｄ面を構成する大型泥岩層とあわせ、別項で検討を加えてみたい。

第６期―Ⅲｄ面

火事の後、谷は厚い泥岩地形層に覆われ、今度は掘立柱建物が建つ空間となる。火災を契機にそれまでとはまったく異なる空間利用が出現したのであり、ここにこの谷における大きな画期を見出せよう。このうち建物１の柱通りの延長線上には、北側隣地の地点１（二階堂字会下351番３外地点，伊丹2010）「第３面」で発見された「遺構30」・「同31」・「同47」が、良好に載ることがわかった（図24）。この３基の遺構はいずれも礎板を持つ直径30 ～ 50㎝の円形柱穴で、本地点建物１と形状・大きさが共通する。おそらく同一の建物である可能性が高い。そうであればここには少なくとも東西４間×南北４間の建物が建っていたことになる。ただし、東方向への広がりについては、調査区内では見つかっていない溝がすぐ先にあることが確実なので、考えにくい。道路に面して西側山裾に建物が建っていたのだろう。また４×４間以上という大きさからいって、これは例えば若宮大路西側一帯に検出される都市民の平地住居ではなく、武士の住宅、もしくは寺の施設の一部とみたい。谷の入口に近い地点３（二階堂字会下331番３外地点，降矢ほか2005）でも同様の厚い泥岩地形層があり、その上にはいくつかの小孔と溝が検出されている。

要するに、まずⅣａ面の時代に谷の中が広範囲に焼ける火事があった。火事の後、谷は大型破砕泥岩によって整地され、本地点付近には武士住居、または寺に関連する建物が建ったということになる。本地点

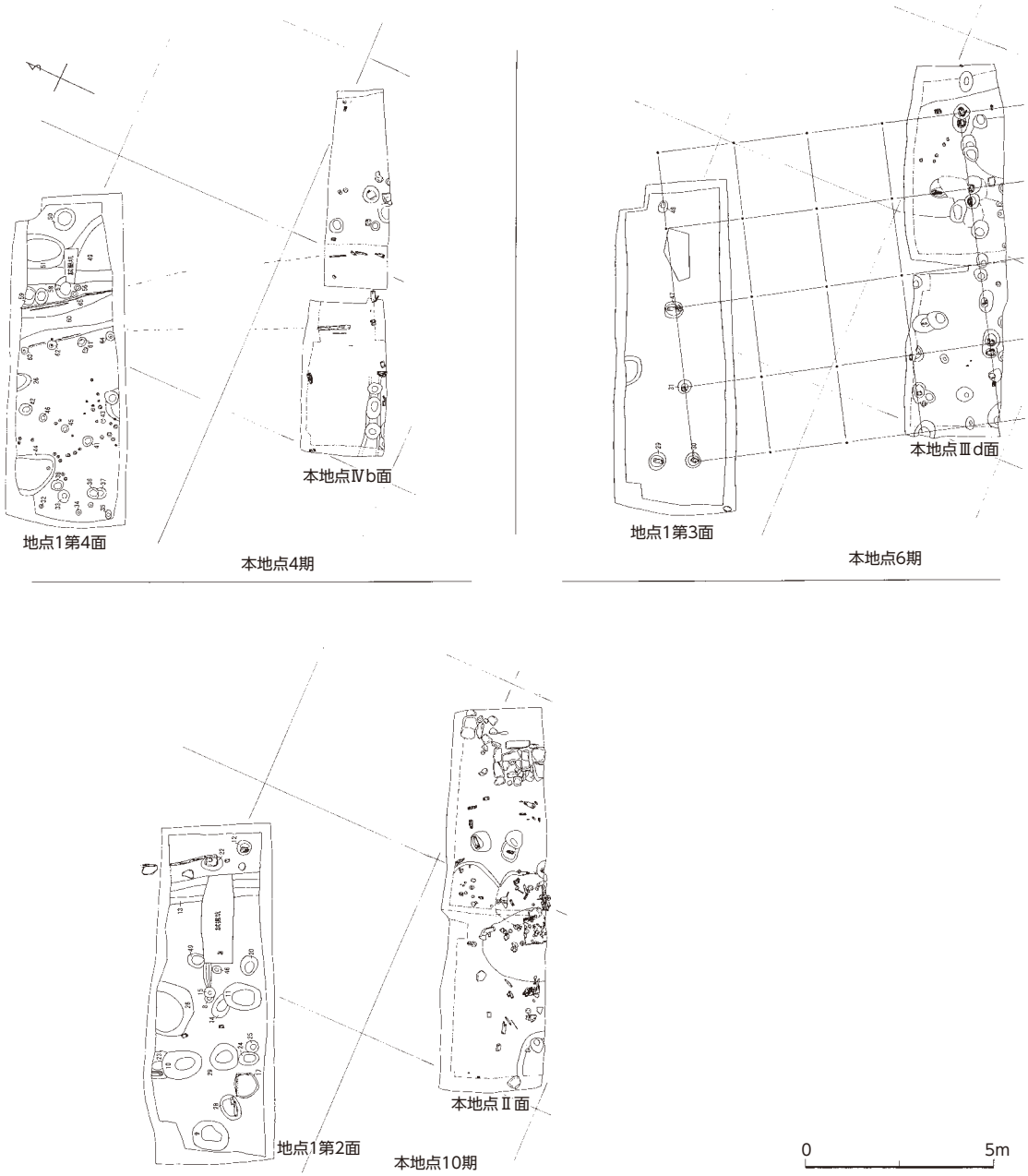


図24　近隣調査地点対応図

の辺りは、原本が永享十一年（1439）以後成立の「覚園寺境内絵図」に「二条殿跡」とある場所の北隣であり、また「門」の西脇でもある。これらに関連する施設かもしれない。

年代は13世紀中葉の要素を依然として含み、同後半にいたる。

第7期―Ⅲc面

調査区東半部に検出された面。東端に再び明瞭な溝が現れ、前代の掘立柱建物は失われる。しかし浅い穴の中に漆器椀がいくつか見え、人的営為は明瞭なので、武家屋敷的あるいは寺院的空間から別の空間に移行したということができる。性格はわからない。

年代は13世紀後半。

第８期―Ⅲｂ面

13世紀後半のあるとき建物が失われ、その後、性格不明瞭な前代７期を経て、都市民の居住施設とみられる浅い堅穴形式の建物が出現する。このとき再び場の性格が大きく変わったことがわかる。寺院の門前に町人の住居が並んだのだろうか。

第９期―Ⅲａ面

東半部に炭化物の層が広がり、西の山裾には石が並べられておそらく溝が掘られる。面上には遺物が散乱しており、一時期生活面であったのは明らかである。東端の切石を敷いた出っ張り部分が橋の一部だとすれば、場に新たな要素が加わったことになる。13世紀後半～同末期のことである。

第10期―Ⅱ面

面上中央から西半部に囲炉裏や礎板があり、また全体的にも多量の遺物が出土している。おそらくこれも都市住宅の中であろう。すると第６期以降、鎌倉時代も終わりに近い時代になってもこの地には武家屋敷的状況は戻らず、ずっと都市住民の居住域になっていたことになる。覚園寺門前に彼らの蝟集する空間が形成されていたのである。13世紀後半～鎌倉時代末期の14世紀第２四半期を含む。

第11期―Ⅰ面

本遺跡最末期の面である。このあと地形層が重ねられることはなく、13世紀代から15世紀の遺物までがここで混在している。長く生活面の更新がないまま近代を迎え、削平を受けた可能性が高い。その意味は、要するにこの地に地割の改変がなかったということであり、それはすなわち政治上・宗教上の権力の弱体化を示していると考える。

２．火災と泥岩地形層の年代的位置づけについて

薬師堂ケ谷の火事と本地点の火災層

図５の調査区南壁土層断面を見ると、Ⅳａ面を構成する土（土層番号22・25）の上面には火事とおぼしい炭の層が広がっており、その上は厚さ30～40㎝の大型破砕泥岩地形（じぎょう）層で覆われている。火災後に広範な整地（「地形」）によって生活面が更新されるのは、市内の遺跡でしばしば観察される現象である。火事を機に生活空間を新たにするのだろう。さて、記録に残る薬師堂と薬師堂ケ谷の火事は３回ある。あらためて次に挙げる。

１．寛元元年（1243）２月２日　大倉薬師堂失火、本尊は取り出した。
２．建長三年（1251）10月７日　薬師堂ケ谷焼亡、二階堂大路辺まで焼ける。
３．建武四年（1337）２月10日　火事で諸堂を失う。

以上のうち１と３では調査地点まで火が及んだかどうかはわからない。しかし２の表現は谷全体が焼失したと取れ、さらに「二階堂大路」は谷を出た先なので、調査地点が罹災したことは間違いない。とすると必ずや痕跡があるはずである。

本地点の火災痕跡は５期（Ⅳａ面）に顕著に存在する。このほか６期（Ⅲｄ面）・９期（Ⅲａ面）・11期（Ⅰ面）の各期に痕をとどめる。このうち建長年間に最も近いのは層位的に一番早い５期で、13世紀中葉～後半という遺物年代観を与えることができる。他の火災痕はこれよりもすべて後代であり、遺物年代も13世紀中葉を含まない。したがって、もしこのうちから選ぶとすれば５期しかない。では問題はそれが正しいかどうかである。

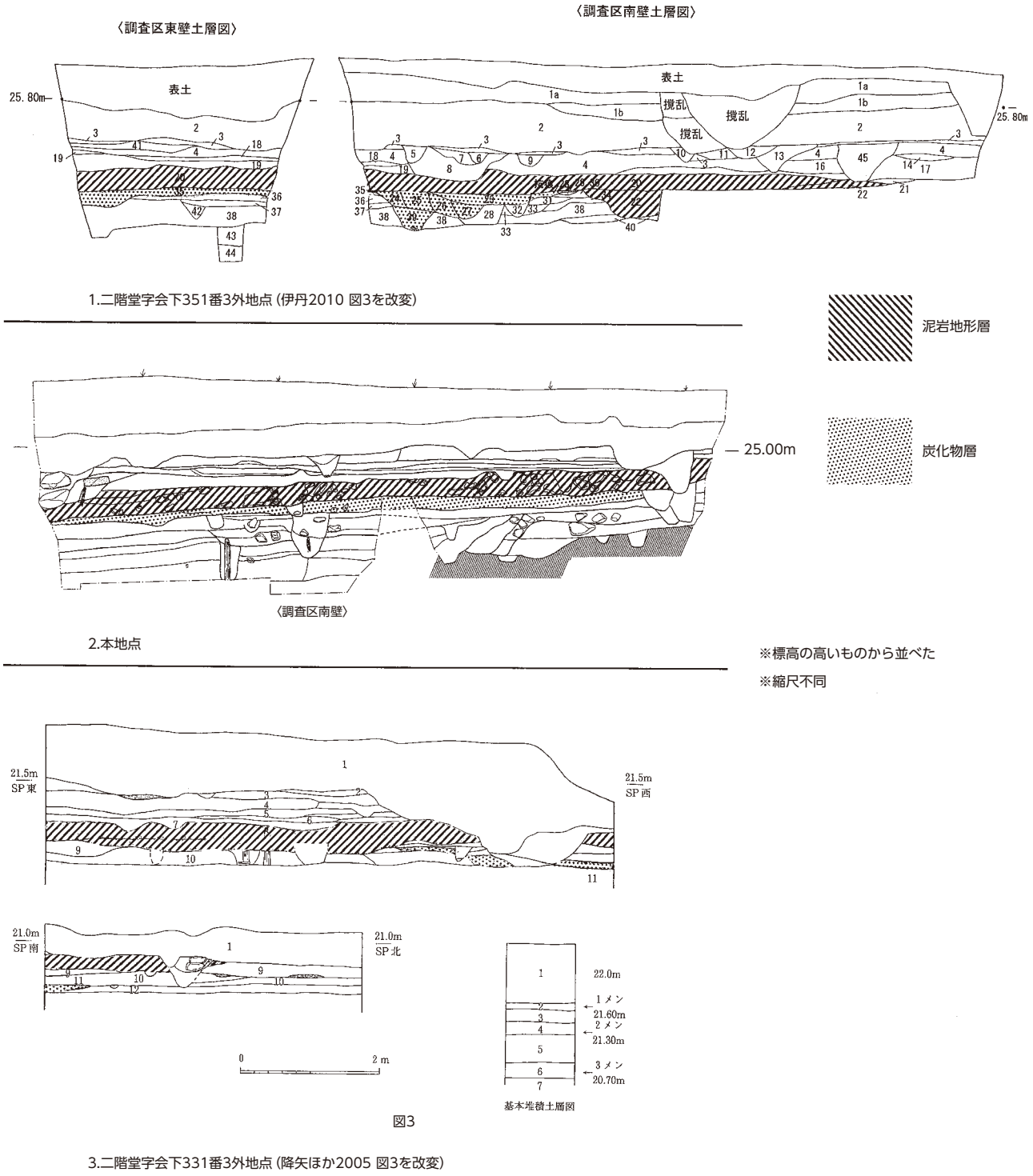


図25　泥岩地形層・炭化物層対比図

火災層上面の大型破砕泥岩層

建長三年の火事は薬師堂ケ谷全体の焼けた大火であり、そうであれば谷の中の他の場所にも痕跡がなければならない。そこでこれまでに調査された２地点、すなわち、図５地点１（二階堂字会下351番３外地点，伊丹2010）および同地点３（二階堂字会下331番３外地点，降矢ほか2005）に火事の痕跡を探してみた。すると、いずれも本地点とほぼ同一と推測される層位に、炭化物層が存在することがわかった。どの地点においても炭化物層はいくつもあるにもかかわらず、なぜそのうちの一つを特定して本地点のそれと同一

と見なしうるのか。その理由は、いずれの地点においても共通して大型破砕泥岩の厚い地形層があり、その下にこれも共通して確認できる炭の層が存在するからである。

図25は、本地点と他の２地点における炭化物層と泥岩地形層の層位的状況を対比したものである。３地点いずれにおいても、大きくみて表土を除いたほぼ３群目の面として（いずれも細かくはもっと分けられる）厚さ30～40㎝の大型破砕泥岩地形層があり、その下に炭化物層があることがわかる。そして注意すべきは、少なくとも本地点一帯の泥岩地形層の上には、それまでのいわば雑然とした状況が失せて、４×４間以上の規模を持つ掘立柱の大ぶりな建物が建つことである。地点３については、泥岩層上の遺構は不明瞭ではあるが､それでもその下の層に見える町屋的建物とは明らかに異なる小穴群が検出されている。以上の考古学的所見は次のように説明できよう。

鎌倉時代のあるとき、町場的情景の広がるこの谷の全体を嘗め尽くす火事があった。罹災後、谷の中は広範に整地され、生活面は一新された。そして本地点一帯には、それまでとはまったく異なって、武士の住居か寺の施設とおぼしい掘立柱建物が建てられた。

火災層の年代

繰り返すが、この火災層とその上の泥岩地形層は谷の中の広い範囲に及んでいる。この層から出土した土師器を見てみると、13世紀第３四半期以降盛んになる薄手で深い器種の前段階をなす、厚手で低い器高のものが主体となっている。これらは、大きく13世紀中葉頃とみて大過ない。

一方、13世紀第２四半期の後半、すなわち寛元～宝治年間頃（1240年代）に終焉を迎える京都系の手づくねのものは、ほとんど含まれていない。この事実は、この炭化層がまさしく13世紀中葉の建長年間（1249～1256）前後のものであることを示している。ところで、薬師堂ケ谷内での記録に現われた火事は先述の通りであり、なかでも建長三年のそれでは谷全体が焼けている。とすれば、Ⅳａ面の火災層かこのときのものである可能性は、きわめて高いと考える。

３．まとめ

前項の年代的定点の比定が私見でよければ、１項に述べた歴史的変遷とあわせ、本地点調査結果を次のように概括できる。

一、鎌倉時代中期の13世紀半ばに近いあるとき、この場所での人的営為が始まる（１期）。調査区内では北条義時による建保六年（1218）の大倉薬師堂創建時の様子はうかがえない。ただしこのことは、創建期から谷内に人が住み始めていた可能性を否定するものではない。それがあったとすれば、調査区のさらに東側の低位部分においてであろう（図５土層番号53以下）。

この状況はⅣ期まで続く。

二、建長三年（1251）、谷全体を焼く火事があった（５期－Ⅳａ面）。ほどなく泥岩地形によって谷の生活面は改められ、そこには掘立柱建物が建てられた（６期－Ⅲｄ面）。火事を契機にこの谷の様子は一変したことになる。「境内絵図」の「二条殿跡」に関連する建物の可能性もあろう。

三、鎌倉時代も後期の13世紀後半、掘立柱建物は消え（７期―Ⅲｃ面）、鎌倉中心部西側によくみられる町場の住宅が出現する。すなわち軽便な板壁を持つ都市住居が建つ（８期Ⅲｂ面）。この状況は14世紀半ばまで続き、その後は徐々に頽勢となって15世紀前半頃には遺跡地から賑わいは消える。

なお、北条貞時が薬師堂を覚園寺と改め泉涌寺系北京律寺院としたのは永仁四年（1296）であり、７期から10期にいたるどこかでそれは起きたはずだが、検出遺構にそのことの顕著な影響はうかがえない。

（馬淵）

図版1

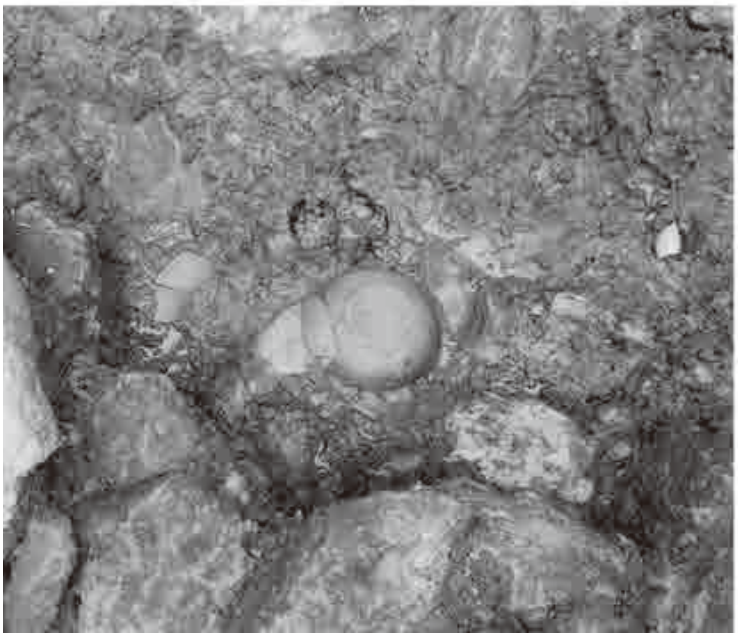
1-1 薬師堂ケ谷入口から谷奥（北）を望む

1-2 調査地点付近の薬師堂ケ谷（北から、右手の白い家の向こう側）

1-3 調査地点近景（東から）

2-1 1区Ⅰ面全景（東から）

2-2 1区Ⅰ面全景（西から）



2-3 1区Ⅰ面土師器皿（図6－2）出土状況（東から）

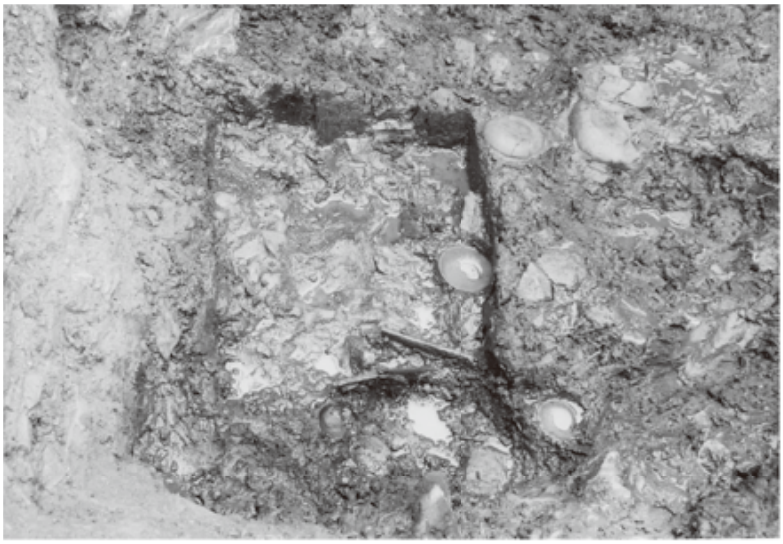
図版３

３-1　１区Ⅱ面全景（東から）

３-2　１区Ⅱ面全景（西から）

３-3　２区Ⅱ面全景（東から）

３-3　２区Ⅱ面全景（西から）

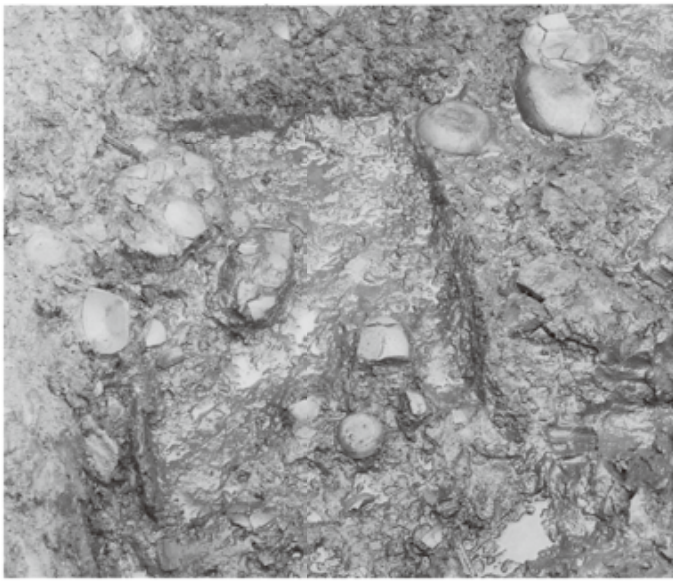


4-1　Ⅱ面囲炉裏（東から）

4-2　Ⅱ面土坑２～４　遺物出土状況（南から）

4-3　Ⅱ面石組遺構（南から）

4-4　Ⅱ面漆器椀（図８-39）出土状況（南から）



4-5　Ⅱ面囲炉裏周辺遺物出土状況（東から）

図版５

５-1　１区Ⅲａ面全景（東から）

５-2　１区Ⅲａ面全景（西から）

５-3　２区Ⅲａ面全景（東から）

５-4　２区Ⅲａ面全景（西から）

6-1 Ⅲa面1区南壁寄り遺物出土状況（南から，一部Ⅱ面遺物含む）

6-2 Ⅲa面西端の石列（北から）

6-3 Ⅲa面溝4と右岸（西岸）の石組（北から）

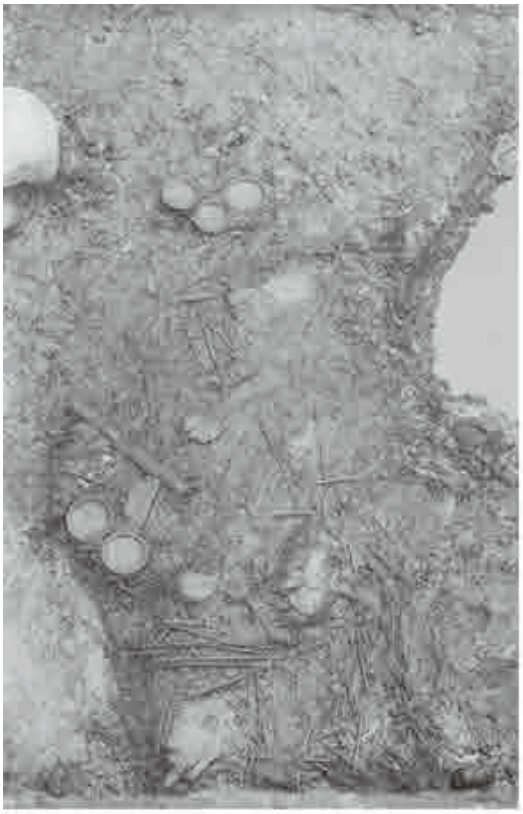
図版7

7-1　1区Ⅲb面全景（東から）

7-2　1区Ⅲb面全景（西から）

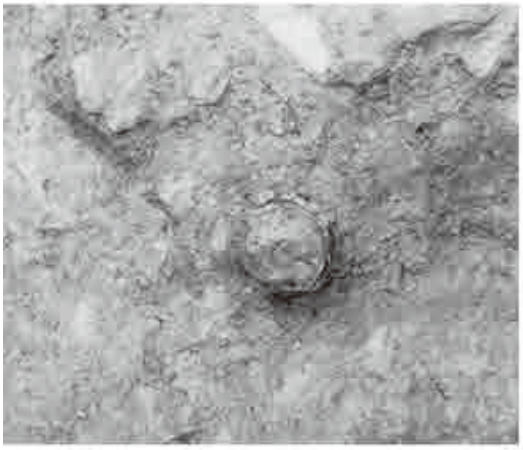
7-3　2区Ⅲb面全景（東から）

7-4　2区Ⅲb面全景（西から）

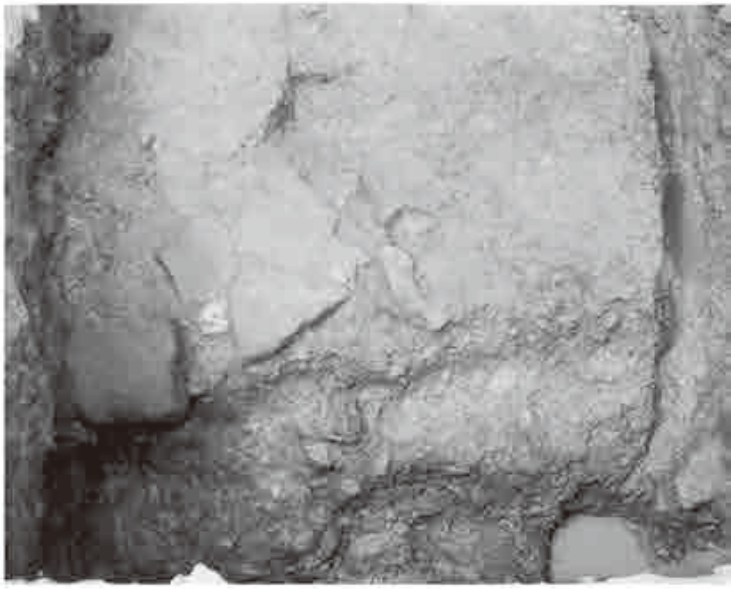


8-1 Ⅲb面土坑5（南から）

8-2 Ⅲb面竪穴建物1（東から）



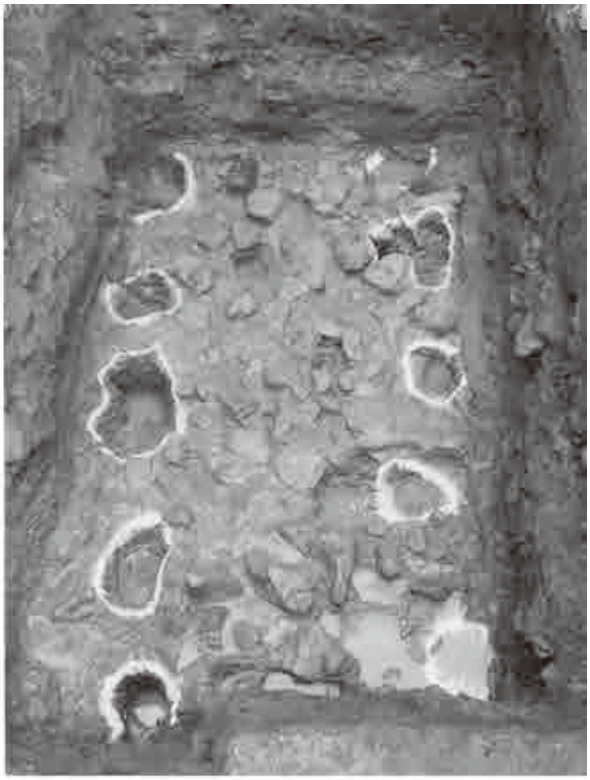
8-3 Ⅲb面漆器皿（図13－22）出土状況（西から）



8-4 Ⅲc面P.18合わせ口漆器皿（図14-5・7・8）出土状況

図版９

９-1　１区Ⅲｄ面全景（東から）



９-2　１区Ⅲｄ面全景（西から）

９-3　２区Ⅲｄ面全景（東から）

９-4　２区Ⅲｄ面全景（西から）

10-1　2区Ⅲｄ下部面全景（東から）

10-2　2区Ⅲｄ下部面全景（西から）

10-3　1区Ⅳａ面全景（東から）

10-4　1区Ⅳａ面全景（西から）

図版11

11-1　1区Ⅳb面全景（東から）

11-2　1区Ⅳb面全景（西から）

11-3　Ⅳb面土師器皿（図17-15・同-16，奥から）
出土状況（北から）

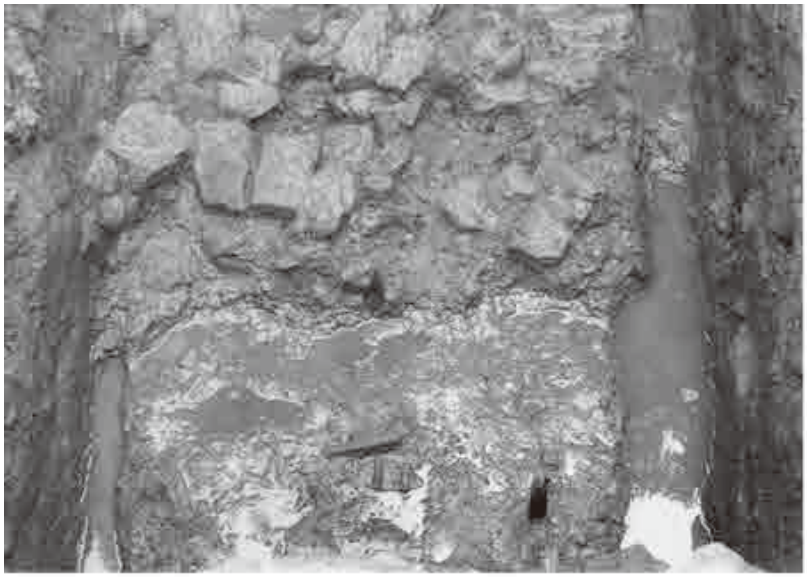
11-4　Ⅳb面土師器皿（図17-10）出土状況（西から）

12-1　1区Ⅴa面全景（東から）

12-2　2区Ⅴa面全景（東から）

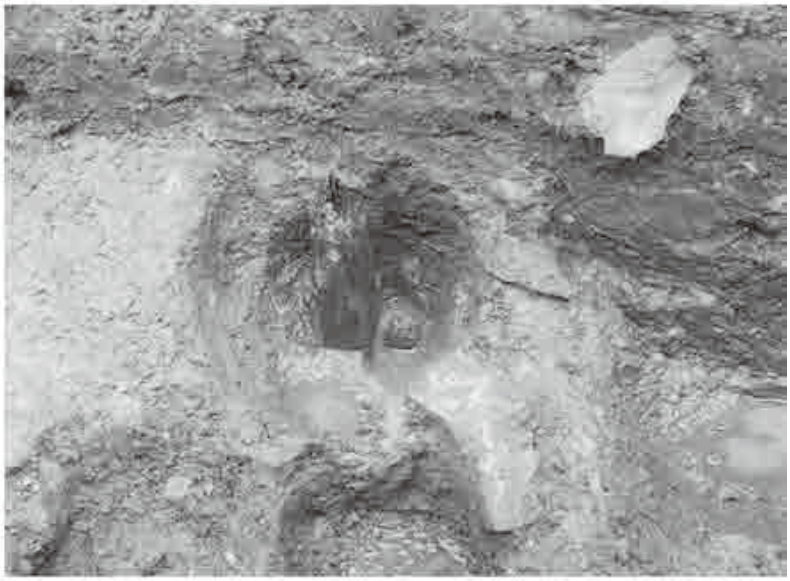
12-3　2区Ⅴa面全景（西から）

図版13

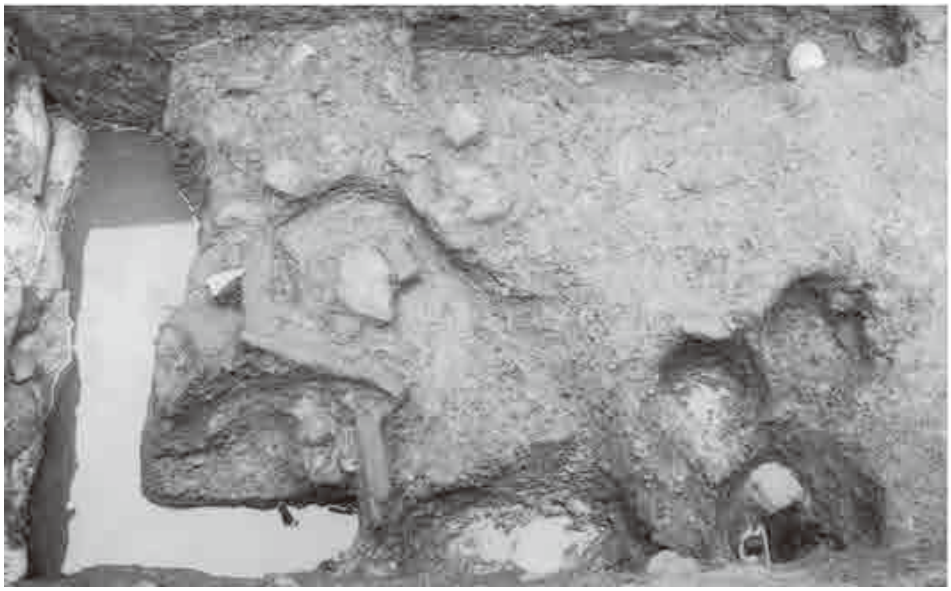


13-1　Ⅴa面段1下駄（図19-1）出土状況（東から）

13-2　Ⅴa面角柱出土状況（北から）



13-3　Ⅴa面P.29・P.30・土坑6検出状況（南から）



14-1　１区Ｖｂ面全景（東から）

14-2　１区Ｖｂ面全景（西から）

14-3　Ｖｂ面段２（南から）

図版15

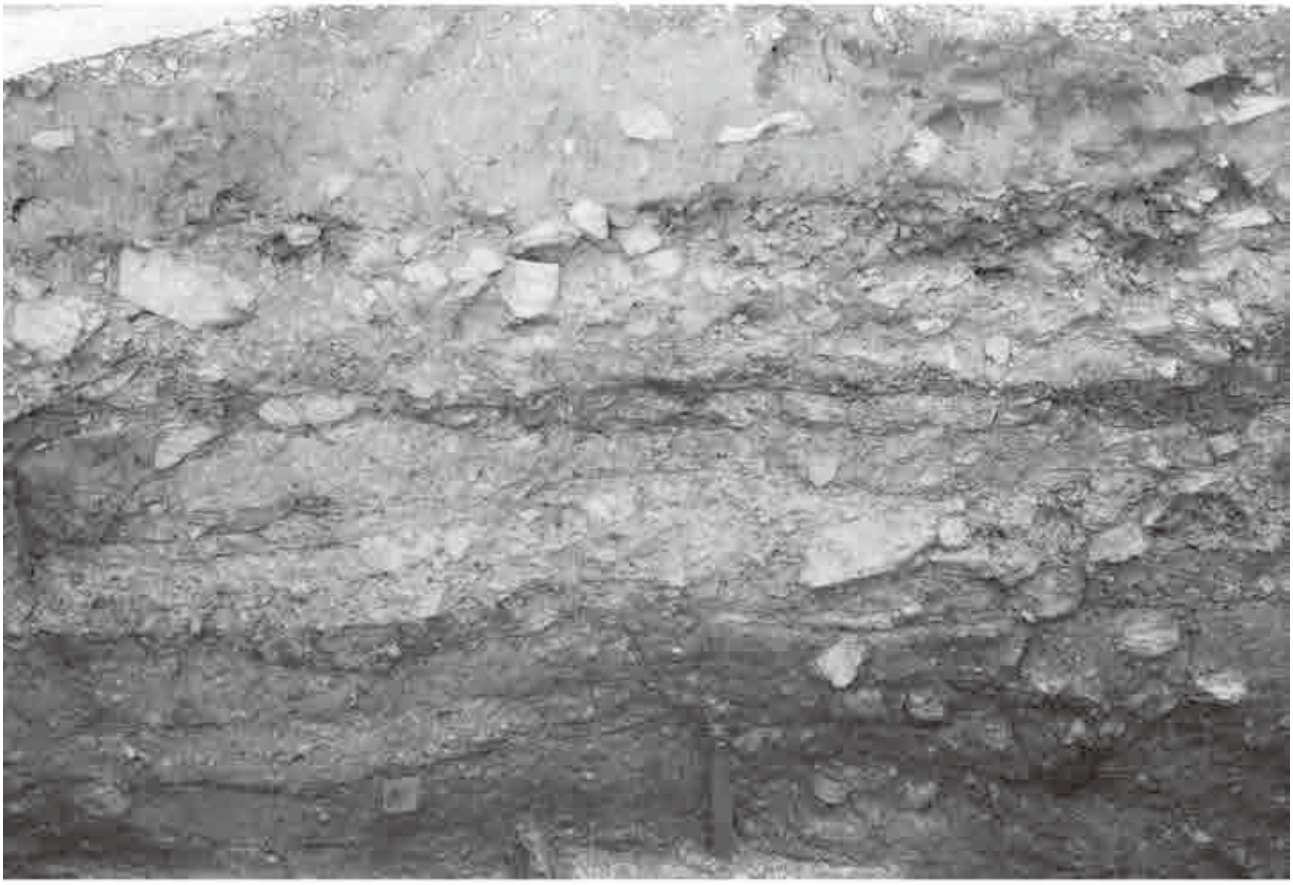
15-1　1区Ⅵ面全景（東から）

15-2　1区Ⅵ面全景（西から）

15-3　2区南壁際深掘り（東から）

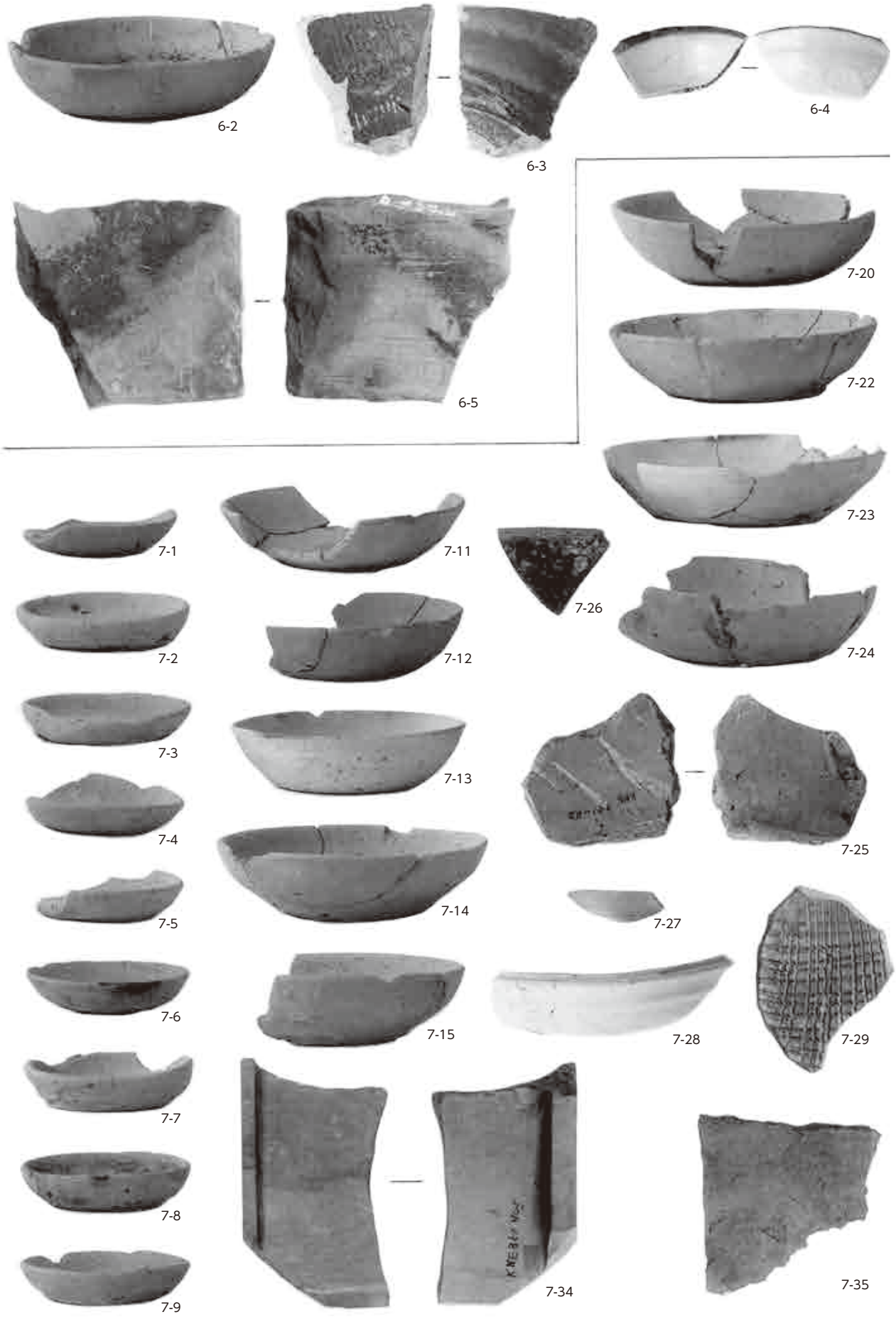
15－4　Ⅵ面青磁碗（図20-6）出土状況（南から）

16-1　1区南壁中央部土層断面



16-2　2区南壁土層断面

図版17


6-2
6-3
6-4
6-5
7-20
7-22
7-23
7-1
7-11
7-26
7-24
7-2
7-12
7-3
7-13
7-25
7-4
7-14
7-27
7-5
7-6
7-15
7-28
7-29
7-7
7-8
7-34
7-35
7-9

出土遺物1

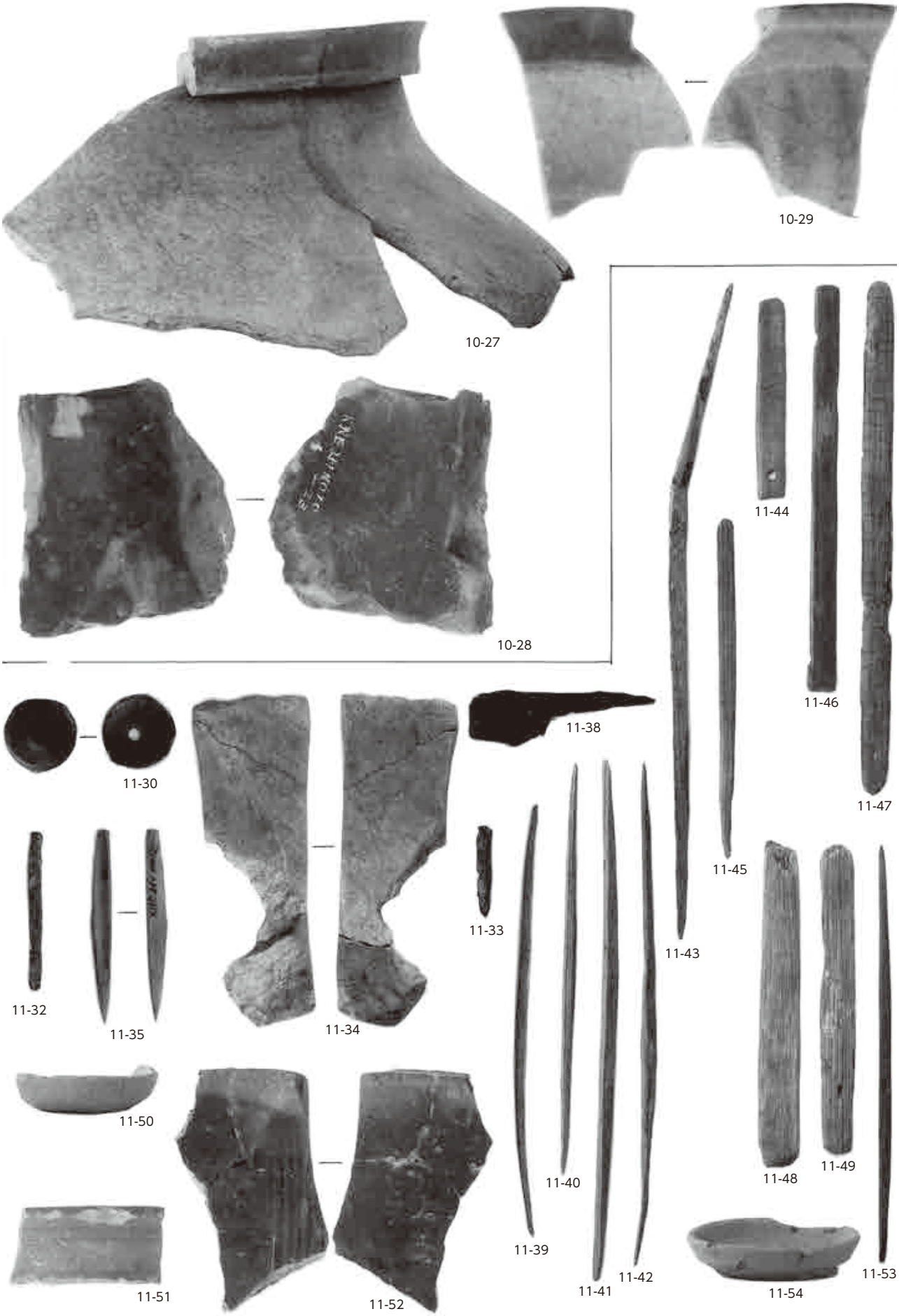
8-36
8-40
8-37
8-38
8-41
8-39
8-47
8-43
8-42
8-44
8-45
8-46
8-49
9-2
9-4
9-5
9-11
9-12
9-13
9-7
9-8
9-9
9-10
9-14
9-16
9-15
9-18
9-6

出土遺物２

図版19

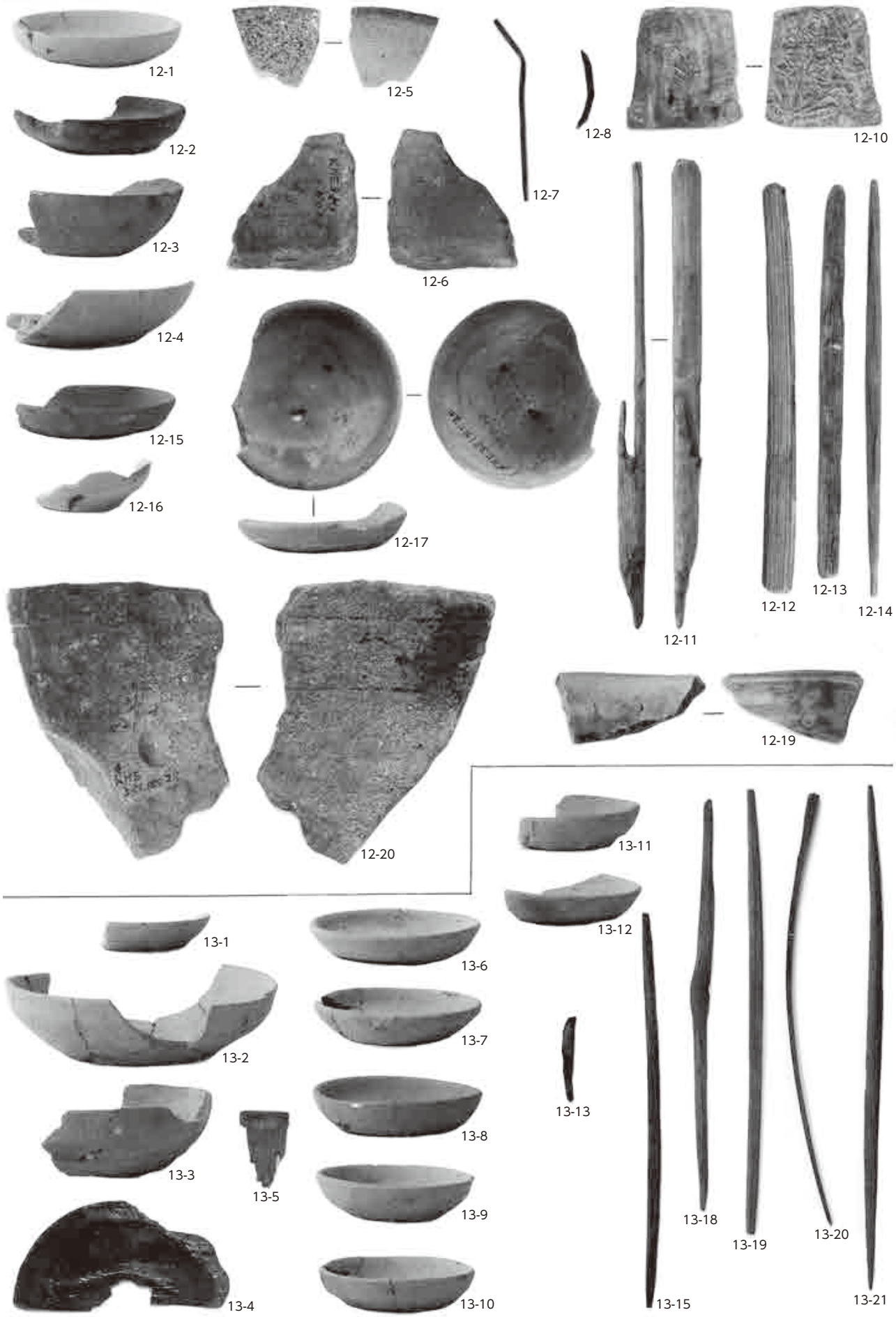
9-19
9-20
9-21
9-23
9-22
9-25
9-27
10-1
10-5
10-2
10-6
10-9
10-3
10-7
10-10
10-13
10-4
10-8
10-11
10-14
10-15
10-18
10-12
10-19
10-16
10-20
10-17
10-22
10-25
10-21
10-26
10-23

出土遺物３

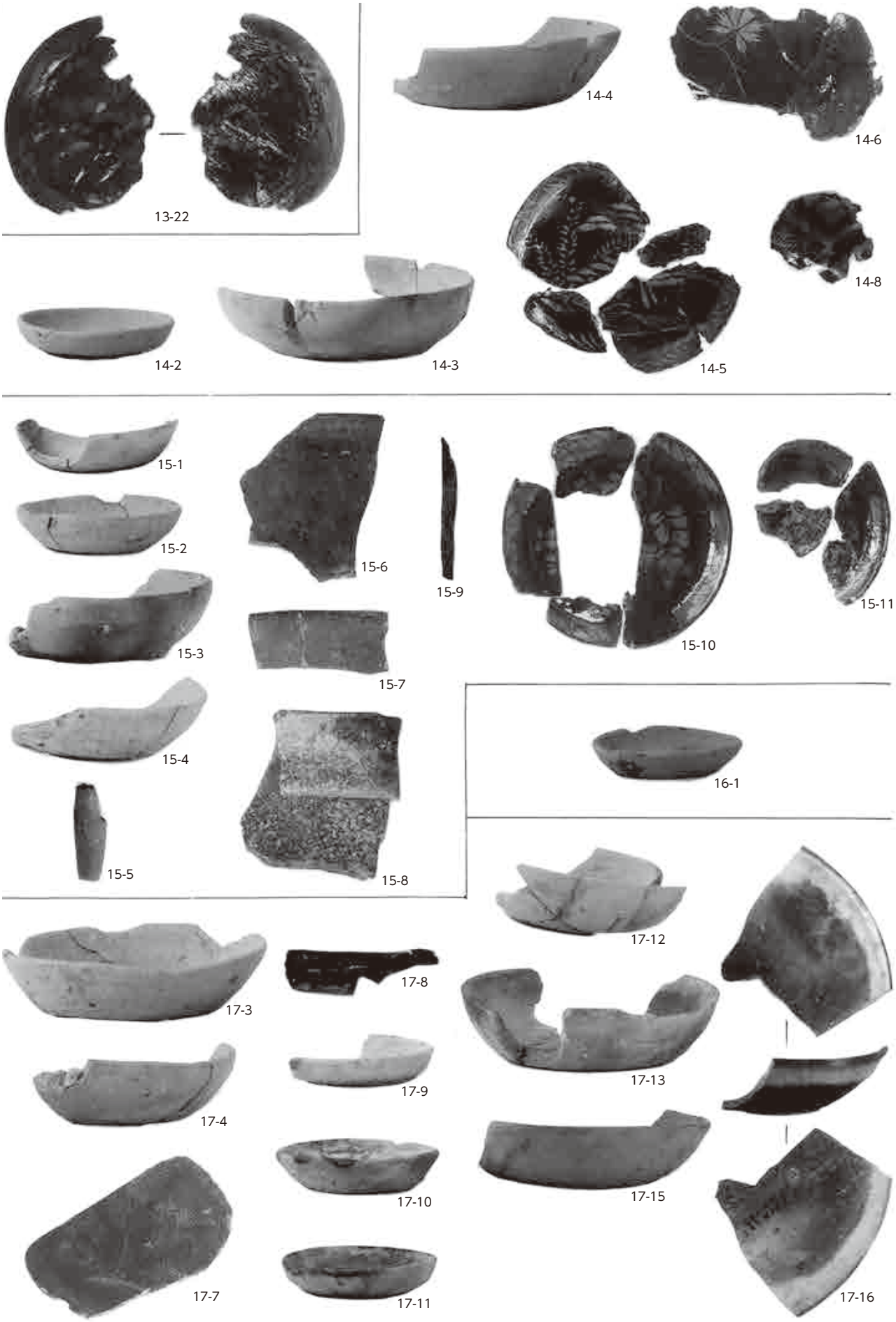

10-27
10-29
10-28
11-44
11-46
11-47
11-45
11-43
11-38
11-30
11-33
11-32
11-35
11-34
11-50
11-40
11-48
11-49
11-39
11-42
11-41
11-53
11-54
11-51
11-52

出土遺物４

図版21

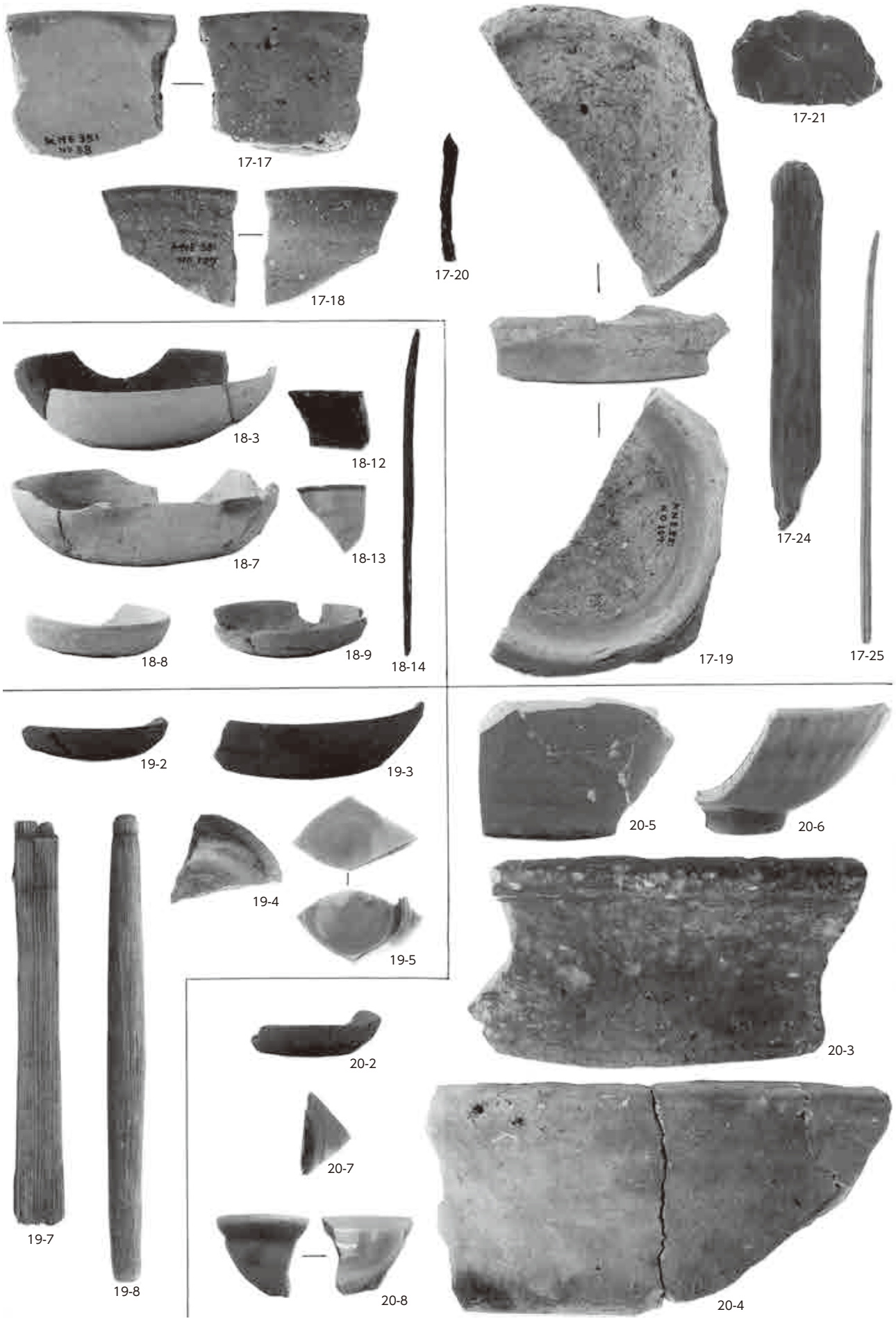

12-1
12-2
12-3
12-4
12-15
12-16
12-5
12-6
12-7
12-8
12-10
12-17
12-11
12-12
12-13
12-14
12-19
12-20
13-1
13-2
13-3
13-4
13-5
13-6
13-7
13-8
13-9
13-10
13-11
13-12
13-13
13-15
13-18
13-19
13-20
13-21

出土遺物５


13-22
14-4
14-6
14-8
14-2
14-3
14-5
15-1
15-2
15-6
15-9
15-10
15-11
15-3
15-7
15-4
15-5
15-8
16-1
17-12
17-3
17-8
17-13
17-4
17-9
17-15
17-10
17-7
17-11
17-16

出土遺物6

図版23


17-17
17-18
17-20
17-21
17-24
17-25
17-19
18-3
18-12
18-7
18-13
18-8
18-9
18-14
19-2
19-3
19-4
19-5
19-7
19-8
20-5
20-6
20-3
20-2
20-7
20-8
20-4

出土遺物７